

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第93集

NAKAYAMA

中 山 遺 跡

国道327号高速道路道路関連緊急整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道建設に伴う本線部分の発掘調査だけでなく、関連して行われる既存県道や国道の改良事業、高速道路へのアクセス道路整備などに伴う発掘調査も実施しております。

今回報告する中山遺跡は、この国道改良に伴い発掘調査された遺跡です。主として中世の陶磁器等の遺物が出土したほか、江戸時代前期から明治時代中頃にかけての墓域の一部が発掘され、墓碑銘と埋葬された人骨や副葬品などの関係のある程度明らかにすることができました。これらの成果は、この地区の該期の埋葬のあり方を考える上で貴重な資料となることでしょう。

本書に収録された記録資料類が長く活用され、地域の文化財に対する認識と理解の一助となり、また、生涯学習及び学術研究の分野において役立つことを心から願うものであります。

なお、調査にあたって御協力いただいた地元の方々をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方ならびに関係諸機関の方々に深く感謝申し上げます。

平成16年10月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 宮 園 淳 一

例 言

- 1 本書は、国道327号県単道路改良事業（のちに高速道路道路関連緊急整備事業）に伴い、宮崎県教育委員会が実施した中山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県土木部日向土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成14年7月22日から平成14年10月18日まで行った。
- 4 現地での実測・写真撮影などの記録は福田泰典、柳田晴子、丹俊詞が発掘作業員の協力を得て作成した。また、墓石の拓本は甲斐貴充、丹が行った。墓石の刻字は若山浩章氏に解読していただいた。空中写真撮影は九州航空株式会社に、人骨調査は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム松下孝幸氏、松下玲子氏、中野江里子氏、松下真実氏、小田拓磨氏に、グリッド杭設置は株式会社新産測量設計コンサルタントに委託した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。第3図のトレース、鉄器・青銅製品の実測・トレースは丹が、その他の図面作成・実測・トレースは柳田が整理作業員の協力を得て担当した。
- 6 本書で使用した位置図は日向市都市振興課発行1万分の1図、周辺地形図は日向市役所農村整備課作成2千5百分の1図を基に作成した。
- 7 土層断面及び土器・陶磁器の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。
- 8 本書で使用した方位は座標北(座標第Ⅱ系)である。レベルは海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
SX…墓
遺構図の縮尺は、特に記載のない限り
墓穴実測図……1/40、墓石実測図……1/20、墓石拓本図……1/10、出土人骨平面図……1/20
で掲載している。
- 10 本書の執筆・編集は柳田が担当した。
- 11 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	位置と環境	1
第II章	調査の概要	
第1節	層序	5
第2節	調査の経過	5
第3節	中山遺跡の遺構	7
1	柱穴群	7
2	近世墓	7
第4節	中山遺跡の遺物	26
第5節	まとめ	40
第III章	自然科学分析の結果	
	宮崎県日向市中山遺跡出土の近世人骨	49
	報告書抄録	81

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2	第31図	SX9 墓石実測図	14
第2図	周辺地形図	3	第32図	SX10墓穴実測図	15
第3図	グリッド配置図	6	第33図	SX10出土人骨平面図	15
第4図	墓石・墓穴・敷石対応図	8	第34図	SX10墓石実測図	15
第5図	SX1 墓穴実測図	9	第35図	SX10墓石拓影	15
第6図	SX1 墓石実測図・拓本図	9	第36図	SX11墓穴実測図	16
第7図	SX2 墓穴実測図	9	第37図	SX11出土人骨平面図	16
第8図	SX2 出土遺物実測図	9	第38図	SX11墓石実測図	16
第9図	SX2 墓石実測図	10	第39図	SX12墓穴実測図	16
第10図	SX2 墓石拓本図	10	第40図	SX12墓石実測図	16
第11図	SX3 墓穴実測図	10	第41図	SX12墓石拓影	16
第12図	SX3 墓石実測図	10	第42図	SX13墓穴実測図	17
第13図	SX3 墓石拓影	10	第43図	SX13墓石実測図	17
第14図	SX4 墓穴実測図	11	第44図	SX14墓穴実測図	17
第15図	SX4 墓石実測図・拓影	11	第45図	SX14墓石実測図・拓影	17
第16図	SX4 出土人骨平面図	11	第46図	SX16墓穴実測図	17
第17図	SX5 墓穴実測図	11	第47図	SX17墓穴実測図	19
第18図	SX5 墓石実測図・拓影	11	第48図	SX17出土人骨平面図	19
第19図	SX6 墓穴実測図	12	第49図	SX17出土銭貨平面図	19
第20図	SX7 墓穴実測図	12	第50図	SX17墓石実測図	19
第21図	SX7 出土人骨平面図	12	第51図	SX17墓石拓影	19
第22図	SX7 墓石実測図	12	第52図	SX18墓穴実測図	19
第23図	SX7 墓石拓影	12	第53図	SX18墓石実測図	19
第24図	SX8・15墓穴実測図	13	第54図	SX18墓石拓影	19
第25図	SX8・15出土遺物平面図	13	第55図	SX19墓穴実測図	20
第26図	SX15墓石実測図	13	第56図	SX19出土遺物平面図	20
第27図	SX15墓石拓影	13	第57図	SX19墓石実測図	20
第28図	SX9 墓穴実測図	14	第58図	SX20墓穴実測図	20
第29図	SX9 出土遺物平面図	14	第59図	SX20墓石実測図	20
第30図	SX9 出土人骨平面図	14	第60図	SX21・22墓穴実測図	22

第61図	SX21墓石実測図	22	第75図	30号墓石実測図	23
第62図	SX21墓石拓影	22	第76図	31号墓石実測図	23
第63図	SX22墓石実測図	22	第77図	出土遺物実測図(陶磁器)	26
第64図	SX22墓石拓影	22	第78図	出土遺物実測図(陶磁器)	27
第65図	SX23墓穴実測図	23	第79図	出土遺物実測図(金属製品その他)	28
第66図	24号墓石実測図	23	第80図	出土遺物実測図(金属・石製製品)	30
第67図	25号墓石実測図	23	第81図	出土遺物実測図(釘)	32
第68図	25号墓石拓影	23	第82図	出土遺物実測図(釘)	33
第69図	26号墓石実測図	23	第83図	出土遺物拓影(銭貨)	34
第70図	26号墓石拓影	23	第84図	出土遺物拓影(銭貨)	35
第71図	27号墓石実測図	23	第85図	出土遺物拓影(銭貨)	36
第72図	27号墓石拓影	23	第86図	出土遺物実測図(銭貨)	37
第73図	28号墓石実測図	23	第87図	釘分類図	46
第74図	29号墓石実測図	23	第88図	棺木目概念図	46

表 目 次

第1表	中山遺跡土層一覧	5	第9表	金属製品 遺物観察表	39
第2表	出土墓石一覧	25	第10表	石製品 遺物観察表	39
第3表	出土銭貨一覧	34	第11表	釘 遺物観察表	39
第4表	数珠玉 遺物観察表	37	第12表	中山遺跡墓石推移表	43
第5表	煙管 遺物観察表	37	第13表	埋葬施設の推移	44
第6表	陶磁器 遺物観察表	38	第14表	埋葬施設男女別一覧表	45
第7表	土師質皿 遺物観察表	39	第15表	埋葬施設年齢別一覧表	45
第8表	土人形 遺物観察表	39	第16表	遺構別出土釘数	47

図 版 目 次

図版1	中山遺跡、塩見城全景(南より)／中山遺跡全景	69
図版2	A区墓地検出状況(西より)／敷石検出状況(北西より)／墓穴検出状況(北西より)	70
図版3	1号～5号墓石、7号墓石、9号～11号墓石	71
図版4	12号～15号墓石、17号～19号墓石、21号墓石、22号墓石	72
図版5	24号墓石～27号墓石、29号墓石～31号墓石／SX19敷石検出状況	73
図版6	敷石検出状況(SX1、2、SX4、5、6、SX11、SX12・13、SX14、SX17・18、SX7・15、SX21・22)	74
図版7	墓穴完掘状況(SX1(北より)、SX3(北より)、SX4(北より)、SX5(北より)、SX6(北より)、SX7(北より)、(左から)SX10、11、9(北より)、SX10人骨出土状況、SX12(南より)、SX13(北より)、SX16(北より)	75
図版8	SX8・15人骨出土状況(西より)／SX17人骨出土状況(北より)／SX19・20検出状況(南より) SX19遺物・人骨出土状況(北より)／SX19人骨出土状況(北より)	76
図版9	SX1・2出土遺物／SX3・4出土遺物／SX7出土遺物／SX15・8出土遺物／SX9出土遺物／SX10出土遺物	77
図版10	SX11出土遺物／SX18・13出土遺物／SX17出土遺物／SX19出土遺物／SX19出土錫杖／SX19出土和鉄・小刀	78
図版11	SX5、16出土陶磁器／SX21出土土師質小皿／SX23出土陶磁器／SX9・13出土陶磁器／SX2・7出土陶器甕／中山遺跡出土陶磁器／A区出土石器・B区出土金属製品・銭貨	79
図版12	A区出土土石臼／C区出土土人形／SX8出土銭貨(繊維付着)／SX10出土銭貨(鏽に繊維痕)／SX9出土数珠玉	80

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

中山遺跡の発掘調査は国道327号県単道路改良事業に伴い実施したものである。事業地周辺に中世の山城として有名な塩見城跡があり、事業地内に塩見城関連の遺跡が存在する可能性があるため、県文化課と事業者である日向土木事務所により協議を重ねた結果、平成13年度に文化課が試掘調査を行った。その結果から発掘調査対象面積を1,500㎡に絞り、平成14年7月22日より本格的な発掘調査を開始、平成14年10月18日まで実施した。

第 2 節 調査の組織

中山遺跡の調査組織は次のとおりである。

発掘調査(平成14年度)

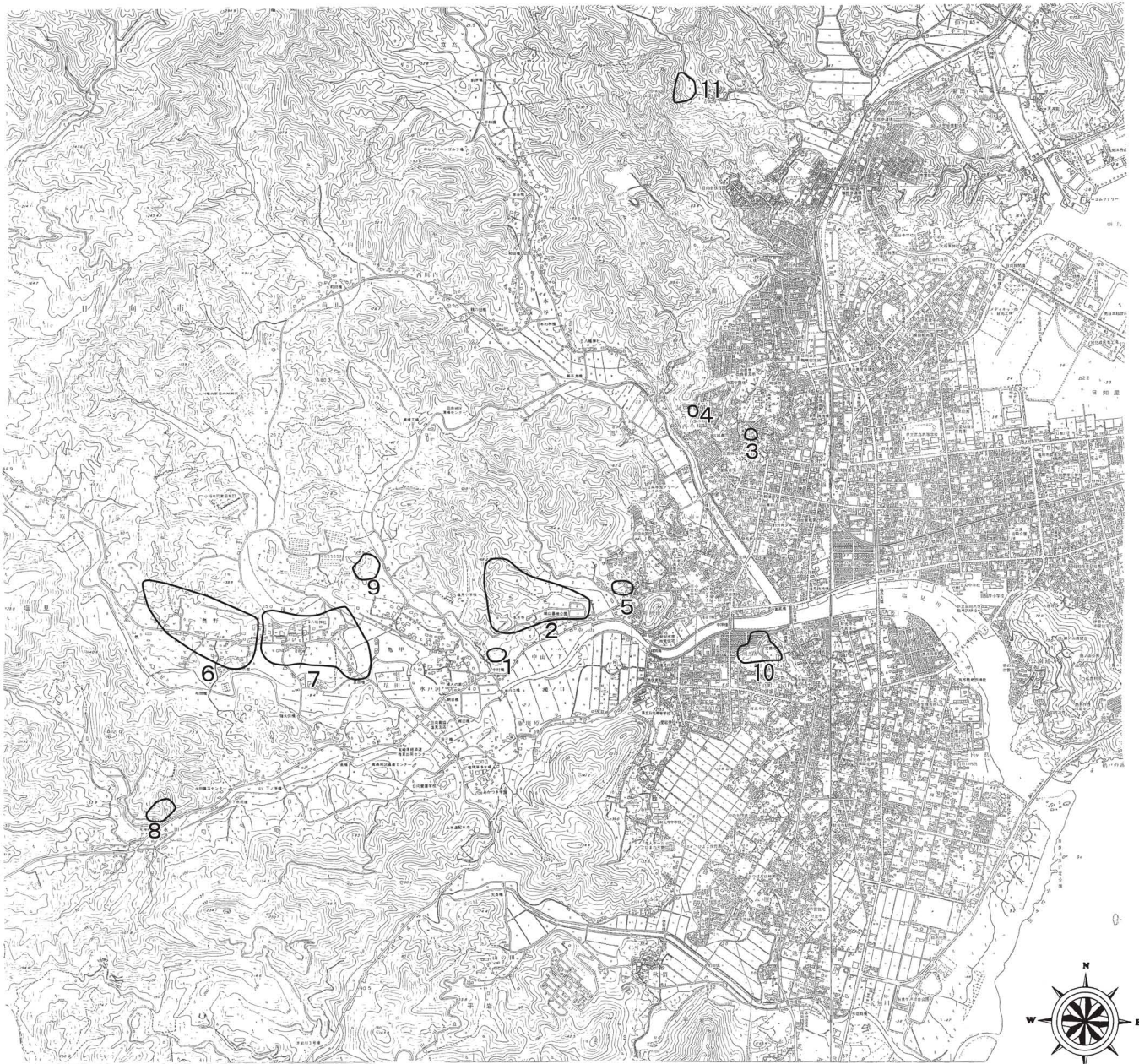
宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	米 良 弘 康
副所長兼総務課長	大 藪 和 博
副所長兼調査第二課長	岩 永 哲 夫
総務課総務係長	野 邊 文 博
調査第二課調査第三係長	菅 付 和 樹
調査第二課調査第三係主事	柳 田 晴 子 (調査担当)
同 調査員	丹 俊 詞 (調査担当)

整理作業及び報告書作成(平成15～16年度)

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	米 良 弘 康 (平成15年度)
	宮 園 淳 一 (平成16年度)
副所長兼総務課長	大 藪 和 博
副所長兼調査第二課長	岩 永 哲 夫
総務課主幹兼総務係長	石 川 恵 史
調査第二課調査第三係長	菅 付 和 樹
同 主事	柳 田 晴 子 (整理担当)



- | | | | | |
|----------|----------|----------|-----------|----------|
| 1. 中山遺跡 | 2. 塩見城跡 | 3. 富高古墳群 | 4. 西谷横穴墓群 | 5. 新財市遺跡 |
| 6. 奥野A遺跡 | 7. 奥野B遺跡 | 8. 仙洞庵遺跡 | 9. 庄手町遺跡 | |

第1図 遺跡位置図 (1 : 40000)

第3節 位置と環境

日向市は人口58,882人、世帯数22,737世帯(平成16年4月1日現在)、面積11,756km²、最高気温37.2℃(1998年計測)、最低気温-5.5℃(1985年計測)の温暖な地域である。

日向市は九州の東海岸に位置し、九州南部を南西から北東に向かって斜めに走る四万十層の山地が、ほぼ南北に日向灘に突然断ち切られる地域にあたり、海岸では、宮崎市南方から美々津へ至る著しく平滑な海岸線から、島の浦・佐伯・佐賀ノ関のリアス式海岸線に移行する部分にあたっており、リアス式の海岸とその間にある沈水型山麓線を埋めている小平野の前面を画する平滑な海岸線の交錯が特徴的である。また、山地と低地の間の台地～段丘は、狭くて断片的でしかないため沖積低地が直接または低くて狭い段丘を介して沈水型山麓に接するところが多く、沈降性の平野である。

本遺跡は日向市大字塩見字上ノ坊に所在し、南側に財光寺地区との境目を流れる塩見川より北西約50mの塩見川左岸の中位段丘上に立地している。本遺跡の周辺には縄文～古墳時代の遺物散布地である奥野A遺跡、旧石器～古墳時代の遺物散布地である奥野B遺跡、富高古墳群、そして中世の山城である塩見城跡等が所在する。また江戸時代には正法寺、栗尾神社といった寺社が付近に建立されている。現代では中山遺跡周辺は墓地として利用されており、東側には水月寺とその墓地、更に東には市営城山墓地公園が設立されている。

歴史環境

中山遺跡の所在する塩見地区は、建久9(1197)年の『日向国図田帳』に富高地区と共に宇佐八幡宮弥勒寺の所有であったと記されている。

南北朝時代には富高、塩見、美々津地区は財部土持氏の所領となった。財部土持氏は塩見・富高の両庄を守るため、塩見城を築いた。塩見城は日知屋城・門川城とともに「日向三城」の一つである。また、塩見城周辺は修験道の修行の場となっていたようである。長禄元(1457)年の小浪川の戦いで財部土持氏が滅びると、塩見地区は伊東氏所有となり、塩見城は伊東氏の族将右松氏の居城となる。その後耳川の戦い、豊臣秀吉の九州討伐を経て、美々津・幸脇地区は財部(高鍋藩)へ、富高・平岩地区は県藩(延岡藩)となる。その後塩見城は元和元(1615)年の一国一城令で廃城となった。

江戸時代には延岡藩は元禄5(1692)年、山陰村農民の逃散一揆が起因し、藩主有馬氏の転封を機に、富高・平岩・日知屋・財光寺・塩見地区を幕府直轄の天領とした。

近世の塩見地区・塩見城跡は中世に引き続き修験道の修行の場で、文政元(1818)年12月提出の「臼杵郡 宮崎郡修験書上帳」によると、光明寺(延岡市)配下の修行地であった。

慶応4(1868)年4月幕府崩壊とともに幕府直轄の天領地は延岡藩預かりとなり明治16(1883)年宮崎県が鹿児島県から独立し、次いで同22年4月に市町村制が施行され、日知屋・富高・塩見・財光寺地区の4地区を併せて富高村となった。その後大正10(1921)年に町制を施行し富高町となるが、昭和12(1937)年には細島町と合併し富島町となり、同26年には岩脇村と合併し、同30年に美々津町と合併して現在の日向市となる。

<参考・引用文献>

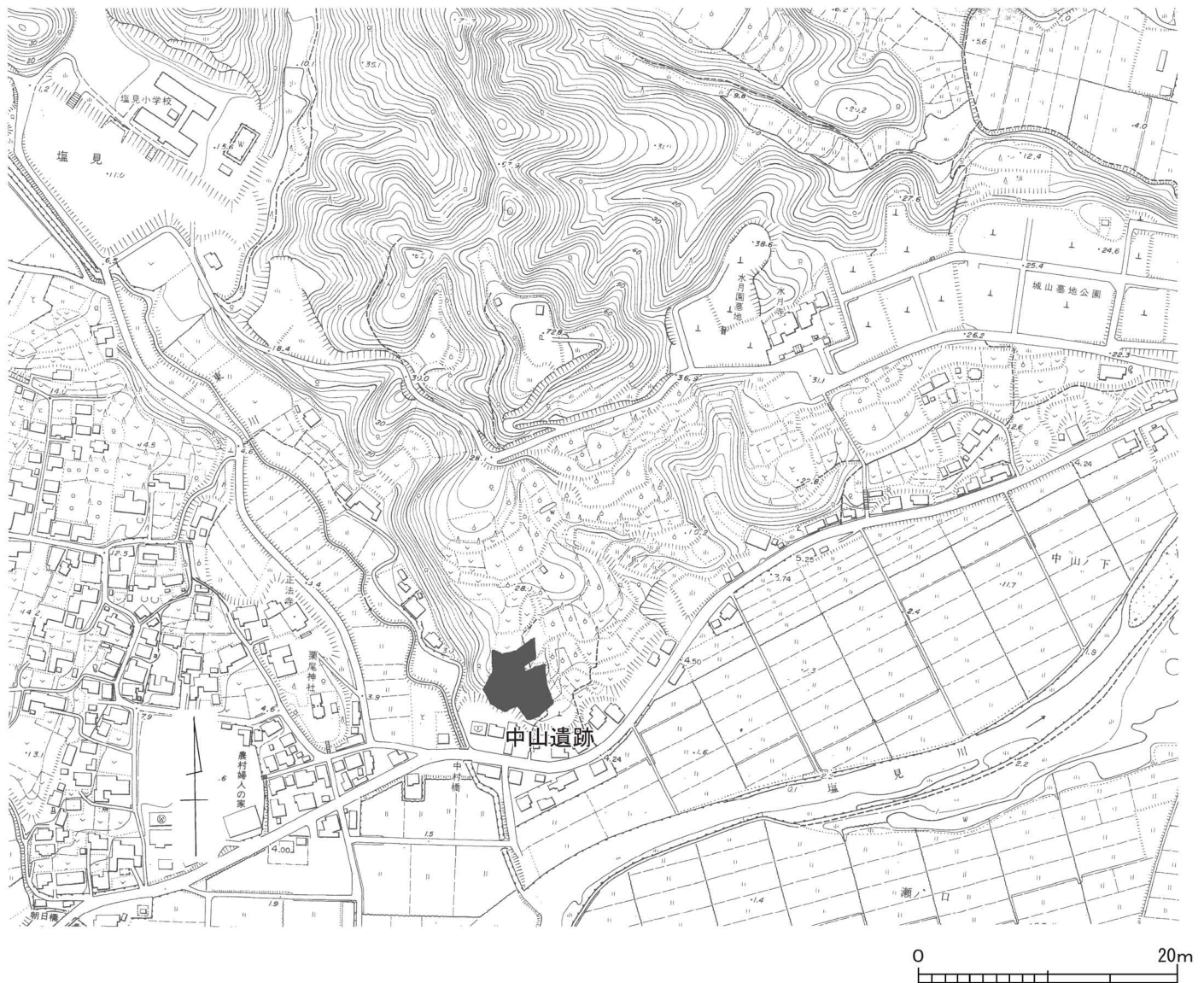
宮崎県教育委員会 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』詳説編 1999

甲斐 勝 『日向市の歴史』1973

日向市教育委員会 『日向市遺跡詳細分布調査報告書』1985

宮崎県史刊行会 『宮崎県史』資料編 考古2 1989

五来重編 澤武人「日向延岡藩の修験道」『山岳宗教研究叢書 修験道の美術・芸能・文学Ⅱ』1985



第2図 周辺地形図 (S : 1 : 5000)

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 層 序

調査前は畑地及び竹林等であったため、第Ⅰ層の表土は耕作土ないし腐植土層であった。遺物はⅡb層から出土している。墓穴はⅢ層上面で検出され、Ⅲ層の岩盤を掘り下げて作られている。

Ⅰ層	表土及び耕作土層	10～30cm
Ⅱa層	暗褐色土層 (7.5YR3/3) しまりややあり。1～2mmの炭化物を5%程度、岩盤片を5%程度含む。	40～45cm
Ⅱb層	暗褐色土層 (7.5YR3/3) 遺物包含層。Ⅱa層と同色の層だが、Ⅱa層より粘質あり。	5～10cm
Ⅲ層	岩盤	

第1表 中山遺跡土層一覧

第2節 調査の経過

調査は平成14年7月22日から開始した。最初に耕作土であるⅠ層及びⅡa層を重機で除去し、墓地周辺、A4、B4、C4グリッド内の斜面の部分は人力による表土除去作業を行った。

便宜上、標高約23mの平坦地をA区 (B2～6、C2～6、D2～5グリッド)、1段下の平坦地をB区 (C6、D5～6、E5グリッド) さらに1段低いお大師さんのある周辺の平坦地をC区 (D7、E6～7グリッド) と設定した。また、E4・5、F4・5グリッドは、トレンチによる遺構等の確認を行った結果、貯水タンク建設時の造成の際攪乱を受けていることが判明している。

その後、A区は遺物包含層であるⅡb層を人力で掘り下げていき、Ⅲ層上面で遺構検出を行った。調査区中央の平坦面は、塩見城関連の掘立柱建物跡等の遺構が期待されたが、遺構は規則性が見られないピットが約100基程度検出された程度であった。遺物は掘り下げ・検出の際に中世陶磁器等が出土している。他C2グリッドからは井戸跡が検出されたが、出土遺物から近世～現代と考えられる。

墓石は表土除去後、出土位置平面図の実測作業を行った。その後、墓石を移動させ、墓石下の敷石の検出、平面実測を行った。実測終了後に敷石を除去し、精査・検出を行い墓穴の範囲を確定し、掘り下げを開始した。墓穴は1mを超える深さがあり埋土も岩盤を砕いた脆い土であったため、作業の安全性を考慮し、堆積状況観察のための土層を残しながらの作業は実施しなかった。

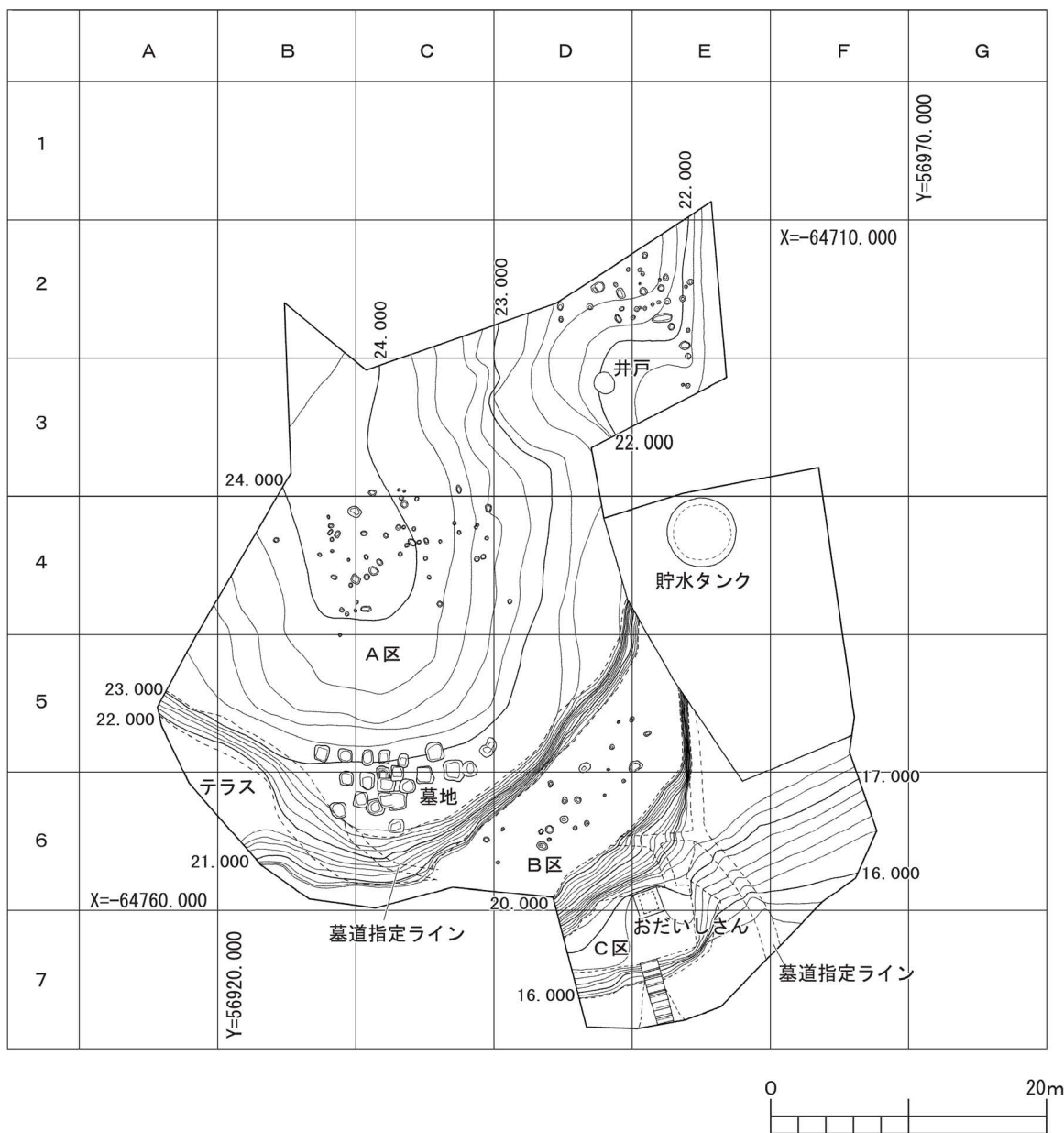
墓穴からは副葬品の他に人骨が10基より出土したが、脆弱なため現場担当者が取上げ等を行うことは困難であると判断し、土井ヶ浜人類学ミュージアムに人骨の実測・取上げ・分析を委託し、墓穴内の遺物の取上げ・墓穴の実測作業を終了させた。

その後、B区も同様に表土を重機で除去し精査した。その結果ピットを約20基検出し、遺物は近世陶磁器、寛永通宝等が数点出土した。

またこのほか調査区内の等高線図を作成した結果、墓道と想定されるくぼみ (E5～7グリッド)、A4グリッドの斜面部分のテラスも検出することが出来た。A4グリッドの斜面部分は、中世の五輪塔

が数基設置されていた場所であることから五輪塔設置のために造成されたものと考えられる(日向市教育委員会が調査後移設)。

最後に墓石の拓本・写真撮影を行い、平成14年10月18日に現地での調査を終了した。



第3図 グリッド配置図

第3節 中山遺跡の遺構

1 柱穴群

中山遺跡A区、B区合わせて約100基のピット群が検出された。A区は2D・2Eグリッド、4B・4Cグリッドの2か所に集中し、B区は全体にまばらに検出されたが、規則性のある並びをしているものは検出できなかった。

また、D3グリッドからは井戸が検出された。上面からは19世紀の陶磁器（第77図-10、12、17）が出土している。その後2m程掘り下げた地点でビニル袋が出土したため、掘り下げは中断した。使用年代は特定できないが、埋め戻されたのはごく最近であろう。

2 近世墓（第4図）

A区の南端部に23基の墓穴と、28基の墓石が検出された。また、この墓地に伴うと思われる墓道も検出された。墓道が一旦B区で切れて、再びC区で検出される点から、B区の平坦面は地山を削って作られた平坦地と思われる。また、墓道の位置から正面は南側だと考えられる。

以下、墓穴とそれに伴う墓石の説明を行う。

(1) SX1（第5図～6図）

位置 墓地北西側。SX3の西側。

墓穴 隅丸方形 長軸 1.06×短軸1.01×深さ0.93（m）

想定される埋葬方法 土葬 早桶 葬位 不明

遺物 人骨、墓石（角柱形。凝灰岩製。墓標1、台石1）、寛永通宝（6枚鑄着）、煙管1

備考 墓石は墓地全体の盛土を除去した際、墓標が台石の横に置かれた状態で出土した。台石は敷石の上であり原位置のままであると考えられる。

副葬品は鑄着して布痕のある寛永通宝6枚と煙管1点である。人骨は腐朽しており部位の特定できるものは残存していなかった。墓標の銘文から被葬者は天保九(1838)年没の成人女性（しゅん、SX3の男性の妻）である。

(2) SX2（第7図～10図）

位置 墓地北西側。SX3の南側。

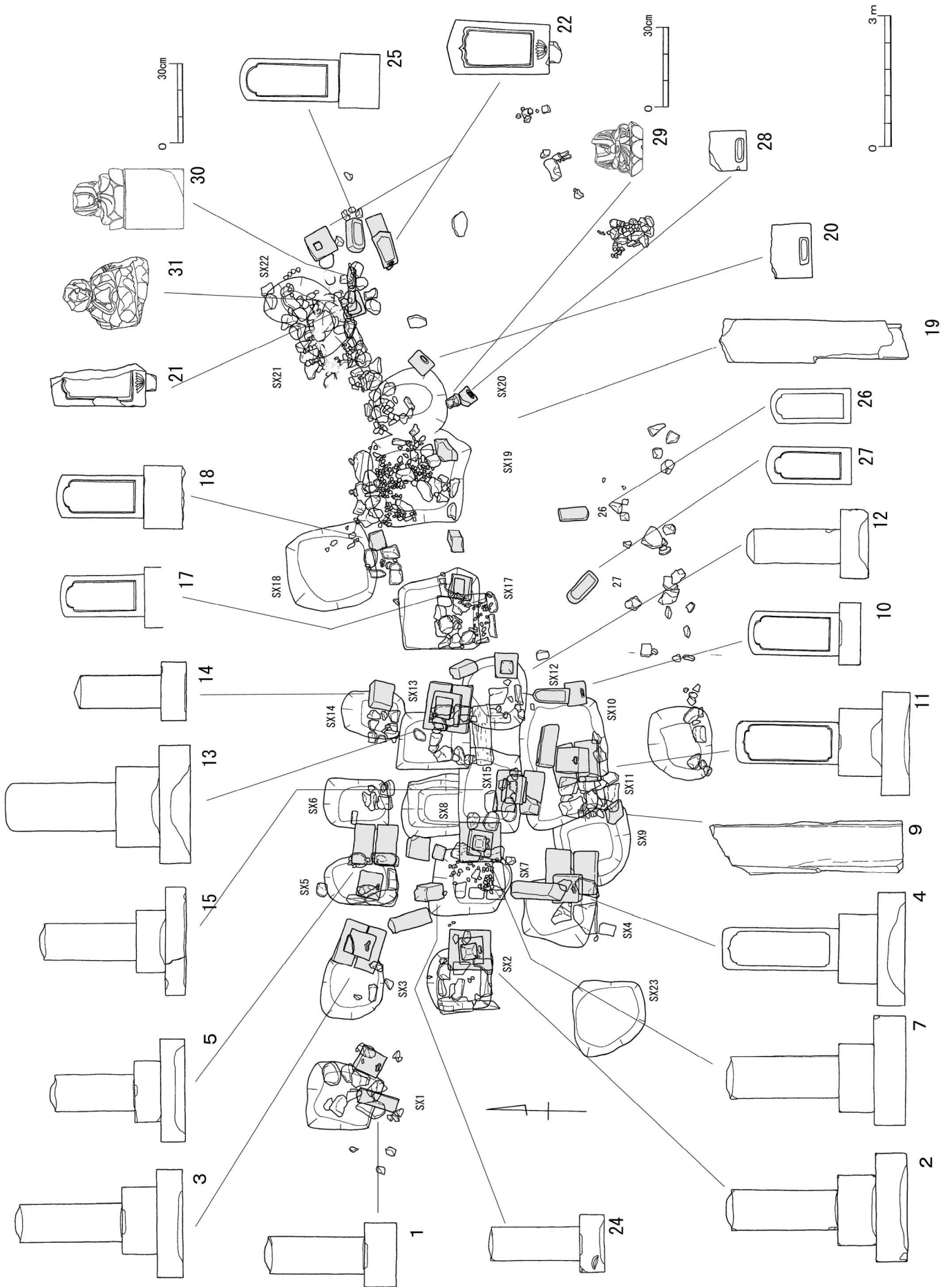
墓穴 隅丸方形 長軸0.48×短軸0.95×深さ1.61（m）

想定される埋葬方法 土葬 方形棺 葬位 不明

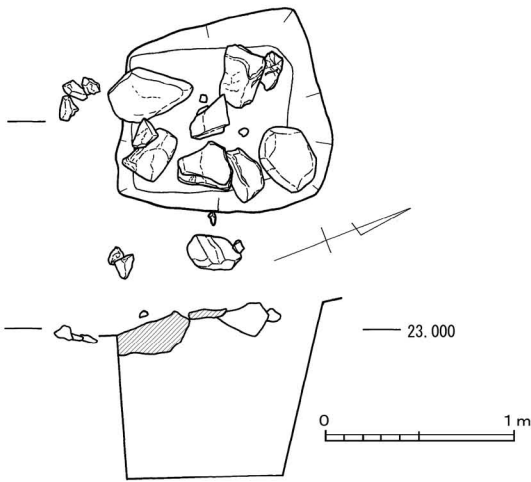
遺物 墓石（角柱形。凝灰岩製。墓標1、台石2）、銭貨（5枚か）、数珠玉4個（水晶）、甕破片、陶器、磁器碗、釘2本

備考 敷石の上に墓石が建立、墓穴との位置関係等から墓石は、原位置のままと思われる。墓穴上部は竹根による攪乱がみられた。墓穴上部からは備前系甕の破片が出土している。この破片は本遺構の東隣に位置するSX7の出土遺物と接合した。この甕はおそらく埋葬器の一種と思われる。このことから本遺構とSX7の周辺にもう一基埋葬施設が存在していた可能性がある。しかし今回の調査では検出できなかった。

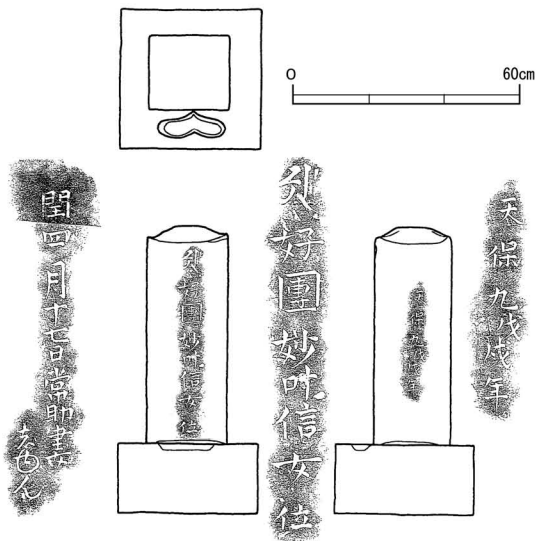
副葬品は鑄による腐食が進み溶着している鉄銭（推定5枚第86図-165）と、数珠玉4点だった。



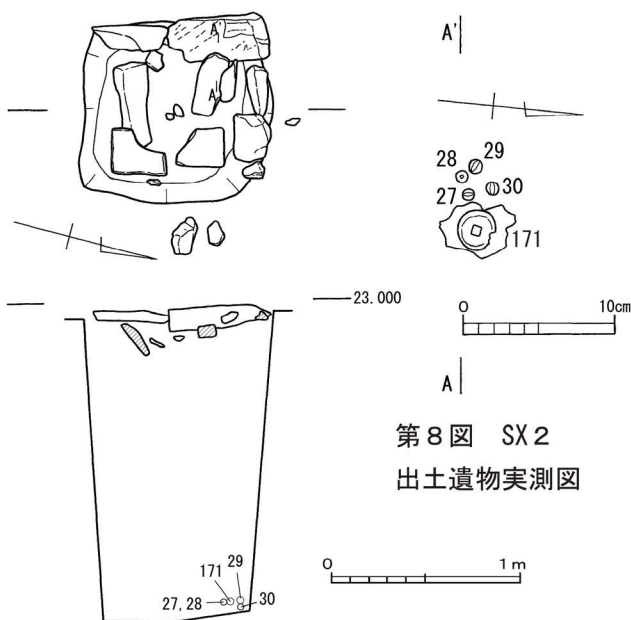
第4図 墓石・墓穴・敷石対応図 (1 : 80) ※墓石は1 / 40 (29~31は1 / 20)



第5図 SX1 墓穴実測図



第6図 SX1 墓石実測図・拓本図



第8図 SX2
出土遺物実測図

第7図 SX2 墓穴実測図

その他、釘2点と不明金具1点が出土している。人骨は腐朽しており部位の特定できるものは残存していなかった。墓標の銘文から被葬者は天保四(1833)年没の男性僧侶(慶壽院 享年61歳)である。墓石は2段目の台石も刻印してあり、世話方名が二面にわたって銘記してある。その中には正法寺(日向市)の名も刻まれている。

(3) S X 3 (第11図~13図)

位置 墓地北西側。SX1の東側。

墓穴 不整形円形 長軸0.97×短軸0.95×深さ1.04(m)

想定される埋葬方法 土葬 早桶 葬位 不明

遺物 人骨、墓石(角柱形。凝灰岩製。墓標1、台石3段目二分割)、寛永通宝1、煙管1、火打石金具1

備考 人骨が墓穴の中央に集中して出土しており、かつ釘が出土していないことから埋葬棺は早桶の可能性はある。墓石は墓穴との位置関係から原位置より移動していないと思われる。調査時には墓標は台石の北側に落ちた状態であった。

副葬品は人骨、煙管(吸口1、雁首1)と火打石金具と思われるもの1点、寛永通宝1枚である。墓標の銘文から被葬者は天保九(1838)年に没した男性でSX1に埋葬されている女性の夫である。

(4) S X 4 (第14図~16図)

位置 墓地南西側。SX7の南側。

墓穴 隅丸方形 軸1.09×短軸1.0×深さ1.26(m)

想定される埋葬方法 土葬 方形棺 葬位座葬?

遺物 人骨、墓石(楕形。凝灰岩製。墓標1、台石2(3段目二分割))、寛永通宝(6枚錯着)、釘32本、数珠玉1

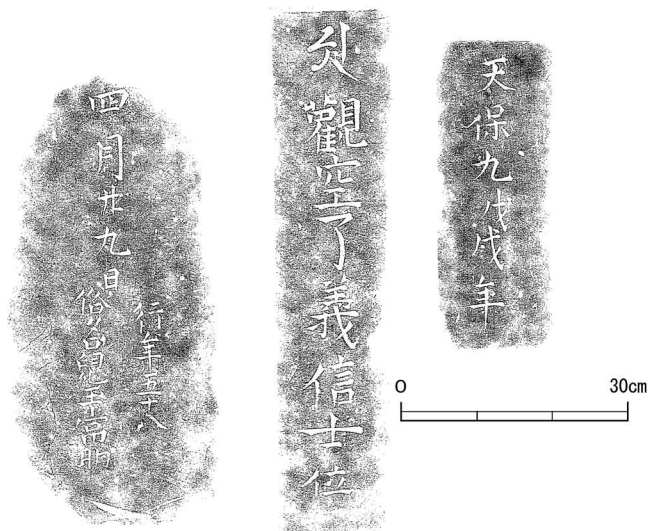
備考 台石と墓穴の位置は若干ずれているが、墓石も敷石の上であり原位置のままであると考えられる。人骨は墓穴の両壁に大腿骨と思われる部位

が直立して出土した。その出土状況から座葬であると推測される。

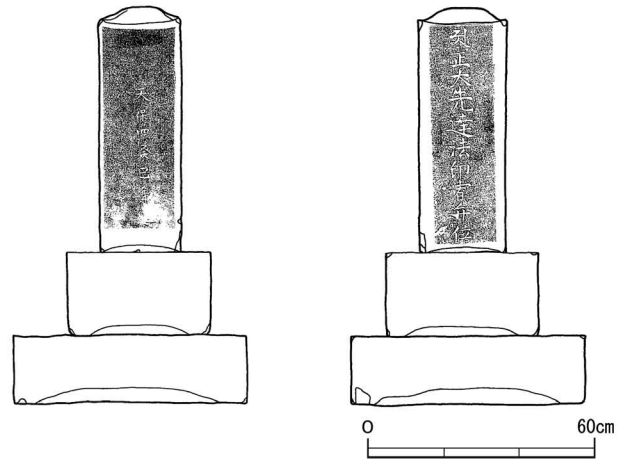
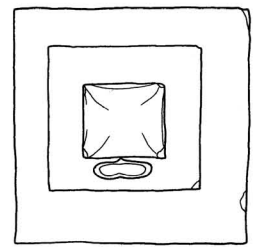
副葬品は鍍着した寛永通宝6枚と数珠玉1点（第79図-36）である。墓標の銘文から被葬者は成人男性であることがわかる。死亡年代等は銘記されていないが墓石の制作年代は、その形式がSX13の墓石と同形式であることから明治時代(1868～)頃に作られたと考えられる。



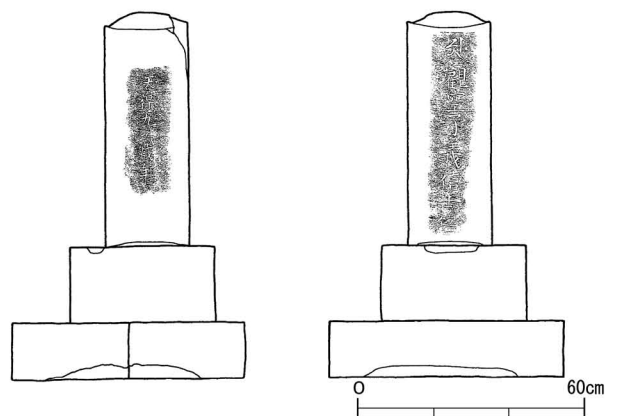
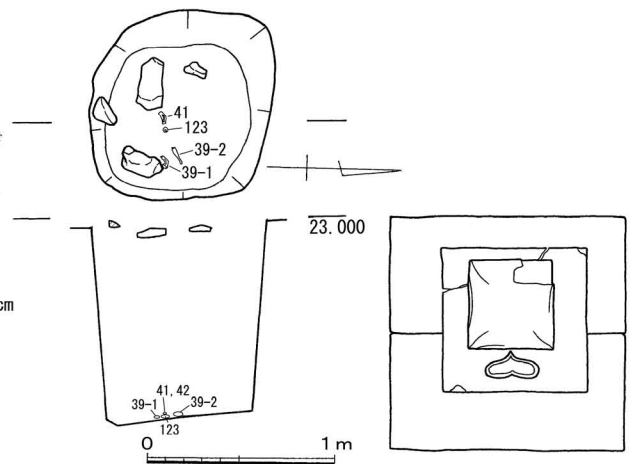
第10図 SX2 墓石拓本図



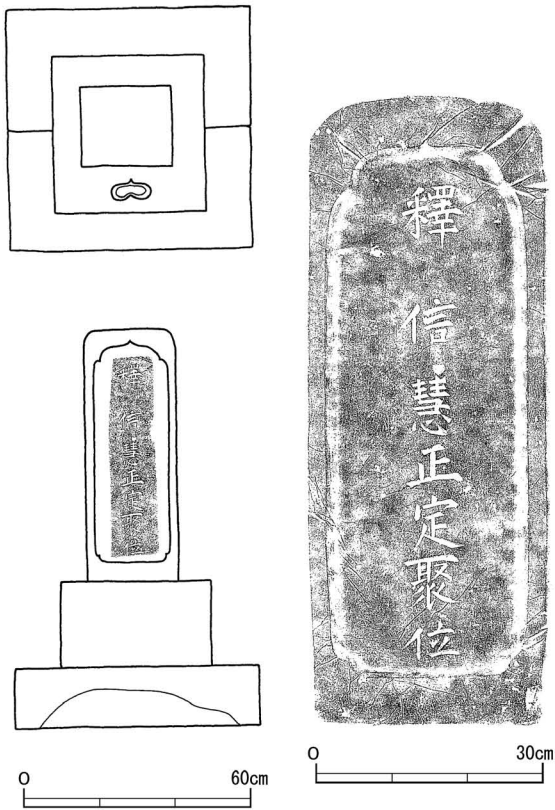
第13図 SX3 墓石拓影



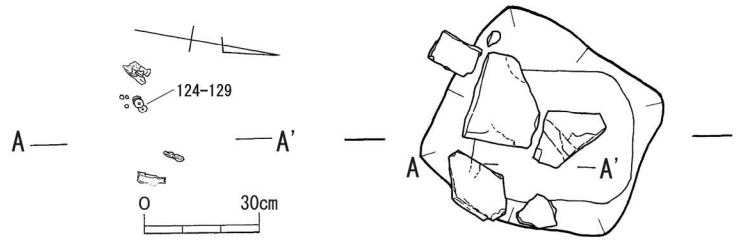
第11図 SX3 墓穴実測図



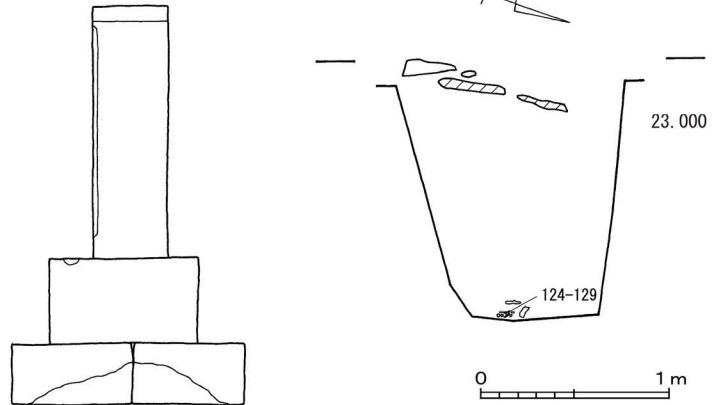
第12図 SX3 墓石実測図



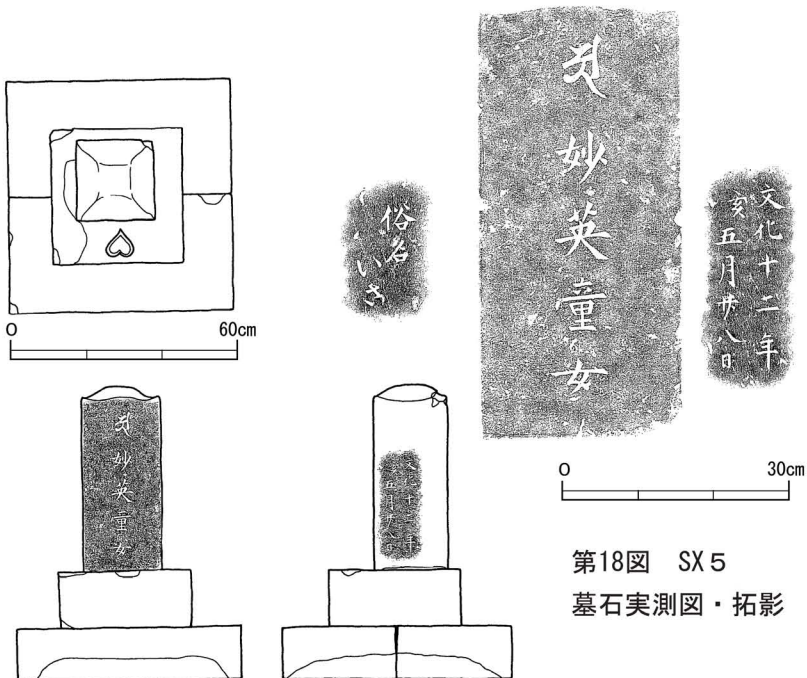
第15図 SX4 墓石実測図・拓影



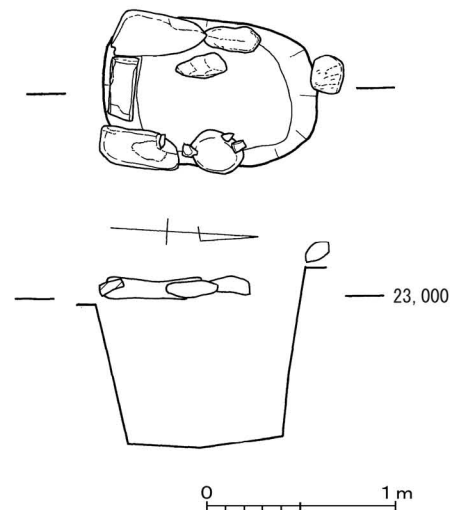
第16図 SX4 出土人骨平面図



第14図 SX4 墓穴実測図



第18図 SX5 墓石実測図・拓影



第17図 SX5 墓穴実測図

(5) SX5 (第17図~18図)

位置 墓地北西側。SX3の東側。

墓穴 隅丸長方形 長軸1.13×短軸0.77×深さ0.84 (m)

想定される埋葬方法 土葬 早桶? 葬位 不明

遺物 人骨、墓石(楕形。凝灰岩製。墓標1、台石2(3段目二分劃))、陶胎染付碗

備考 3段目の台石のみ敷石の上から検出された。墓標はSX 2とSX 7の墓穴の間に、2段目の台石は3段目台石の西側に置かれていた。この3点の墓石は同一石材であり、その台石2点の上面に残る風化の範囲が一致すること等から、セット関係にあると思われる。被葬者は、墓碑銘からは未成人の女性が埋葬されたと推察される。しかし人骨の分析からは、未成人を思わせる特徴はみられず、もし未成人としても20歳前の成人としか考えられない、という鑑定結果が出ている(51頁表3参照)。墓標の銘文から被葬者は文化十二(1815)年没だと考えられる。

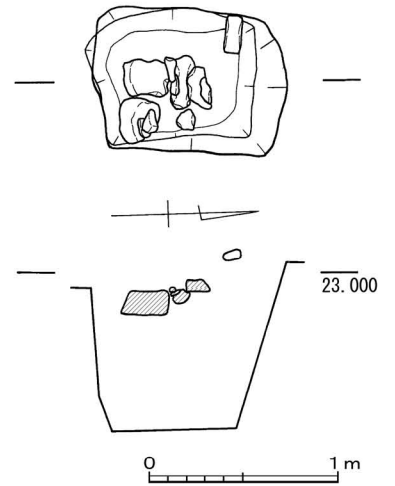
副葬品は陶胎染付碗1点である。

(6) SX 6 (第19図)

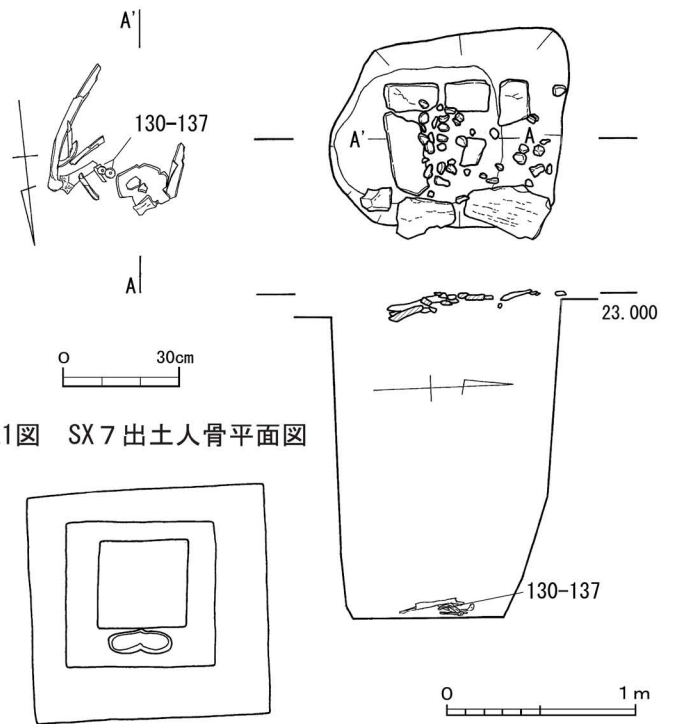
位置 墓地北側。SX 5の東側。

墓穴 隅丸方形 長軸1.02×短軸0.74×
深さ0.79 (m)

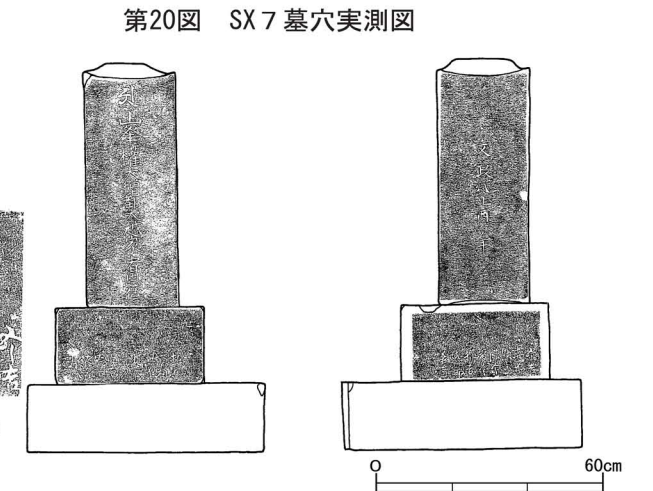
想定される埋葬方法 土葬早桶 葬位 不明



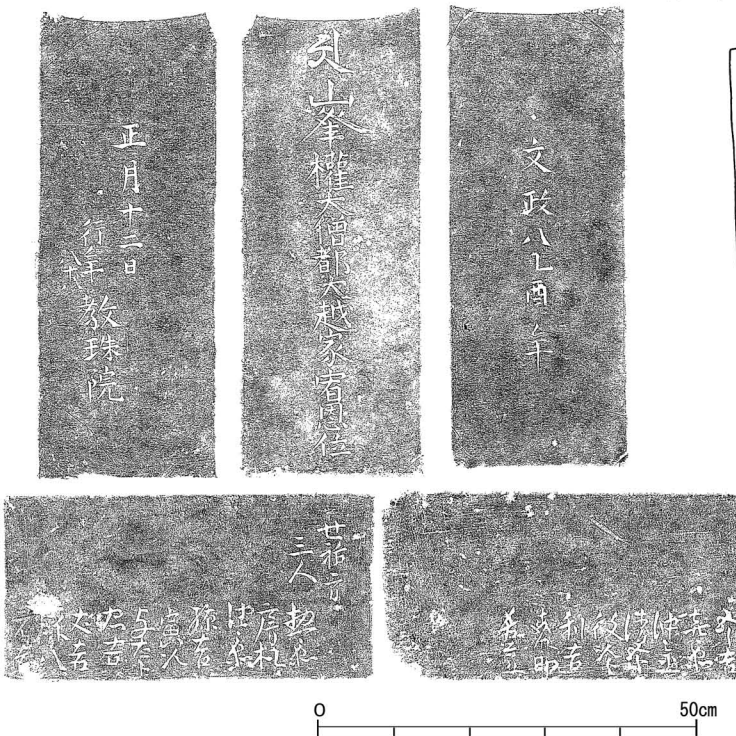
第19図 SX 6 墓穴実測図



第21図 SX 7 出土人骨平面図



第20図 SX 7 墓穴実測図



第23図 SX 7 墓石拓影

第22図 SX 7 墓石実測図

遺物 なし

備考 敷石と思われる石の囲みの下より検出されているので、その敷石とセット関係にある墓穴
であると考えている。

(7) S X 7 (第20図～23図)

位置 墓地中央西側。SX 2 の東側。

墓穴 不整隅丸方形 長軸1.21×短軸1.00×深さ1.71 (m)

想定される埋葬方法 土葬 方形棺 葬位 座葬 (中央に骨片が集中している)

遺物 人骨、墓石(角柱形。凝灰岩製。墓標1、台石2)、釘45本、寛永通宝(8枚錆着)、鑿1点

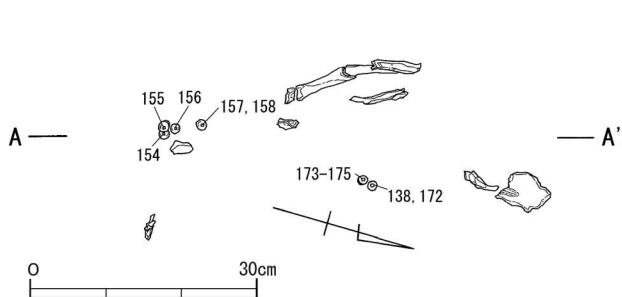
備考 SX 2 の墓石と同様に、2段目の台石に世話方名として17名の名が刻まれていた。また、墓
標の銘文から被葬者は文政八(1825)年没の男性僧侶(享年88歳)である。

(8) S X 8、15 (第24図～27図)

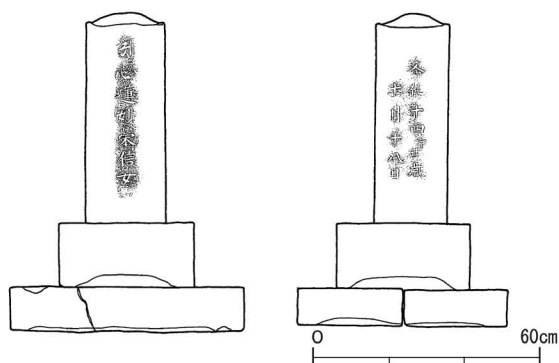
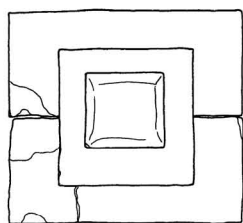
位置 墓地中央部。SX 6 の南側。SX13の南東側。

墓穴 隅丸長方形 (SX 8) 長軸(0.86)×短軸0.92×深さ1.02 (m)

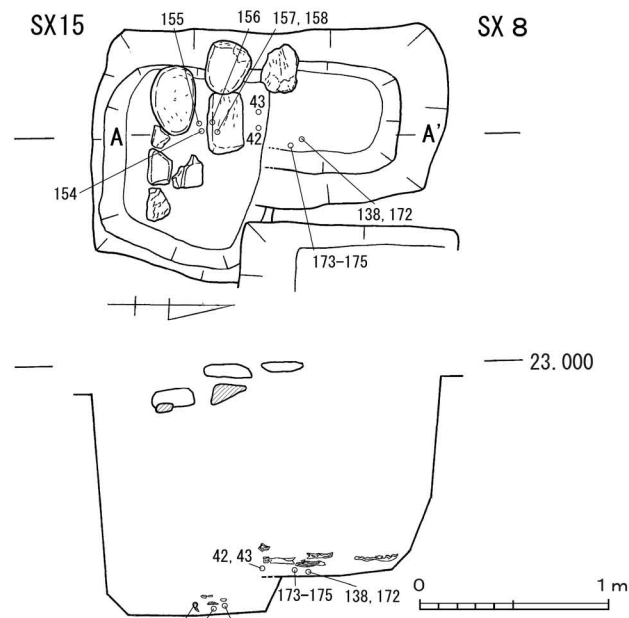
(SX15) 長軸(0.48)×短軸0.95×深さ1.15 (m)



第25図 SX 8・15出土遺物平面図



第26図 SX15墓石実測図



第24図 SX 8・15墓穴実測図



第27図 SX15墓石拓影

想定される埋葬方法 (SX8) 土葬 長方棺 葬位 仰臥屈葬

(SX15) 土葬 方形棺 葬位 不明

遺物 (SX8) 人骨、鳥骨、銭貨(9枚)、釘13点

(SX15) 人骨、鋌(足袋)2点、墓石(角柱形。凝灰岩製。墓標1、台石2(3段目二分劃))、釘37点

備考 敷石はSX15の中央にはあるが、SX8の上面にはない。他の敷石のように囲んであるわけではなく、同じ大きさの石を平行に並べた程度である。墓石もSX15のみ建立する。

SX8の埋葬姿勢は、人骨の出土状況より仰臥である。埋葬施設は墓穴が長方形であり、足袋の鋌の位置、頭蓋骨と下肢骨の位置関係等から寝棺と想定される。人骨の出土状況からSX8はSX15を切っていると思われる。

SX15は墓石の紀年銘より文化十四(1817)年没の成人女性ではないかと思われる。SX8は人骨より性別は、脛骨体の径が大きいことから男性と推定されている。また、SX8の被葬者の没年代はSX15を切っていることから1817年以降の埋葬と考えられる。

(9) SX9 (第28図~31図)

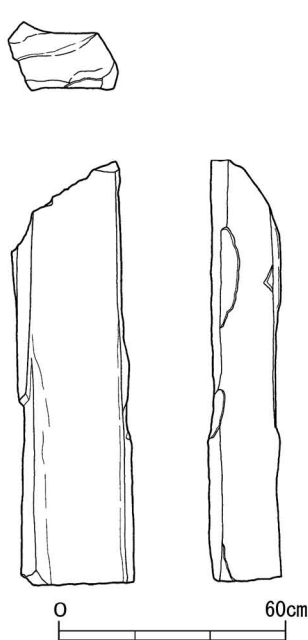
位置 墓地南側。SX11に切られている。

墓穴 不整円形 長軸1.17×短軸1.32×深さ1.26 (m)

想定される埋葬方法 土葬 方形棺 葬位 座葬

遺物 人骨、墓石(不定形、砂岩製。墓標のみ)、数珠玉5、煙管1、陶器壺1、碗1、釘15本

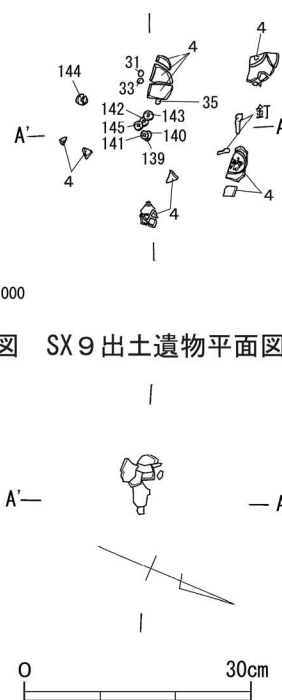
備考 墓石は墓標を墓穴に突き立てており、墓標は倒れないよう9個の石で周囲が固められてい



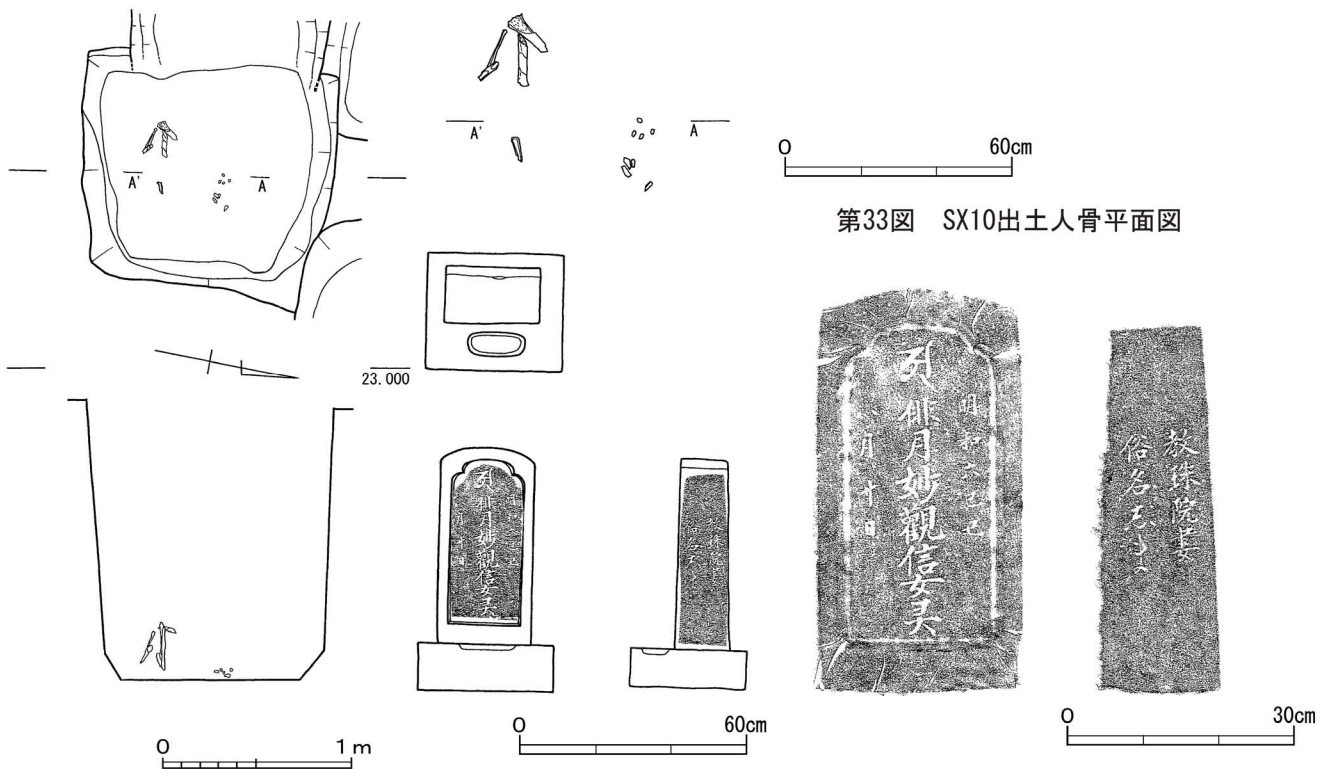
第31図 SX9 墓石実測図



第28図 SX9 墓穴実測図



第30図 SX9 出土人骨平面図 (1:10)



第32図 SX10墓穴実測図

第34図 SX10墓石実測図

第35図 SX10墓石拓影

た。また周囲は木の根・竹の根に侵食されており、敷石の図化は断念した。墓石に銘は彫られておらず、戒名等の記載もない（墨書の可能性あり）。副葬品（古寛永通宝、煙管）から1636～1700年代と考えられる。

(10) S X 10 (第32図～35図)

位置 墓地南側。SX11の東側。

墓穴 正方形 長軸1.31×短軸1.20×深さ1.43 (m)

想定される埋葬方法 土葬 方形棺 葬位 立膝の仰臥状態？

遺物 人骨、墓石（櫛形。花崗岩製。墓標1、台石1）、釘36本、銭貨（5枚？）

備考 下肢骨は立った状態で、頭蓋とかなり離れた位置から出土していることから、立膝の仰臥状態だと考えられる。敷石は石が2点あるのみだが、この石が敷石に相当するかは不明である。墓石の銘記より墓穴の被葬者は教珠院（SX7）の妻の志ま（しま？成人女性）で没年代は明和六（1769）年である。

副葬品は銭貨5枚もしくは6枚（錆着しており判別不能）で、銭貨を覆う錆に布の痕跡が明確に残存していることから、布で包む、もしくは布袋に入っていたのではないと思われる。

SX10の葬位は立膝の仰臥状態だが寝棺ではなく、墓穴の形態から座葬（方形棺？）である可能性が強い。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長松下孝幸氏によると被葬者が女性であることから推測すれば、本来は被葬者を座らせて納棺したが、体が小さかったため死床が相対的に広くなり、上半身が滑って寝てしまって、結果的に上半身が仰臥状態になった可能性もあるとのことである（本書52頁参照）。

(11) S X 11(第36図～38図)

位置 墓地南側。SX15の南側、SX9の東側。

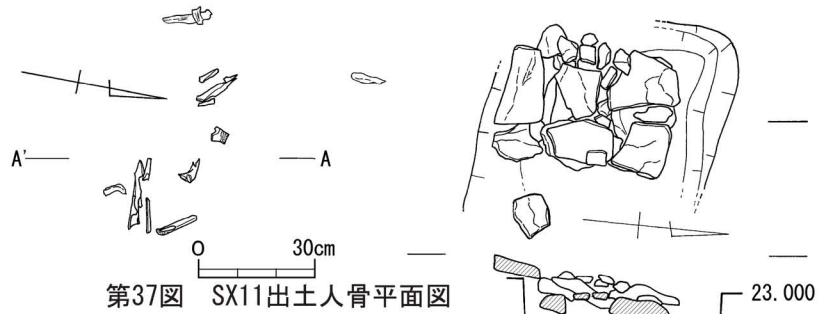
墓穴 方形(東側不明) 長軸1.06×短軸(0.80)×深さ1.06 (m)

想定される埋葬方法 土葬 方形棺
葬位 座葬

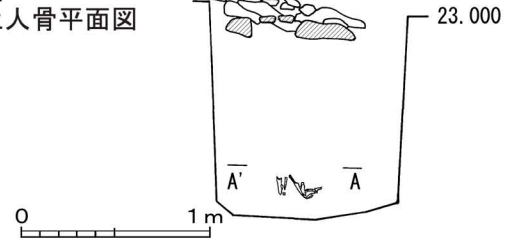
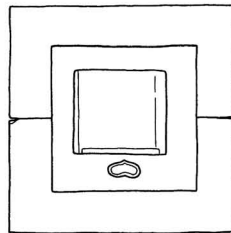
遺物 人骨、墓石(楕形。凝灰岩製)。墓標1、台石2(3段目二分劃)、寛永通宝(7枚)、釘71本

SX11の敷石は、他の敷石と異なり扁平な石を2列2段組に隙間がないよう並べ、敷き詰められていた。これは、SX11とSX4の2基しか見られない敷石配置である。

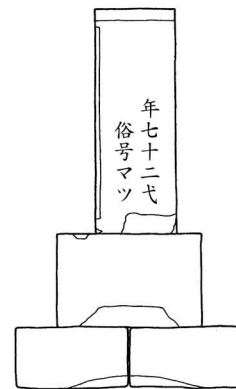
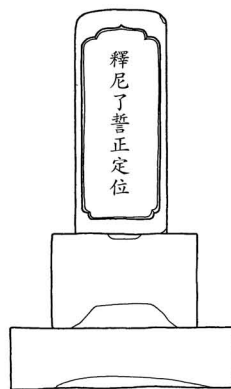
本遺構はSX9、10を切っているが、東西の立ち上がりは検出できず規模は不明である。人骨は下肢骨が立った状態で検出され、頭蓋は墓穴の中央部から出土していることから座葬と推測される。また、釘が西側壁付近と人骨の周囲からまともって出土していた。墓標の銘文から被葬者は成人女性(72歳、老年)で、没年代は明治十三(1880)年である。



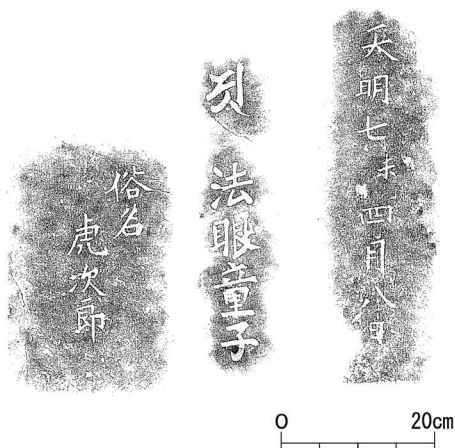
第37図 SX11出土人骨平面図



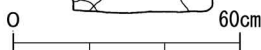
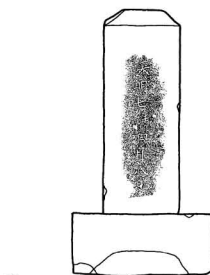
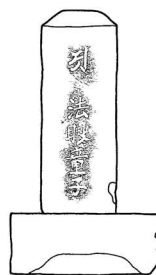
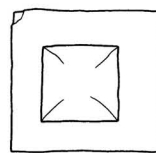
第36図 SX11墓穴実測図



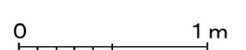
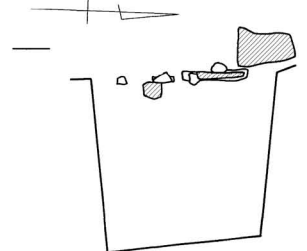
第38図 SX11墓石実測図



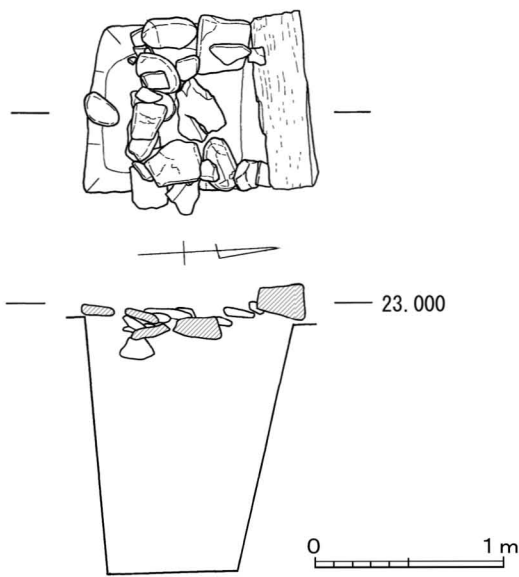
第41図 SX12墓石拓影



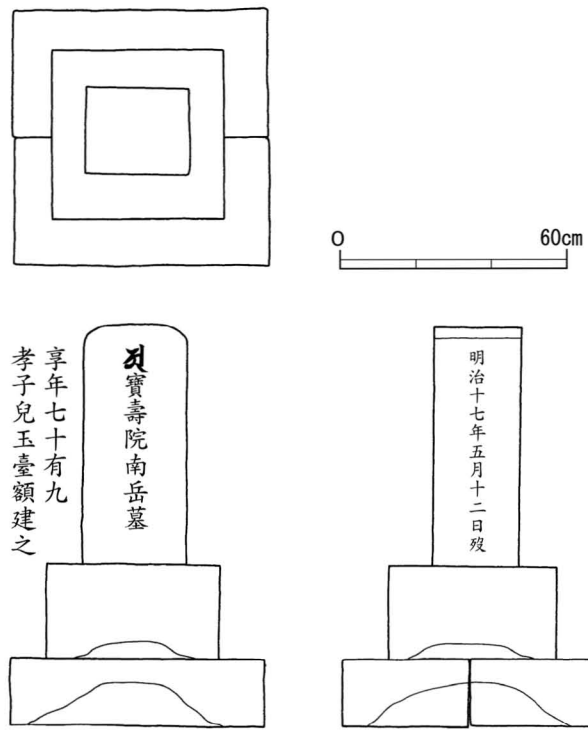
第40図 SX12墓石実測図



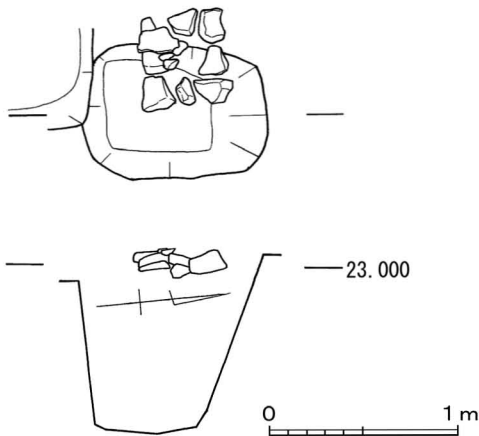
第39図 SX12墓穴実測図



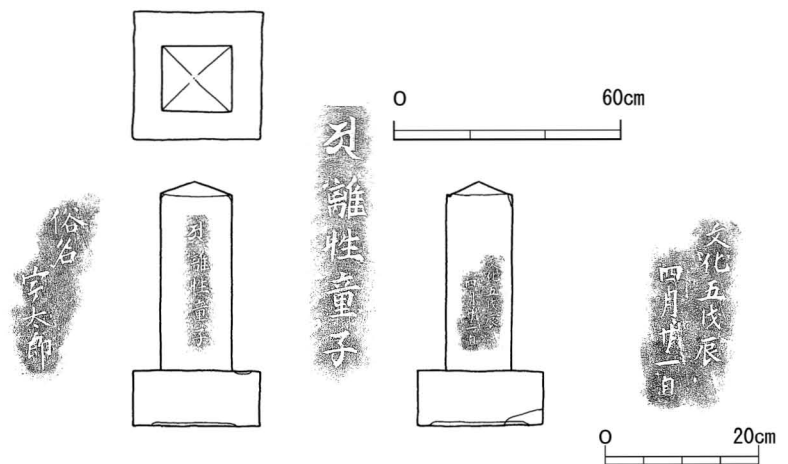
第42図 SX13墓穴実測図



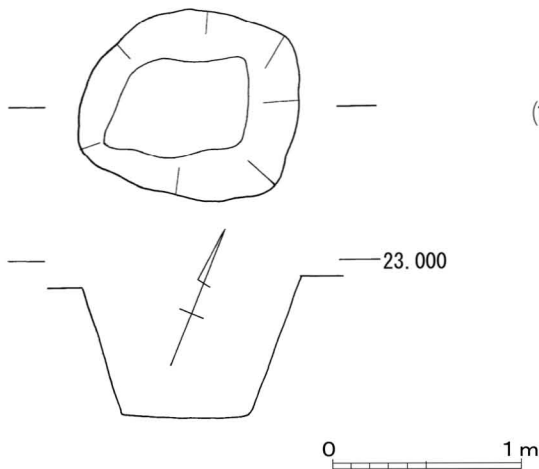
第43図 SX13墓石実測図



第44図 SX14墓穴実測図



第45図 SX14墓石実測図・拓影



第46図 SX16墓穴実測図

(12) S X 12 (第39図~41図)

位置 墓地中央東側。SX10の北側。SX10を切っている。

墓穴 不整円形 長軸1.10×短軸0.98×深さ0.90 (m)

想定される埋葬方法 不明 葬位 不明

遺物 墓石 (角柱形。凝灰岩製。墓標1、台石1)

備考 戒名の脚字「童子」より天明七(1787)年に亡くなった未成人男子と思われる。人骨、副葬品は出土しなかった。

(13) S X 13 (第42図～43図)

位置 墓地中央北西側。SX12の北側。SX12、14を切っている。

墓穴 長方形 長軸1.10×短軸0.86×深さ1.36 (m)

想定される埋葬方法 土葬 方形棺 葬位 不明

遺物 墓石(楕形。凝灰岩製。墓標1、台石2(3段目二分割))、人骨、釘63本、陶磁器1点(墓前に供えてあったもの)

備考 墓石は南側を向いている。敷石は墓穴と若干ずれているが四角く墓穴を囲むように組んであり、南側の一边には花崗岩を用いている。釘の出土位置が墓穴の北西側と南西側の2か所に分かれて出土していることから、埋葬形式は方形棺ではないかと推測される。陶磁器が1点、調査時SX13の墓前に置かれていた。印判手で明治時代以降の碗である。墓標より明治十七(1884)年に没した享年79歳の男性の墓穴である。

(14) S X 14 (第44図～45図)

位置 墓地北側。SX6の東側。SX13に切られている。

墓穴 不整円形 長軸0.98×短軸0.70×深さ0.86 (m)

想定される埋葬方法 土葬 早桶 葬位 不明

遺物 墓石(角柱形。凝灰岩製。墓標1、台石1)

備考 敷石は墓穴を四角に囲むよう配置されていた。戒名の脚字「童子」より文化五(1808)年に没した未成人男子と思われる。

(15) S X 16 (第46図)

位置 墓地南端側。SX10の南側。

墓穴 不整円形 長軸0.98×短軸1.10×深さ0.90 (m)

想定される埋葬方法 不明 葬位 不明

遺物 天目茶碗

備考 墓石を伴わない墓穴である。墓穴の深さから未成人を埋葬した可能性が考えられるが、副葬品の天目茶碗は未成人の墓に埋葬される物としては若干不自然な印象を受ける。

(16) S X 17 (第47図～51図)

位置 墓地中央東側。SX13の東側。

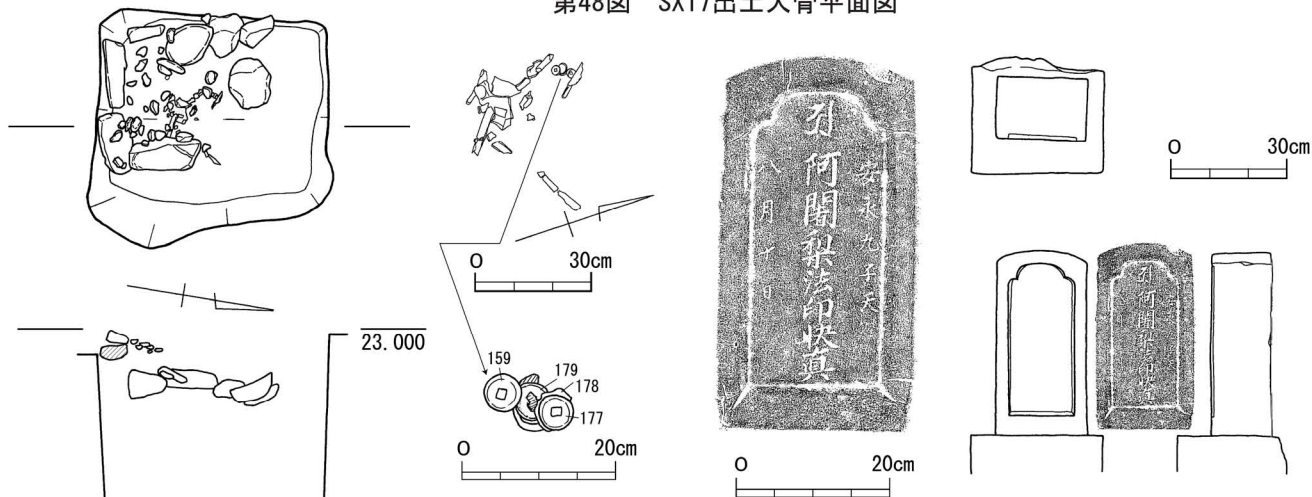
墓穴 不整方形 長軸1.21×短軸1.12×深さ1.90 (m)

想定される埋葬方法 土葬 方形棺 葬位 座位

遺物 墓石(楕形。砂岩(墓標)花崗岩(台石)製。墓標1、台石1)、人骨、陶磁器碗、銭貨(3枚。1枚は寛永通宝。後の2枚は鉄銭で錆びており判別不能)、釘91本

備考 墓石は南に正面を向け、墓穴の中央に位置している。敷石はその墓石の四方を囲むよう組まれている。人骨は墓穴の中心に集中し出土していたことから埋葬姿勢は座葬であったと考えられる。墓石は正面のみ文字が刻まれている。その内容から安永九(1780)年に没した男性の墓で、その戒名より、被葬者は僧侶と考えられる。

第48図 SX17出土人骨平面図

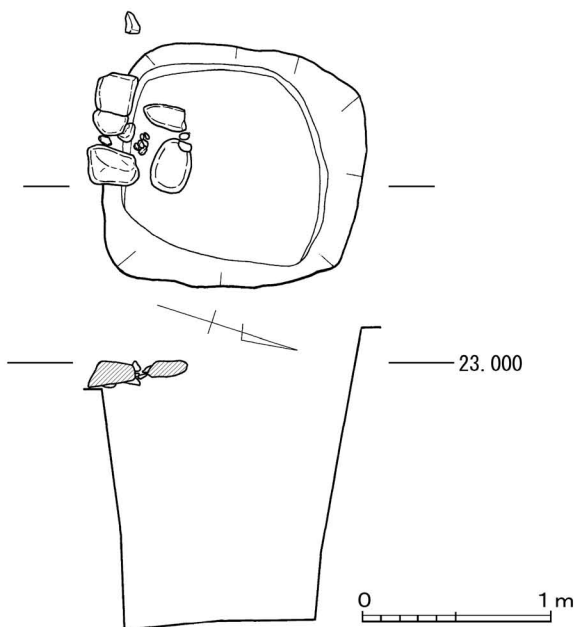


第49図 SX17出土銭貨平面図 (1 : 10)

第51図 SX17墓石拓影

第50図 SX17墓石実測図

第47図 SX17墓穴実測図



第54図 SX18墓石拓影

第53図 SX18墓石実測図

第52図 SX18墓穴実測図

(17) S X 18 (第52図～54図)

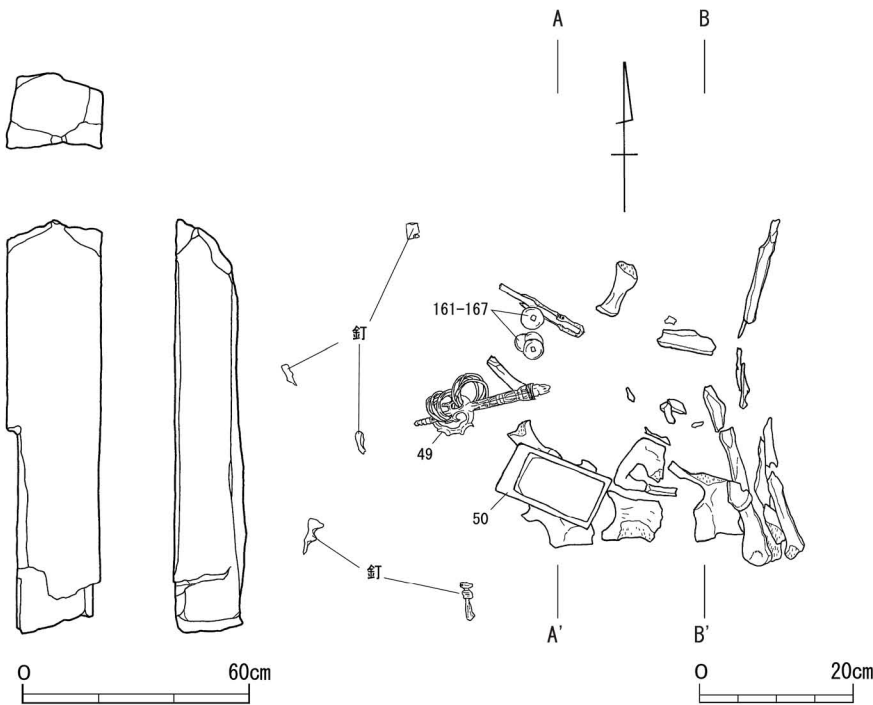
位置 墓地北東側。SX17の北東側。

墓穴 隅丸方形 長軸1.36×短軸1.26×深さ1.36 (m)

想定される埋葬方法 土葬 方形棺 葬位 不明

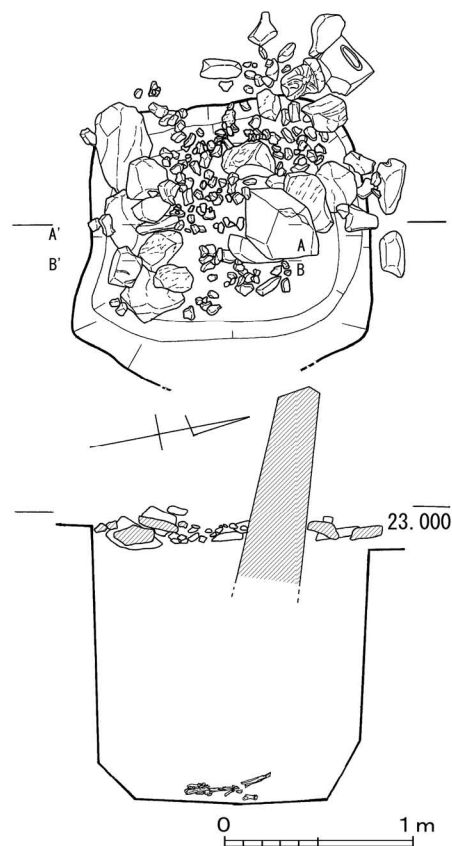
遺物 墓石 (楕形。砂岩(墓標)、花崗岩 (台石) 製。墓標1、台石1)、釘17本

備考 墓穴の上には調査当初台石のみ残っていた。この台石とセット関係になる墓標は、SX17の墓石と並べるように立ててあった楕形の墓標と考えられる。SX18の台石はSX17の台石と同形式であり、SX17の墓標と同形式のこの墓標が、組み合わせからみて正しいと思われる。



第57図 SX19墓石実測図

第56図 SX19出土遺物平面図
(1:10)



第55図 SX19墓穴実測図

墓標より、被葬者は天明元(1781)年に没した成人女性である。

(18) S X 19 (第55図～57図)

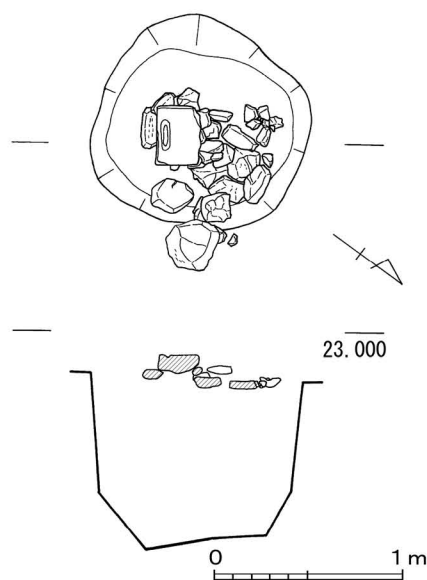
位置 墓地東側。SX20の西側。SX20と切りあっているが新旧関係は不明。

墓穴 方形 長軸1.45/1.90×短軸(1.45)×深さ1.38 (m)

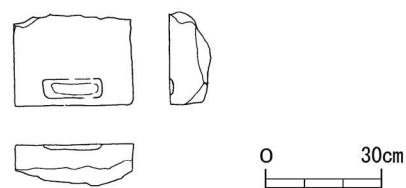
想定される埋葬方法 土葬 方形棺 葬位 座葬

遺物 墓石(不定形、砂岩製。墓標1、台石1)、人骨、長方硯、錫杖、和鋏、小刀、釘16本

備考 墓石の向きは南側で、台石はなく、墓標を直接地中に埋めている。墓石の正面はしっかりと加工し、やや凹んだ状態に整形しているが側面・裏面は雑である。SX9の墓石と同形式であるが、SX9のように墓標の周囲を石で根固めされた状態は見られなかった。敷石を他の墓穴と同様に墓標の周辺を四角く囲み、中心を小石で埋めている。しかし、SX20、21を造成する際に破壊されたのか、南北にしか敷石の囲みは存在しない。墓穴は方形で人骨が墓穴中央より出土、その周囲を釘が囲むようにして出土している。その釘の範囲と人骨の出土状況から推測し、埋葬施設は方形



第58図 SX20墓穴実測図



第59図 SX20墓石実測図

棺で、座葬であったと考えられる。副葬品は長方錫杖、鍔着した和鋏、小刀である。墓石には戒名等被葬者の性別・没年代を記す銘はなく不明だが、人骨より男性であると考えられる。没年代は副葬品から(銭貨が古寛永であること、和鋏の形態から)1636年から17世紀末の間に埋葬された、と考えられる。

(19) S X 20 (第58図～59図)

位置 墓地東側。SX21の南西側。SX19と切りあっているが新旧関係は不明。

墓穴 平面円形 長軸1.16×短軸1.05×深さ0.82 (m)

想定される埋葬方法 土葬 早桶 葬位 不明

遺物 墓石(花崗岩製の台石のみ1)、土師質皿2枚

備考 敷石は、台石を支えるようにその下に10cm程度の石が並べてある。SX20の台石とセットになると思われるのは25号、26号の墓標だが、どちらの墓標とセット関係であるかは判別不能である。土師質皿は2枚とも埋土中より出土している。

(20) S X 21 (第60図～62図)

位置 墓地北東側。SX18の東側。SX22と切りあっているが新旧関係は不明。

墓穴 不整円形 長軸0.88×短軸(0.69)×深さ0.66 (m)

想定される埋葬方法 土葬 早桶 葬位 不明

遺物 墓石(駒形。凝灰岩製。墓標1、台石1)

備考 調査当初は台石が完全に土中に埋没しており、地蔵墓(30号)が置かれていた下より出土した。敷石は台石の周辺を囲むよう満遍なく敷かれている。

墓石は墓穴の位置よりややずれており、南西側に位置する。墓標の銘記は薬彫後朱入れされており、逆修墓と考えられる。戒名より尼墓であるが、破損のため没年代は不明である。墓標の形式から18世紀前半～中葉ではないかと考えられる。

(21) S X 22 (第60図、第63図～64図)

位置 墓地北東側。SX21の北側。SX21と切りあっているが新旧関係は不明。

墓穴 不整円形 長軸(0.70)×短軸0.75×深さ1.08 (m)

想定される埋葬方法 土葬 早桶 葬位 不明

遺物 墓石(駒形。凝灰岩製。墓標1、台石1)

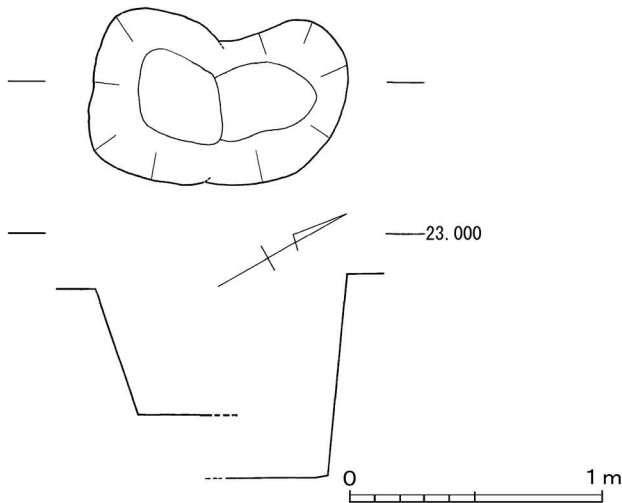
備考 台石は墓穴上面に位置している。墓標は墓穴より南側に放置されていた駒形の墓標とセットになると思われる。この墓石は柄穴結合の形式で、この墓地では2例しかないためその組み合わせを特定すること可能であった。墓標より被葬者は享保廿一(1736)年に没した男性僧侶である。SX21の墓石と同様、薬研彫後に朱入れしてあり、逆修墓と考えられる。

(22) S X 23 (第65図)

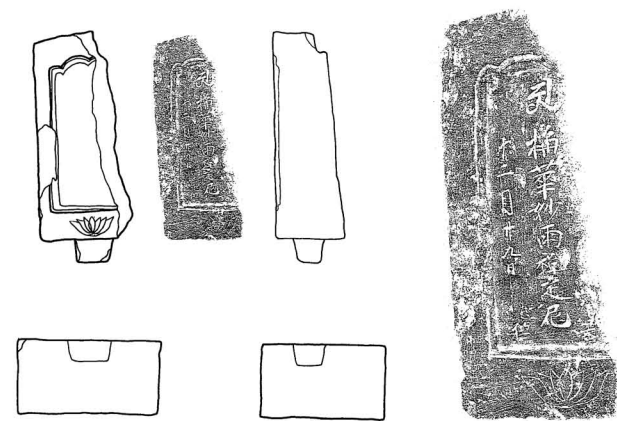
位置 墓地南西側。SX2の南側。

SX21

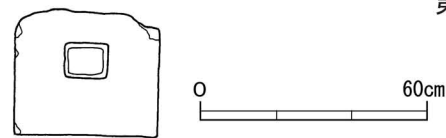
SX22



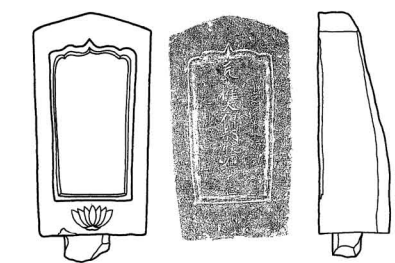
第60図 SX21・22墓穴実測図



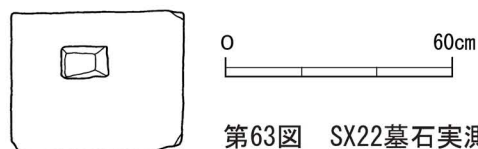
第62図 SX21墓石拓影



第61図 SX21墓石実測図



第64図 SX22墓石拓影



第63図 SX22墓石実測図

墓穴 不整円形 長軸1.1×短軸1.1×深さ0.68 (m)

想定される埋葬方法 不明葬位不明

遺物 墓石、人骨なし。陶磁器

備考 北よりSX3, 2と同列を成す。その列の一番南側である。遺物は陶磁器が5点出土している。

(23) 24号墓石 (第66図)

検出位置 SX5とSX7の間。

墓石の形式 角柱形 (凝灰岩製。墓標1、台石1)

備考 墓標は裏面と下面は工具痕が残っており、研磨されていない。刻字の内容から天保五年(1834年)に没した成人女性の墓石と考えられる。しかし該当する墓穴は検出されなかった。

(24) 25号墓石 (第67図、68図)

検出位置 墓地東側 SX22の南側。この墓石に伴う墓穴は検出されなかった。

墓石の形式 楕形 (砂岩(墓標) 花崗岩(台石) 製。墓標1、台石1)

備考 墓標は裏面と下面以外は研磨されており、正面・右側面に戒名・没年月日、俗名等を葉研彫されていた。その銘記から宝暦十(1760)年に没した成人女性の墓と考えられる。台石との組み合わせ、正面の花燈彫りなどからSX17、18と同形式である。

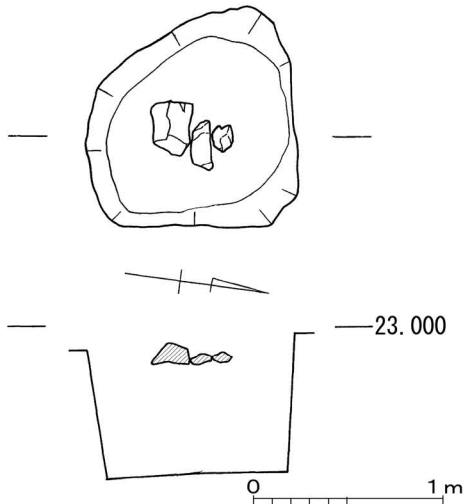
(25) 26号墓石 (第69図、70図)

検出位置 墓地南東側

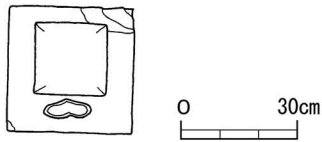
表土を掘り下げていった際出土した。墓標のみでこの墓石に伴う墓石は検出されなかった。

墓石の形式 楕形 (砂岩製)。

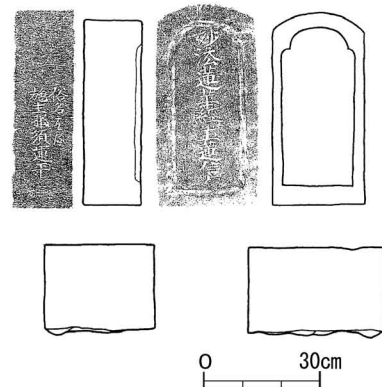
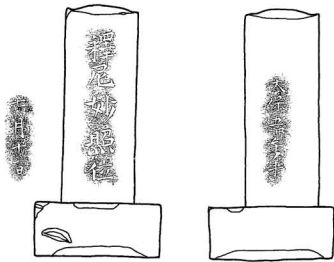
備考 墓標は裏面と下面以外は成形されて



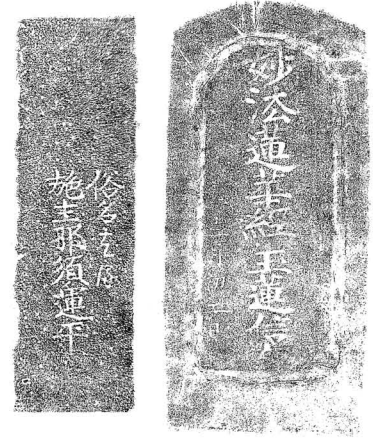
第65图 SX23墓穴实测图



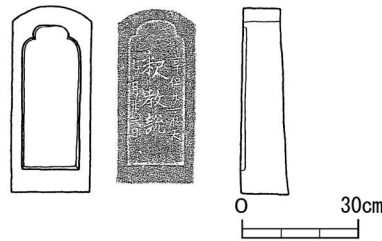
第66图 24号墓石实测图



第67图 25号墓石实测图



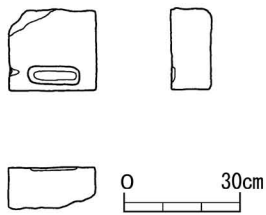
第68图 25号墓石拓影



第69图 26号墓石实测图

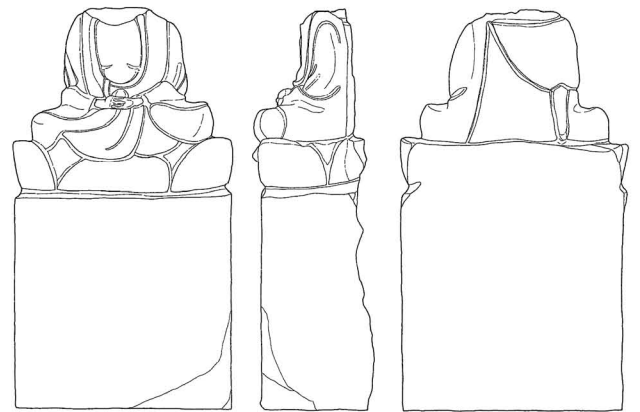


第70·72图 26号·27号墓石拓影



第73图 28号墓石实测图

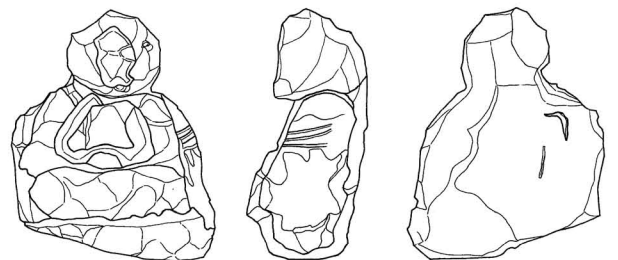
第71图 27号墓石实测图



第75图 30号墓石实测图



第74图 29号墓石实测图



第76图 31号墓石实测图

いる。正面に戒名・没年月日を刻んでおり、享保廿一(1736)年に没した女性の墓標である。SX11と同形式の墓石である。その形式からSX20の台石、もしくはSX19・20の間で検出している28号墓石(台石)とセット関係になる可能性がある。

(26) 27号墓石 (第71図～72図)

検出位置 墓地南東側。SX17の南側に放置されていた。墓標のみで、この墓石に伴う墓穴は検出されなかった。

墓石の形式 楕形(砂岩製)。25号墓石と同形式。

備考 正面に刻まれた戒名・没年月日から寛保三(1743)年に没した成人女性の墓標である。その形式からSX20の台石もしくはSX19・20の間で検出している28号墓石のいずれかとセット関係ではないかと思われる。

(27) 28号墓石 (第73図)

検出位置 墓地東側 SX19・20の間

墓石の形式 楕形(砂岩製)。25号墓石と同形式。

備考 台石のみの出土である。花崗岩製、水鉢あり。SX10の台石と同形式と考えられる。下面、背面は不整形である。

(28) 29号墓石 (第74図)

検出位置 墓地東側 SX19・20の間、27号墓石の北側

墓石の形式 楕形(砂岩製)。25号墓石と同形式。

備考 宝珠座像形で地藏菩薩を丸彫りしている。砂岩製で首から上を欠損している(廃仏毀釈のためか)。

(29) 30号墓石 (第75図)

検出位置 墓地北東側 SX21、22の間

墓石の形式 砂岩製。

備考 29号と同じ形式であり台座の長さからこちらも地藏菩薩を形どった墓石であると思われる。29号墓石と同様首から上を欠損している。裏面は成形しておらず自然面である。

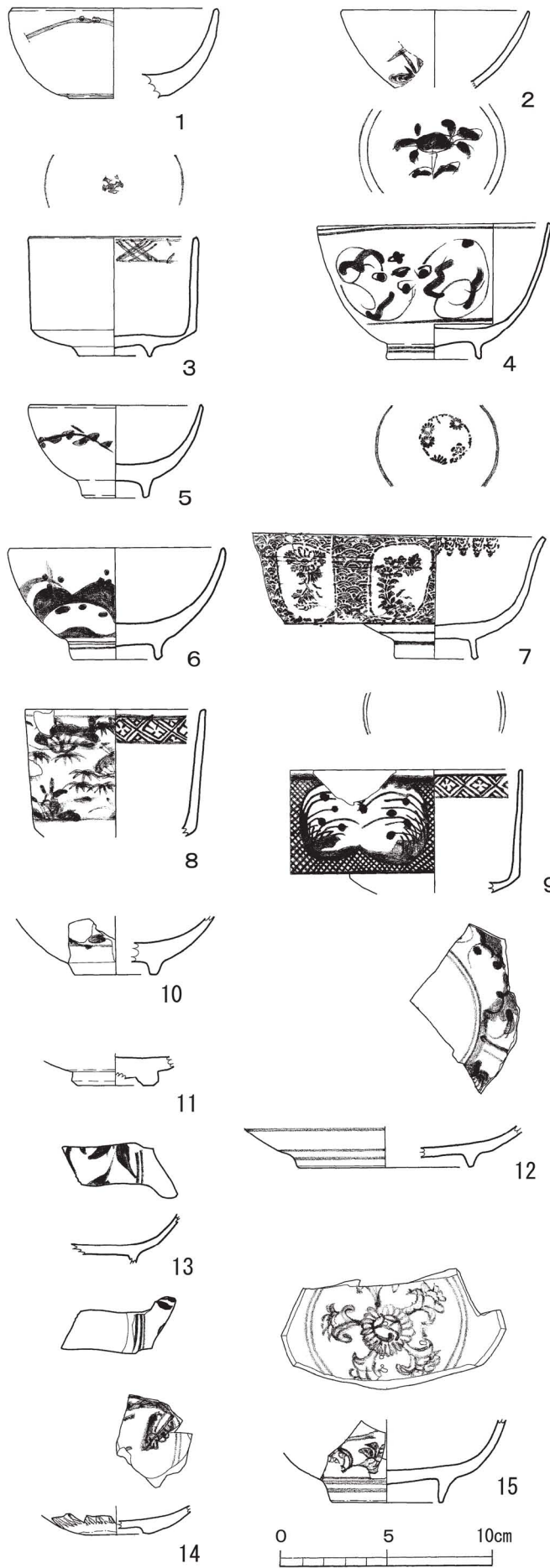
(30) 31号墓石 (第76図)

検出位置 墓地北東側 SX21の台石上面。

墓石の形式 凝灰岩製。28と同じく地藏菩薩を形どったものと思われるが、顔面は潰されており、他の箇所も細部は判別できない状況である。禪を組んだ足の上に手を合わせているように見える。

番号	墓石形式		石材	墓 碑 刻 字						墓石法量 (cm)				
	没年代	性別		右側面	種字	正面	左側面	高さ	幅	厚さ				
1	1段目	角柱形	4-2	凝灰岩	天保9年 (1838年)	女性	閏四月十七日 常助妻しゅん	ア	好團妙叶信女 位	天保九戊戌年	1段目	57.5	21.5	20.5
	2段目										18.5	37.5	37.0	
2	1段目	角柱形	4-2	凝灰岩	天保4年 (1833年)	男性	八月十三日 行年六十一慶壽院	ア	正大先達法印位 世話方 三人 惣兵衛 房松 由兵衛 為介 正法寺 □助 惣兵衛 為□	天保四癸巳年 森介 吉□ 仁右衛門 浅吉 千代松 茂吉 長次郎	1段目	64.2	23.3	22.0
	2段目										20.5	39.9	40.0	
	3段目										18.0	62.0	60.4	
3	1段目	角柱形	4-2	凝灰岩	天保9年 (1838年)	男性	四月廿九日 行年五十八 俗名兒玉常助	ア	觀空了義信士位	天保九年戊戌年	1段目	61.2	22.5	23.5
	2段目										19.7	38.5	38.5	
	3段目										15.2	62.8	31.0	
4	1段目	櫛形	3-2	凝灰岩	不明	男性	—	釋	釋 信 慧正定聚位	—	1段目	66.3	24.5	20.3
	2段目										22.5	39.5	39.8	
	3段目										16.0	65.1	32.0	
5	1段目	角柱形	4-1B	凝灰岩	文化12年 (1815年)	女性	俗名いさ	ア	妙英童女	文化十二年 亥五月廿八日	1段目	48.7	21.5	20.0
	2段目										15.2	35.0	35.0	
	3段目										14.2	59.7	30.5	
6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7	1段目	角柱形	4-2	凝灰岩	文政8年 (1825年)	男性	正月十二日行年八十八 教珠院	ア	嶽權大僧都大越家宥恩位	文政八乙酉年	1段目	64.2	23.5	23.5
	2段目										20.0	39.5	39.5	
	3段目										18.0	61.8	61.5	
9	1段目	不定形駒形	2	砂岩	—	不明	—	—	—	—	1段目	111.0	30.0	14.5
10	1段目	櫛形	3-1	砂岩	明和6年 (1769年)	女性	—	ア	明和六己丑 俳月妙觀信女? 八月十日	教珠院妻 俗名しま	1段目	51.5	25.0	下14.5/ 上12.5
	2段目										12.5	36.5	30.5	
11	1段目	櫛形	3-2	凝灰岩	明治13年 (1880年)	女性	—	釋	釋尼了誓正定位	年七十二七 俗名マツ	1段目	58.2	25.2	21.5
	2段目										24.5	38.0	38.0	
	3段目										16.2	59.0	29.8	
12	1段目	角柱形	4-1	凝灰岩	天明7年 (1787年)	男性	俗名虎次郎	ア	法眼童子	天明七未四月八日	1段目	53.0	20.0	20.0
	2段目										16.0	39.0	37.0	
13	1段目	櫛形	3-3	凝灰岩	明治17年 (1884年)	男性	—	—	寶壽院南岳墓	—	1段目	63.2	27.5	24.2
	2段目										25.0	44.7	45.0	
	3段目										18.0	67.0	33.7	
14	1段目	角柱形	4-1A	凝灰岩	文化5年 (1808年)	男性	俗名宇太郎	ア	離性童子	文化五戊辰 四月廿一日	1段目	49.5	18.5	17.5
	2段目										14.5	33.5	33.5	
15	1段目	角柱形	4-1	凝灰岩	文化14年 (1817年)	不明	兒玉氏母	ア	心蓮妙榮信女	文化十四年丁丑歲 十月十八日	1段目	51.5	20.5	19.5
	2段目										17.1	35.6	35.6	
	3段目										11.8	61.5	27.8	
17	1段目	櫛形	3-1A	砂岩	安永9年 (1780年)	男性	—	ア	安永九子天 阿闍梨法印快真 八月十日	—	1段目	48.5	24.2	16.0
	2段目										—	35.0	28.0	
18	1段目	櫛形	3-1A	砂岩	天明元年 (1781年)	女性	—	—	天明元丑天 妙法 雪峯妙露信女 十二月廿日	—	1段目	50.0	24.5	15.0
	2段目										23.2	32.5	24.0	
19	1段目	不定形駒形	2	砂岩	—	男性	—	—	—	—	1段目	105.0	25.0	19.0
20	台石のみ	櫛形台石	—	花崗岩	—	不明	—	—	—	—	2段目	11.0	31.0	(24.5)
21	1段目	駒形	1	凝灰岩	不明	女性	—	ア	楠華妙雨禪定尼 十二月廿九日	—	1段目	55 (61)	25.0	下20/中17 /上14
	2段目										19.6	37.8	32.5	
22	1段目	駒形	1	凝灰岩	享保21年 (1736年)	男性	—	キリ ウク	享保廿一年丙辰天 權大僧都扶通 不生位 七月廿三日	—	1段目	65.2 (58.7)	31.5	19.0
	2段目										17.2	41.2	37.0	
24	1段目	櫛形	4-1B	砂岩	天保5年 (1834年)	女性	七月十日	—	釋尼妙照位	天保五甲午年	1段目	51.0	19.2	19.2
	2段目										14.0	33.0	33.0	
25	1段目	櫛形	3-1A	砂岩	宝暦10年 (1760年)	女性	俗名はる 施主那須運平	—	宝暦十年 妙法蓮華經王蓮信女 十二月廿日	—	1段目	55.7	24.5	15.2
	2段目										26.0	36.5	29.3	
26	1段目	櫛形	3-1	砂岩	享保21年 (1736年)	女性	—	—	享保廿一辰天 釈教説 七月廿一日	—	1段目	46.2	20.0	上7.0/ 下8.0
27	1段目	櫛形	3-1	砂岩	寛保3年 (1743年)	女性	—	—	寛保三〇年 法名釋妙永不退位 二月二十九日	—	1段目	49.0	21.0	上10/ 下13.5
28	台石のみ	櫛形台石	—	花崗岩	—	—	—	—	—	—	2段目	11.0	23.0	21.0
29	—	地藏形	5-1A	砂岩	—	不明	—	—	—	—	—	19.4	21.4	18.0
30	—	地藏形	5-1B	砂岩	—	不明	—	—	—	—	—	44.0	22.8	11.0
31	—	地藏形	5-2	凝灰岩	—	不明	—	—	—	—	—	32.0	24.6	13.8

第2表 出土墓石一覽



第77図 出土遺物実測図（陶磁器）（1：3）

第4節 中山遺跡の出土遺物

遺物の総点数は多くはないが、種類が豊富なため遺構ごとの記述ではなく、器種ごとに遺物を掲載する方法をとった。遺構出土遺物、遺構外出土遺物の順に掲載している。

(1) 陶磁器類（第77図～第78図）

1・2はSX 2出土の肥前系碗である。

3はSX 7出土の青磁染付碗である。

見込みに崩れたコンニャク印判が施してある。粗雑な作りで18世紀末頃と思われる。4はSX 9底面出土の染付碗である。見込みに花卉文を描き、外側にも粗雑で抽象的な花卉文を描いている。17世紀末か。6はSX 23出土の碗である。崩れた雪和梅花文を描き、発色が悪い粗雑な碗である。7はSX 13の墓前に置かれていた碗である。明治時代前半期に製作された印判染付碗で、1870年代～1880年代の製品である。10、12はいずれも井戸の上層より出土した。18世紀後半の製品と考えられる。

11は貿易陶磁で14世紀後半の切高台皿である。13～15はA区東側出土遺物で、いずれも16～17世紀にあたる貿易陶磁と思われる。15は16世紀末～17世紀初の花青碗で、大橋康二編年の碗C類にあたると思われる。内面見込みは花卉文、外面文様は花唐草文だが、崩れが著しく判然としない。

16は大甕で、SX 2、SX 7出土である。産地は不明である。底部に穿孔が穿たれている。埋葬用の甕と思われるが、SX 2、7の埋葬施設とは関係がなく、別の埋葬施設のものと考えられる。

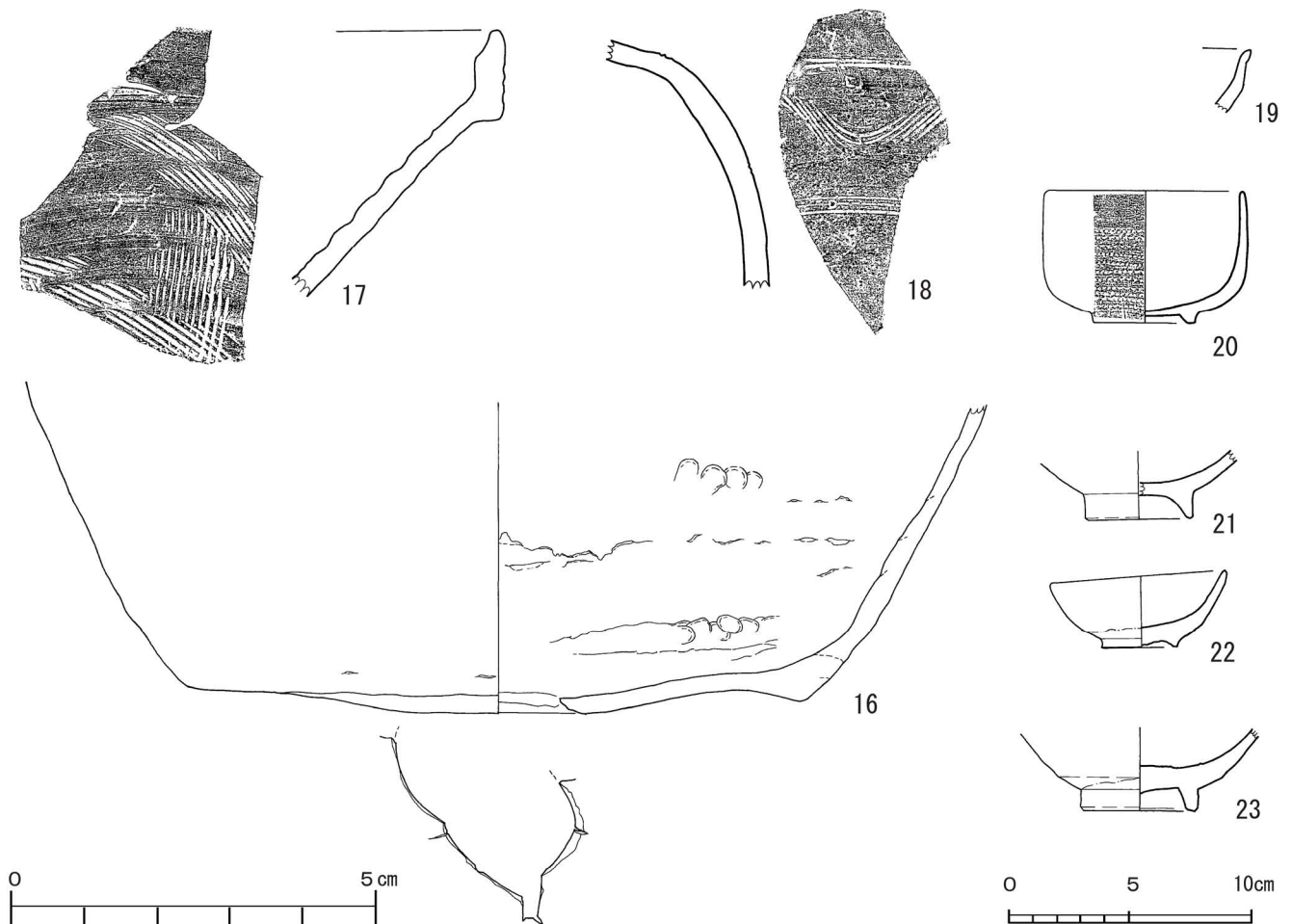
17は井戸出土の製品で、備前播鉢である。単位13本で摺目は詰まっており、放射状摺目に加えて、ナナメ方向の摺目が付加されていることから乗岡編年備前焼近世1期(16世紀第2四半期末～17世紀初)と考えられる。また、口縁部の形態から近世1期のB期と思われる。18はSX9出土の壺である。埋土中の出土で、遺構に伴うものなのかは判然としない。16、17世紀の備前焼か。19はSX16出土の天目碗破片である。瀬戸美濃産の17世紀の製品。20はSX23出土の瀬戸美濃の冑茶碗で、17世紀の製品である。21は唐津焼の碗である。22は高台より唐津焼の小坏と思われる。釉薬がまったく発色しておらず、焼成不良である。23はおだいしさん周辺で採取した遺物で肥前内野山窯製の碗と思われる。内面の銅緑釉はきれいに発色していない。

24、25(第79図)はSX21出土の土師質小皿である。

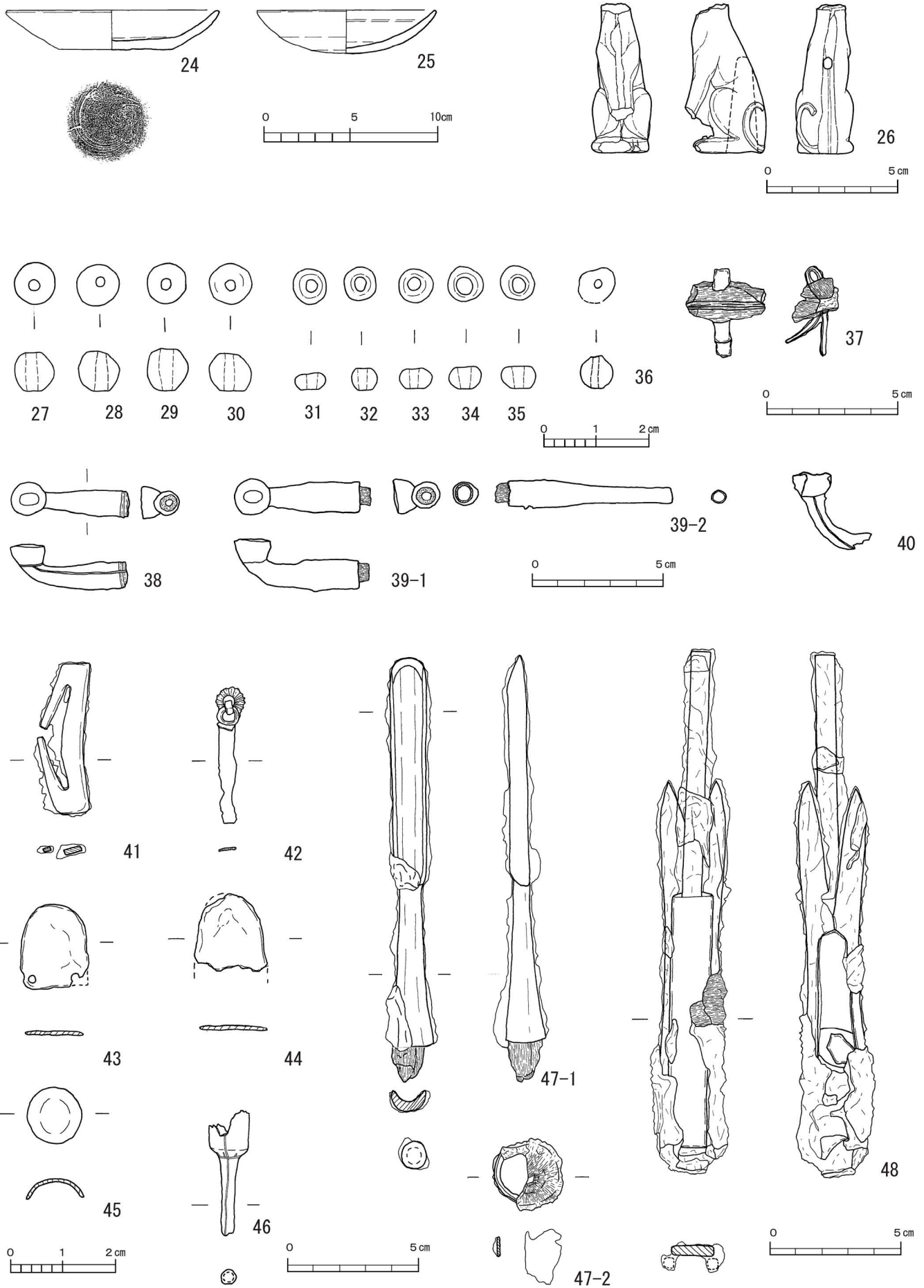
26はC区斜面側の表採で、狐を模した土人形である。狐は稻荷信仰の対象として古くから存在するモチーフである。

(2) 数珠玉(第79図)

27～30はSX2底面出土の数珠玉である。銭貨(第86図-165)と重なって出土している。材質は気泡の入り方等からガラスと思われる。31～35はSX9出土の数珠玉である。材質はガラスだがSX2出土の数珠玉とは異なり透明感がなく、表面をこすったような跡が全体に見られる。(図版12参照) 36はSX4出土の数珠玉である。1点のみの出土で、木製である。



第78図 出土遺物実測図(16は1:10、17~23は1:3)



第79図 出土遺物実測図
 (24、25は1 : 3、26、36~41、45~48は1 : 2、27~35、42~44は1 : 1)

(3) 金属製品類(第79図、第80図)

37はSX 1 出土の金属製品で、一部青銅製で木質が付着していることから何かの金具ではないかと思われる。

38はSX 1 出土の煙管で雁首と羅子の一部分が残存している。油反しの形状からV類(1800年代)と考えられる。39はSX 3 出土の煙管で、雁首と吸口は銅製で吸管部分は竹で作られている(羅子煙管)。油反しの湾曲が小さいことから古泉編年V類(1800年代)ではないかと考えられる。墓の埋葬年代(1838年)とも合致する。

40はSX 9 出土の煙管で、雁首のみの出土である。油反しの火皿の付け根からの湾曲の大きさからI類(～1650年代)と思われる。SX 3 出土の41は、ねじり鎌形の火打金と思われる。当初銅製の金具である42が、頂上部分に付着した状態で出土していた。

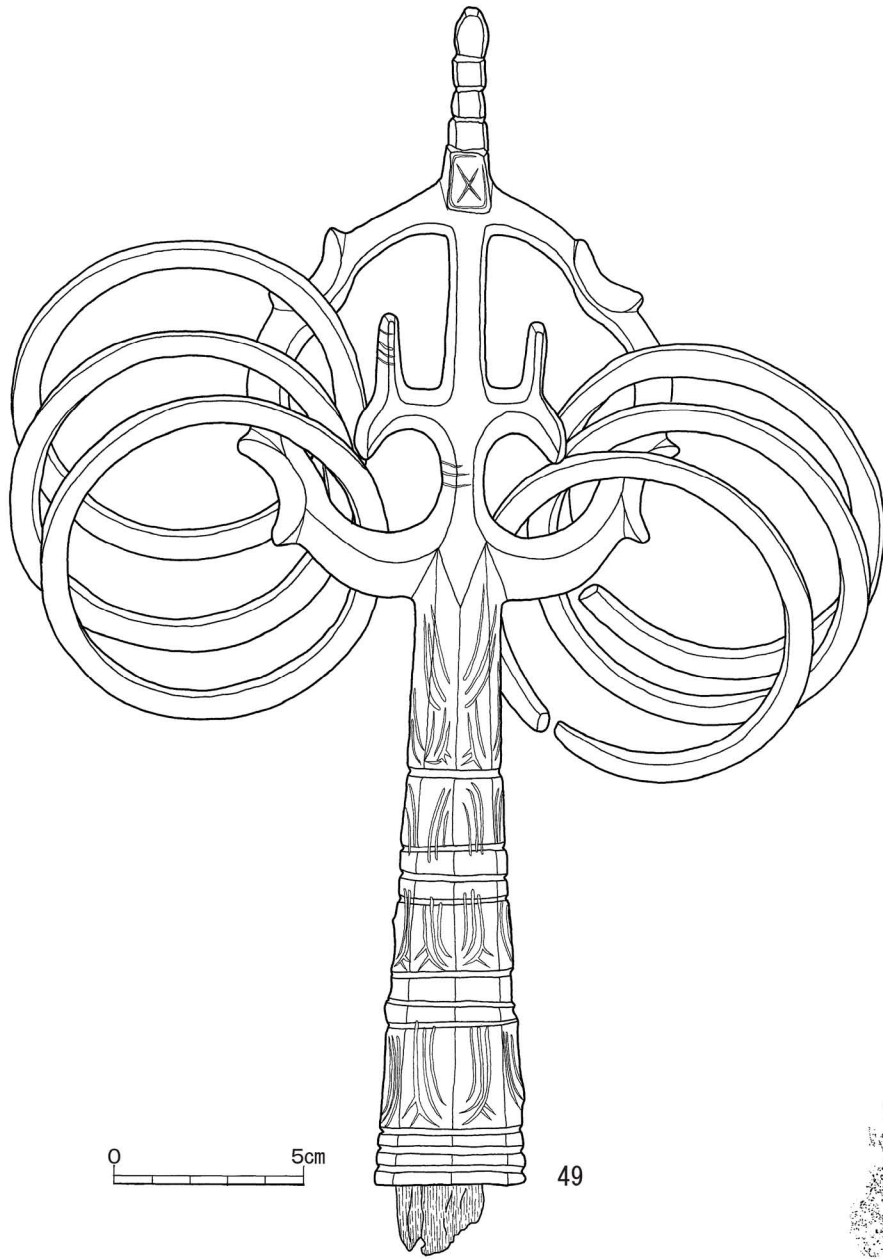
43、44はSX 8 出土の足袋の鉾で、青銅製である。丁度足の骨あたりから出土していることから被葬者が埋葬時に着用していたものと思われる。

45はSX19出土の青銅製品である。用途は不明である。何らかの飾りか。46はB区出土の青銅製品である。47はSX 7 出土の鑿で、刃先の平面形状・断面形状が曲線状であり、穂部分は全体にわたって同幅である。これらの形状から丸鑿と考えられる。丸鑿の用途は1712年「和漢三才図会」、1761年「和漢船用集」に圓穴を穿つ、と同一の内容が記されている。柄の幅は均一ではなく、冠部分(47-2)に向かって裾広がりになっている。口金と冠の間の柄が一部欠損しており、全長は正確には不明だが、柄の広がり方から推定すると5寸5分(20.9cm)程度と思われる。

48はSX19底面出土の小刀と握り鉞が錆着した状態の遺物である。小刀は、柄の部分が青銅製で、何らかの文様が線刻してある。握り鉞は和鉞、日本鉞、糸切狭とも呼ばれ、現存する最古のU字状握り鉞は、鶴岡八幡宮に残る北条政子の遺品である。中世の握り鉞(北条政子の遺品)はU字状の湾曲する部分が、丸い棒をそのまま曲げたような形であった。これは徳川家康の遺品の日本鉞(1616年死亡)にも共通した特徴で、U字後端の厚さは6mmあり、ここを薄く平らに幅を広げて弾性を与えるという技術はまだそれほど見られなかったようである。「芝公園一丁目増上寺子院群 光学院 貞松院跡 源興院跡」のAM61号早桶より出土した握り鉞では、U字後端の厚さは2～3mm(錆のため正確な数値は得られず)で作られており、ばねとしての機能を与えられている。当遺跡の遺物も錆により正確な厚さは不明だが、軟X線装置で確認したところU字状の部分の厚さが持ち手の部分より若干薄くなっており、AM61号出土の握り鉞とほぼ同時期と考えてよいのではないかと思われる。この遺物の年代は共伴遺物より1668～1697年に相当すると考えられているが、SX19からは共伴する出土銭の年代(1636年初鑄)も考慮に入れると17世紀後半～末と思われる。49(第80図)は、SX19出土の副葬品で錫杖である。青銅製で柄の部分は八角形に面取りしてあり、線刻が柄全体に施されている。また、下から約2cmの箇所に穿孔が2か所見られる。柄の中は空洞で、棒状の木材が柄の中に入った状態で出土している。錫杖は頂部の輪形に遊環を通し、これを揺すって音を出すもので、遊環が6個の製品と12個の2種類あるが本遺跡出土の錫杖は六波羅蜜を表す6個の遊環が付いた製品である。

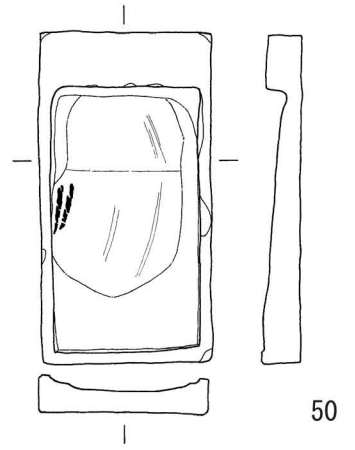
(4) 石製品(第80図)

50はSX19底面出土の赤色頁岩製の長方硯である。墨堂中央は磨り減り墨道が作られている。また硯面・硯縁・硯背の一部に墨が付着している。



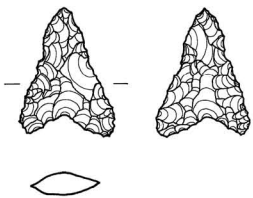
49

0 5cm

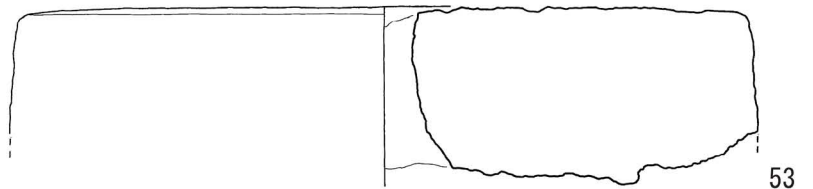


50

0 5 10cm

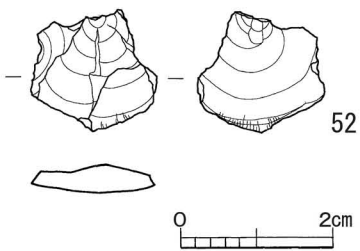


51



53

0 5 10cm



52

0 2cm

第80図 出土遺物実測図 (49、51、52は 1 : 1、50、53は 1 : 3)

51～53はA区の表土中より出土している。51は桑ノ木津留産の黒曜石製の石鏃で、52は姫島産黒曜石の剥片である。53は1/2を欠損した状態で出土した下臼である。阿蘇溶結凝灰岩製である。下臼の上面に刻まれた目のパターンは6分画×7～9溝である。上臼と一体となるすり面は、水平である。主溝・副溝のつき方から、逆時計回りの臼と考えられる。

(5) 釘 (第81図、第82図)

23基中11基より出土している。木質が付着しており、棺に使用された釘と考えている。61、75、84、88、91、92は2個体が十字形に錆着しており、方形棺が使用されていた傍証となる。出土した釘の大半は断面が方形を呈する角釘である。71～74(SX9)、83(SX11)、87、91(SX13)は断面円形である。後述するが、断面丸形の釘は洋釘であり、洋釘は明治10(1877)年頃に横浜に輸入されたのが始まりであるので、17世紀後半と考えているSX9から出土するのは時期が合わない。SX11はSX9を切って作られた墓穴なので、SX11の棺の釘が混入しても不思議ではない。よってSX9出土の丸釘は、SX11の釘が混入したものと考えている。

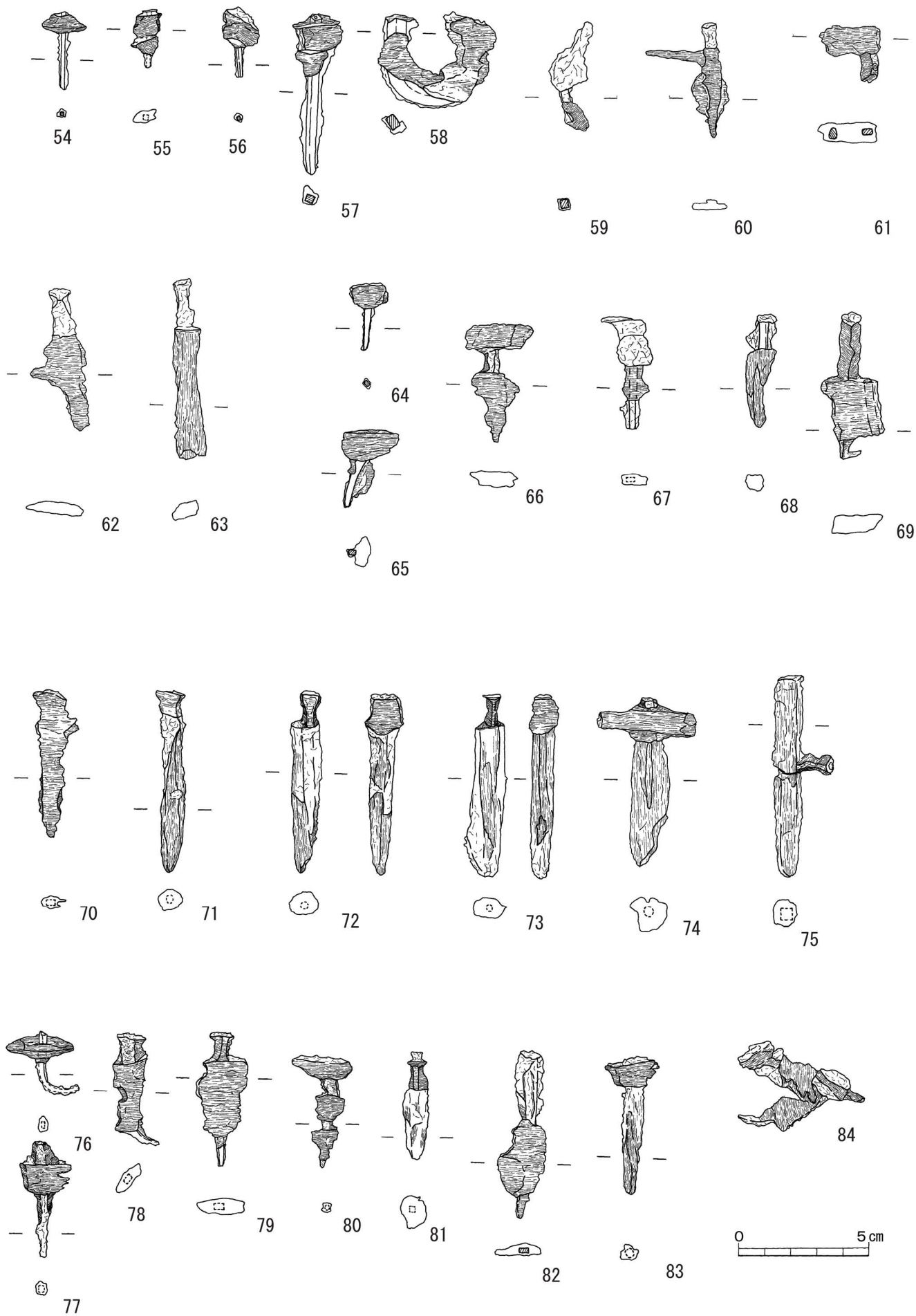
(6) 銭貨 (第83～第86図)

墓穴23基中12基より75点出土(錆着して分離出来ないものは1点と数えた)、B区から1点、計76点出土している。錆化が進み判別できないものもあるが、大半は寛永通宝である。種類は新寛永通宝が34枚と最も多く全体の45%を占めている。背「元」がSX4出土の128のみ出土している。古寛永通宝は18枚で24%、残りは鉄銭の寛永通宝等の鉄銭と思われるが、多くは錆化しており判別がつかない状態である。

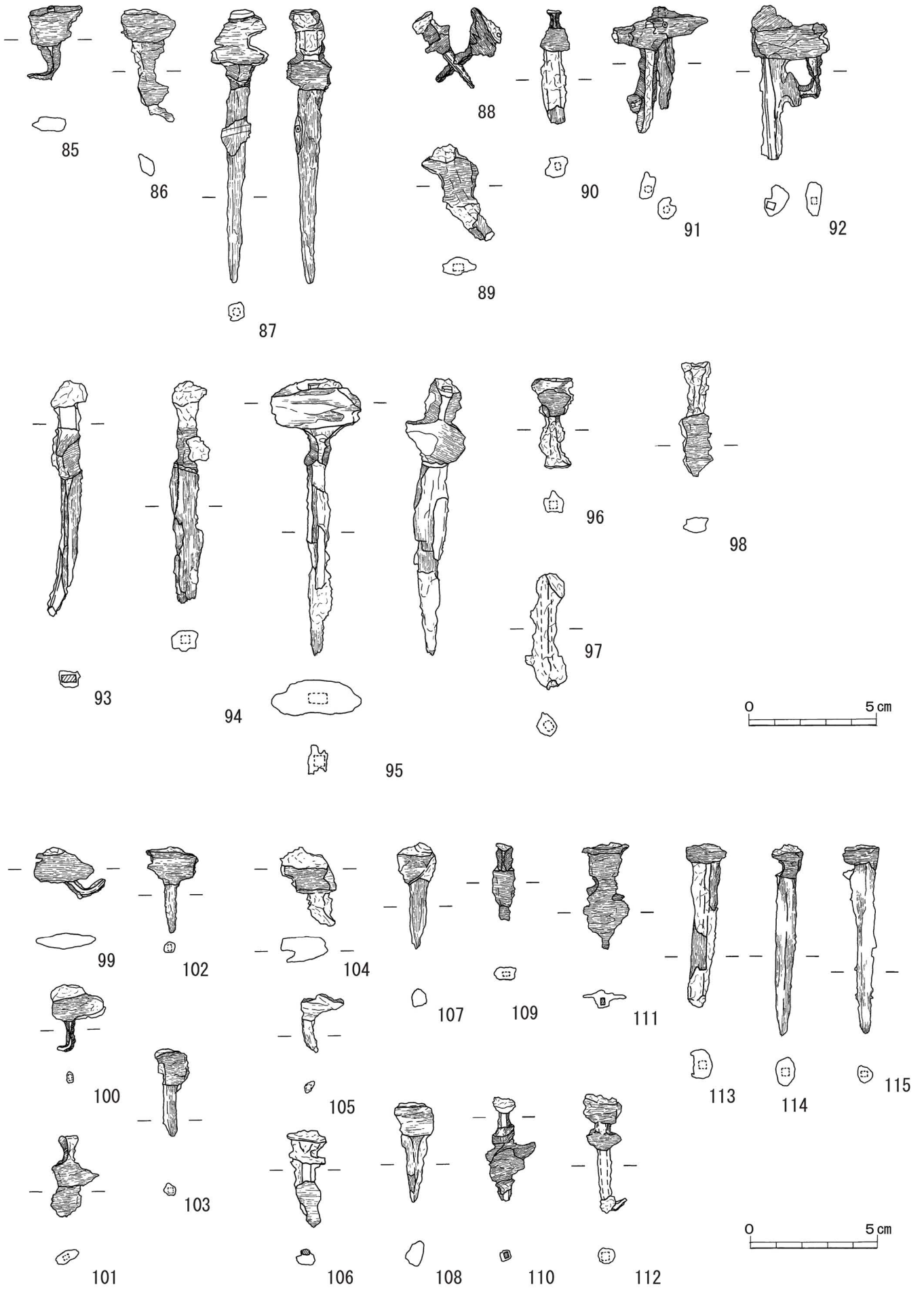
170はSX1出土の銭貨で、側面に繊維がわずかに付着していた。布で包まれた痕跡と考えられる。171は上部の形のはっきりした銭貨のみ銅銭で、残りは鉄銭である。SX10出土の176は鉄銭と銅銭が錆着しており、軟X線装置で5枚は確認することが出来た。下部の錆も鉄銭である可能性もあるが、錆化しており判別できなかった。全体に布で包んであったのかもしくは袋に入れられていたのか錆に布繊維の痕跡が残っている。177は鉄含有量の多い寛永通宝で、一部鉄錆、一部緑青錆を起こしている。178の鉄銭と錆着している。179は3枚錆着しており、1番上のみ銅銭で、下2枚は鉄銭である。銅銭の穿孔部分に他の箇所とは異なる錆が付着している。憶測でしかないが、有機質由来の錆とすると紐を穿孔に通していた可能性がある。

参考文献

- ・上田秀夫「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究N02』 日本貿易陶磁研究会1982
- ・大橋康二「十六・十七世紀における日本出土の中国磁器について」
『東アジアの考古と歴史 下 岡崎敬先生退官記念論集』 同朋舎 1987
- ・岡山市教育委員会 『岡山城三之曲輪跡 表町一丁目地区市街地開発ビル建設に伴う発掘調査』2002
- ・江戸遺跡研究会 [編] 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房 2001
- ・渡邊 晶 『日本建築技術史の研究—大工道具の発達史—』 中央公論美術出版 2004
- ・北九州市教育委員会 『京町遺跡』 1993
- ・港区芝公園一丁目遺跡調査団『芝公園一丁目増上寺子院群 光学院 貞松院跡 源興院跡』1988
- ・大分県教育委員会『中尾近世墓』1999



第81图 出土遺物実測図



第82图 出土遺物実測図

第3表 出土錢貨一覽

SX 1				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
122	寬永通宝	新	1697	鑄着一番上

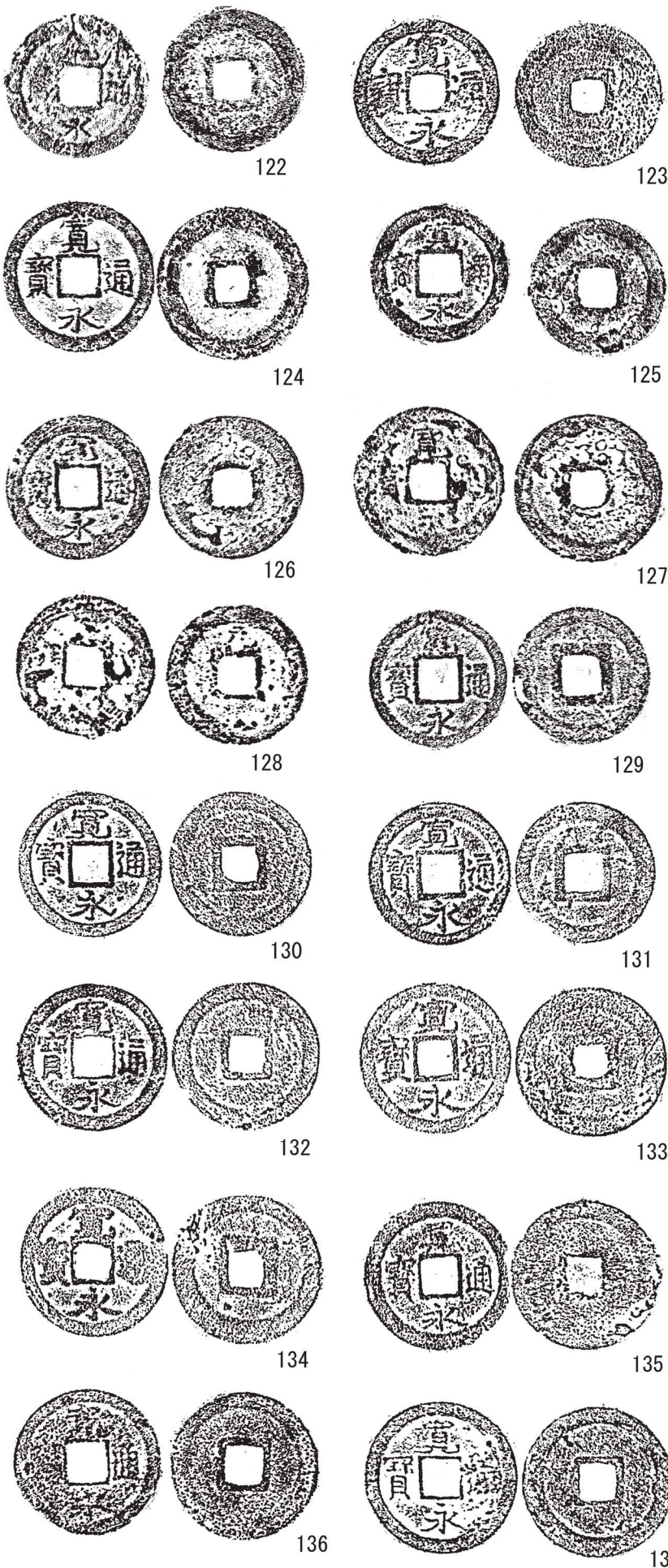
SX 3				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
123	寬永通宝	古	1636	

SX 4				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
124	寬永通宝	新	1636	鑄着
125	寬永通宝	新	1636	
126	寬永通宝	新	1636	
127	寬永通宝	新	1636	
128	寬永通宝	元文	1741	
129	寬永通宝	新	1636	

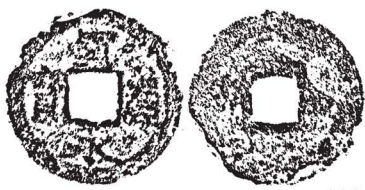
SX 7				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
130	寬永通宝	新	1636	
131	寬永通宝	新	1636	
132	寬永通宝	新	1636	
133	寬永通宝	古	1697	鑄着
134	寬永通宝	古	1697	
135	寬永通宝	新	1636	鑄着
136	寬永通宝	新	1636	
137	寬永通宝	新	1636	

SX 8				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
138	寬永通宝	新	1636	

SX 9				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
139	寬永通宝	古	1697	鑄着
140	寬永通宝	古	1697	
141	寬永通宝	古	1697	
142	寬永通宝	古	1697	
143	寬永通宝	古	1697	
144	寬永通宝	古	1697	
145	寬永通宝	古	1697	



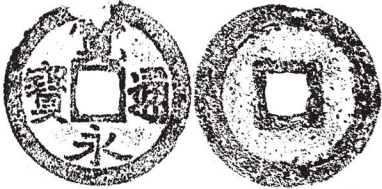
第83図 出土遺物拓影（錢貨）



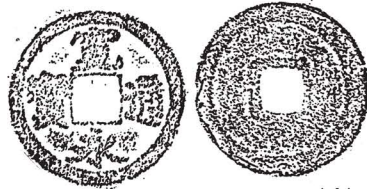
138



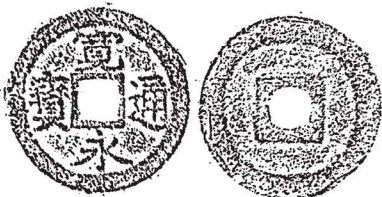
139



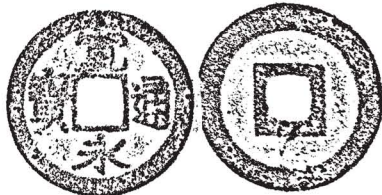
140



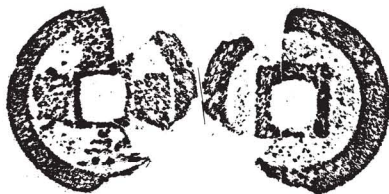
141



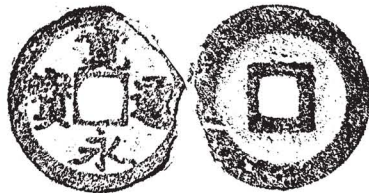
142



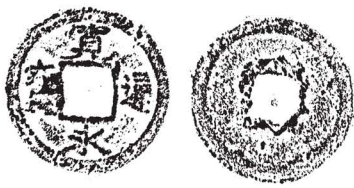
143



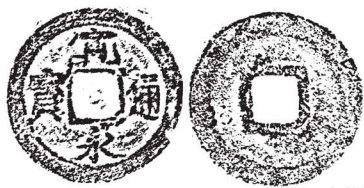
144



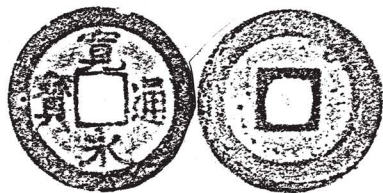
145



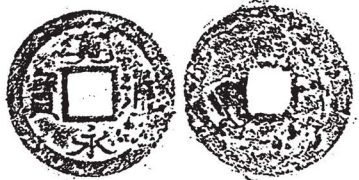
146



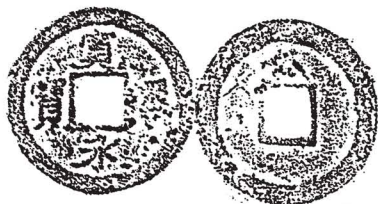
147



148



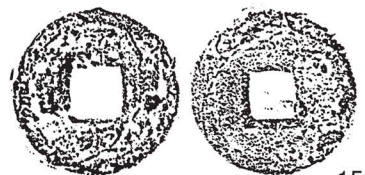
149



150



151



152

SX11				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
146	寛永通宝	新	1636	錯着
147	寛永通宝	新	1636	
148	寛永通宝	古	1697	
149	寛永通宝	新	1636	錯着
150	寛永通宝	新	1636	
151	寛永通宝	不明	1636	錯着
152	寛永通宝	新	1636	

SX15				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
153	寛永通宝	新	1636	錯着
154	寛永通宝	新	1636	
155	寛永通宝	新	1697	錯着
156	寛永通宝	新	1697	
157	寛永通宝	新	1697	錯着
158	寛永通宝	新	1697	

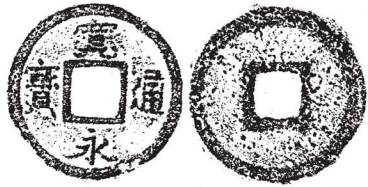
SX17				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
159	寛永通宝	鉄	1738	
160	寛永通宝	古	1636	

SX19				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
161	寛永通宝	古	1636	錯着
162	寛永通宝	古	1636	
163	寛永通宝	古	1636	
164	寛永通宝	古	1636	
165	寛永通宝	古	1636	
166	寛永通宝	古	1636	
167	寛永通宝	古	1636	

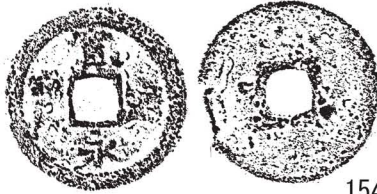
墓地一括				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
168	寛永通宝	新	1697	

第84図 出土遺物拓影（錢貨）

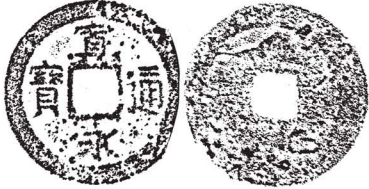




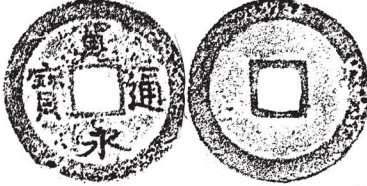
153



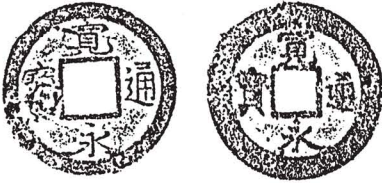
154



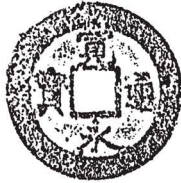
155



156



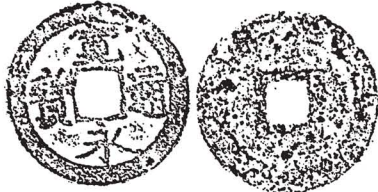
157



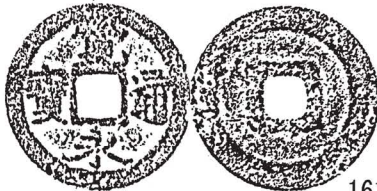
158



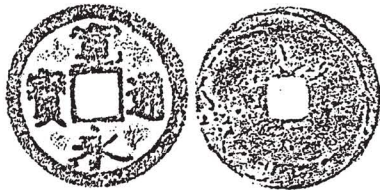
159



160



161



162



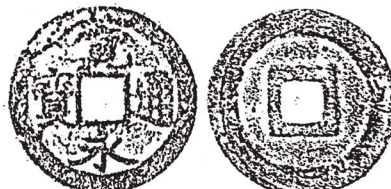
163



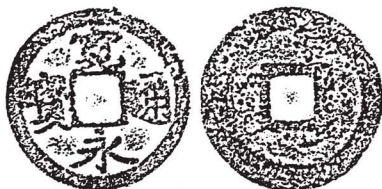
164



165



166



167



168



169



B区				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
169	寛永通宝	新	1697	

SX 1				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
170	寛永通宝	新	1697	6枚錆着。 上面拓本は No. 116

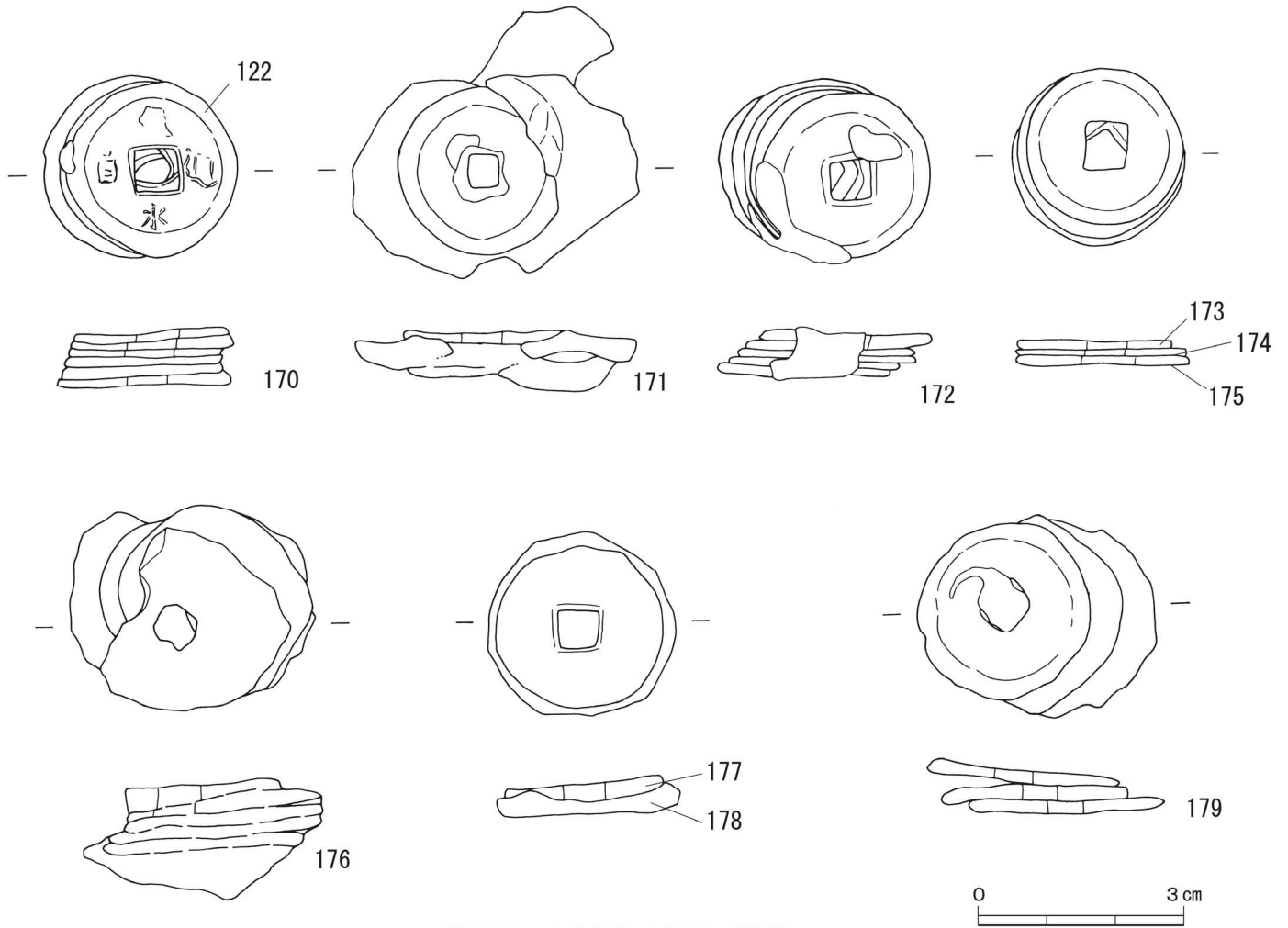
SX 2				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
171	寛永通宝	鉄	1738	5枚溶着

SX 8				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
172	寛永通宝	不明	布痕あり	5枚錆着
173	寛永通宝	新	1697	3枚錆着
174	寛永通宝	新	1697	
175	寛永通宝	新	1697	

SX10				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
176	寛永通宝?	鉄	1738	布痕のある錆が全体を覆う

SX17				
拓本番号	名称	分類	初鑄年号	備考
177	寛永通宝	鉄	1738	2枚錆着
178	寛永通宝	鉄	1738	
179	寛永通宝	鉄	1738	3枚溶着

第85図 出土遺物拓影（銭貨）



第86図 出土遺物実測図（銭貨）

第4表 数珠玉 遺物観察表

実測図 番号	出土位置	法 量 (cm)			材質
		高さ	幅	重さ(g)	
27	SX 2	0.70	0.70	0.90	ガラス
28	SX 2	0.70	0.70	1.00	ガラス
29	SX 2	0.70	0.80	0.90	ガラス
30	SX 2	0.70	0.80	0.90	ガラス
31	SX 9	0.30	0.60	0.20	ガラス
32	SX 9	0.40	0.50	0.10	ガラス
33	SX 9	0.35	0.60	0.20	ガラス
34	SX 9	0.40	0.60	0.10	ガラス
35	SX 9	0.40	0.60	0.30	ガラス
36	SX 4	0.06	0.65	0.20	土師質

第5表 煙管 遺物観察表

実測図 番号	出土位置	部位	長さ	火皿直径	火皿高さ	小口直径	口付直径
38	SX 1	煙管雁首	4.1	1.3	0.8	1.0	—
39-1	SX 3	煙管雁首	4.4	1.3	0.8	1.2	—
39-2	SX 3	煙管吸口	6.3	—	—	0.9	0.6
40	SX 9	煙管雁首	(2.5)	1.5	0.8	欠損	—

第6表 陶磁器 遺物観察表

実測図 番号	出土遺構・ グリッド	器種 器形	部位	区分	法 量 (cm)			色 調		胎土	技 法		文 様		産地・年代
					口 径	底 径	高 さ	外	内		成形・ 焼形	装飾	外	内	
1	SX 2	丸碗	口縁～ 底部 付近	磁器	(9.60)	—	4.3	明オリーブ灰 (2.5Y7/1) 青灰 (5B6/1)・暗緑灰 (5G4/1)	明オリーブ灰 (2.5Y7/1)	精良	堅緻・貫 入全体に あり	染付	草花文		19C～肥前系。
2	SX 2	小丸碗	口縁～ 底部 付近	磁器	8.8	—	3.6	灰白 (10Y8/1), 暗青灰 (5B4/1)	灰白 (10Y8/1)		堅緻	染付	水草?		17C後～肥前系。釉ち ちみ貫入あり。
3	SX 7	筒形碗	口縁～ 底部	青磁 染付	(7.80)	3.4	5.6	明緑灰 (7.5GY7/1), 染 付: 暗青灰 (10BC4/1), 青灰 (10BC5/1)	明緑灰 (7.5GY7/1)	精良	堅緻	染付	青磁釉	四方禪文。見込五 弁花コンニャク印。 圏線1	18C後半～。肥前系。 内面に降灰がみられる。
4	SX 9	丸碗	完形	磁器	11.05	4.5	6.4	灰白 (N7), 明青灰 (10 BG7/), 暗青灰 (10BG3/)	灰白 (N7), 明青 灰 (10BG7/), 暗 青灰 (10BG3/)	精良		染付	花卉文	花卉文、圏線見込 外周2、口縁端部1	17世紀末か。
5	SX23	小坏	口縁～ 底部	磁器	(8.25)	(2.9)	(4.45)	灰白 (N7/), 暗オリーブ 灰 (2.5GY6/1)	灰白 (N7)	精良	堅緻	染付	草文		19C
6	SX23	丸碗	ほぼ 完形	磁器	10.25	4	5.25	灰白 (2.5GY8/1), 青灰 (5B5/1), オリーブ灰 (2. 5GY6/1), 暗褐 (10YR3/4), 青灰 (10BG6/1)	灰白 (7.5Y7/1)	精良	堅緻	染付	雪輪梅花文		19C～波佐見系
7	SX13	端反碗	完形	磁器	10.3	3.8	5.7	灰白 (N8/), コバルト (青)	灰白 (N8/), コバ ルト (青)	精良	堅緻	印判手	青海波文、草 花文	見込松竹梅。圏線 1	1870-1880代。肥前。
8	SX23	筒形碗	口縁	磁器	8.6	—	(6.0)	灰白 (N8/), 呉須	灰白 (N8/), 呉須	精良	堅緻	染付	松竹梅文	四方禪文	18C後 肥後
9	SX23	筒形碗	口縁	磁器	8.4	—	(5.8)	灰白 (N8/), 呉須	明緑灰 (7.5GY8/1) 呉須, 暗緑灰 (5G4 /1)	精良	堅緻	染付	窓絵文	見込破損のため不 明。圏線2 四方 禪文	肥前 1820-60年代
10	SF 1	—	底部	磁器	—	(4.0)	(2.2)	灰白 (N8/), 呉須	灰白 (N8/)	精良	堅緻	染付	不明		肥前 18C
11	A区	切高台	底部	磁器	—	(3.65)	1.35	淡黄 (2.5Y8/4)	淡黄 (2.5Y8/3)	精良	堅緻	施釉			中国 14C後
12	SF 1	5寸皿	底部	磁器	—	(8.0)	(1.9)	灰白 (10YR8/2), 青灰 (5B6/1)	淡黄 (2.5Y8/3), 暗灰 (N3/), 暗オ リーブ灰 (2.5GY3 /1)	精良	堅緻	染付	圏線3、高台 内圏線1	見込外周二重圏線、 草花文?	肥前17C後半
13	A区-2.19	小皿	底部	磁器	—	—	(2.3)	灰白 (N8/), 暗青灰 (10 BG4/1), 青灰 (5B5/1)	灰白 (N8/1), 呉 須, 青灰 (5B5/1)	精良	堅緻	染付	圏線1、草花 文?	見込外周二重圏線、 草花文?	中国 16～17世紀
14	A区-11	基筒底	底部	磁器	—	(3.0)	(1.2)	淡黄 (2.5Y8/3), にぶい 橙 (7.5YR6/4)	明オリーブ灰 (5G Y7/1), 呉須	精良	堅緻	染付	見込外周二重 圏線、草花文?	高台胎、菖蒲葉文	中国 16～17世紀
15	A区-23	碗	底部	磁器	—	5.1	(3.9)	明オリーブ灰 (5GY7/1), 呉須	明オリーブ灰 (5G Y7/1), 呉須	精良	堅緻	染付	見込十字花文, 二重圏線	花唐草文	中国 16末-17世紀初 大橋編年C類
16	SX 7、9	甕	底部	陶器	—	41.5	(21.3)	にぶい赤褐 (2.5YR3/2), 褐 (7.5Y4/3)	明赤褐 (2.5YR3/2), にぶい赤褐 (5YR4/3)	精良	堅緻	焼き締め粘土積 上げのちナデ、 タタキ	ナデ、タタキ 底部に穿孔	ナデ、タタキ	備前焼? 19世紀か
17	SF 1	播鉢	口縁～ 胸部	陶器	—	—	(11.0)	にぶい褐 (7.5YR4/3), 黄灰 (2.5Y4/1)	灰褐 (7.5TR4/2)	精良	堅緻	焼き締め		単位13本のスリ目	備前 16世紀第2四半 期～17世紀初
18	SX 9	壺	肩部	陶器	—	—	(9.6)	灰 (N51, N61)	灰 (N51)	精良	堅緻	線影			備前? 16～17世紀
19	SX16	天目碗	口縁～ 胸部	陶器	—	—	(2.6)	黒 (7.5YR17/1)	黒 (7.5YR17/1)	精良	堅緻				瀬戸美濃 17世紀
20	SX23	筒形碗	口縁～ 底部	陶器	(8.0)	4.22	5.47	灰黄 (2.5Y7/2), 極暗赤 褐 (5YR2/4)	極暗赤褐 (5YR2/3)	精良	堅緻		飛びガンナ 口縁付近施釉	飴釉	瀬戸美濃 17世紀
21	A区-22	卵手	底部	陶器	—	(4.2)	(2.6)	浅黄 (2.5Y7/3), オリー ブ (5Y5/4)	浅黄 (2.5Y7/3), オリーブ (5Y5/4)	精良	堅緻	施釉			唐津 卵手 17C後
22	A区-28	小坏	完形	陶器	7.1	3.1	2.9	灰白 (R8/2)	灰白 (R8/2)	精良	堅緻	施釉 (焼成不良)			唐津 ちりめん高台 焼成不良 17C後
23	C区	丸碗	底部	陶器	—	4.6	(3.4)	灰白 (2.5Y7/1), にぶい 橙 (10YR7/2)	灰白 (2.5Y7/1), 灰黄 (2.5Y7/2)	精良	堅緻	見込蛇ノ目軸ハ ギ	銅線釉	透明釉	内野山 17C

第7表 土師質皿 遺物観察表

実測図 番号	出土位置	器種器形	胎 土	法 量 (cm)			色 調	備考
				口径	底径	高さ		
24	SX21	土師質小皿	1mm以下の褐色粒	(8.25)	4.3	1.5	橙 (7.5YR 7/6)	糸切底
25	SX21	土師質小皿	2mm以下の茶褐色粒	(6.8)	2.6	1.6	浅黄橙 (10YR8/4)	糸切底

第8表 土人形 遺物観察表

実測図 番号	出土位置	器 種	胎 土	高さ	幅	奥行	色 調	備考
26	C区	土人形	1mm以下の白色砂粒	5.8	2.2	3.00	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	型打

第9表 金属製品 遺物観察表

実測図番号	出土位置	器種	高さ(長さ)(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
37	SX 1	不明青銅製品	3.40	3.00	-	木質あり
41	SX 3	火打ち金具	5.70	1.90	0.20	鉄製品
42	SX 3	火打ち金具飾り具?	5.10	1.10	0.10	青銅製品
43	SX 8-1	足袋 鋌	1.60	1.20	0.50	青銅製品
44	SX 8-2	足袋 鋌	1.30	1.20	0.50	青銅製品
45	SX19-6	不明青銅製品	1.1 (直径)	-	0.50	青銅製品
46	B 区	不明青銅製品	4.80	1.50	1.00	青銅製品
47	SX 7	鑿	1.62	1.30	-	
47-1	SX 7	鑿の冠	2.2 (直径)	-	0.10	鉄製品、木質あり
48	SX19	和鋏 小刀	19.90	2.80	1.20	和鋏と小刀付着
49	SX19	錫状	16.10	2.00	-	青銅製品

第10表 石製品 遺物観察表

実測図番号	出土位置	器種	高さ(長さ)(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
50	SX19	硯	12.60	6.80	1.50	木質あり
51	A 区	石臼	28.30	4.80		鉄製品
52	A 区	石鏃	1.70	1.30	0.30	青銅製品
53	A 区	剥片	1.60	1.70	0.40	青銅製品

第11表 釘 遺物観察表

実測図番号	出土位置	断面形	分類名	長さ(cm)	幅(cm)
54	SX 2	方形	A-1類	2.90	1.70
55	SX 2	方形	C-1類	2.30	1.10
56	SX 2	方形	A-1類	2.20	1.40
57	SX 2	方形	C-1類	6.10	1.80
58	SX 2-1	方形	A-1類	3.60	4.40
59	SX 2	方形	A-2類	4.20	1.40
60	SX 4	方形	C-1類	4.40	1.30
61	SX 4	方形	C-1類	2.10	2.20
62	SX 4	方形	C-1類	5.40	2.00
63	SX 4	方形	B-1類	6.90	1.10
64	SX 4	方形	C-1類	2.60	0.2~1.2
65	SX 4	方形	C-1類	3.00	2.00
66	SX 4	方形	C-1類	4.40	1.80
67	SX 7	方形	A-1類	4.20	1.10
68	SX 7	方形	B-1類	4.10	0.3~1
69	SX 7	方形	C-2類	5.40	1.30
70	SX 8	方形	A-1類	5.60	1.60
71	SX 8	円形	B-1類	6.90	0.90
72	SX 8	円形	B-1類	6.90	1.10
73	SX 9	円形	B-1類	6.90	1.30
74	SX 9-11	円形	B-1類	6.40	3.40
75	SX 9	方形	B-1類	7.60	2.30
76	SX 9	方形	A-2類	2.40	2.60
77	SX 9	方形	C-1類	4.40	1.90
78	SX10-2	方形	C-2類	4.30	1.30
79	SX10-3	方形	C-1類	5.10	1.90
80	SX10	方形	C-1類	4.30	2.30
81	SX10	方形	B-1類	4.10	1.10
82	SX10	方形	C-1類	6.40	1.70
83	SX10	方形	B-1類	5.30	2.10
84	SX10	方形	C-1類 (上)	5.1	1.30
	SX10	方形	C-2類 (下)	4.5	1.20
85	SX11	方形	C-2類	2.80	1.70
86	SX11	方形	C-2類	4.40	1.90
87	SX11-1	方形	B-1類	10.60	2.20
88	SX11	方形	C-1類 (右)	3.5	2.00
	SX11	方形	C-1類 (左)	3.4	1.80

実測図番号	出土位置	断面形	分類名	長さ(cm)	幅(cm)
89	SX11	方形	A-1類	4.10	2.20
90	SX11	方形	B-1類	4.40	1.20
91	SX13	円形	B-1類 (左)	4.5	0.80
	SX13	円形	B-1類 (右)	4.1	0.60
	SX13	円形	A-1類 (上)	3.5	0.80
	SX13	円形	A-1類 (下)	1.3	0.50
92	SX13	方形	C-1類 (左)	6.0	3.00
	SX13	方形	A-1類 (右)	1.5	0.50
93	SX13-3	方形	B-1類	9.10	1.20
94	SX13	方形	B-1類	8.60	1.20
95	SX13	方形	B-1類	10.50	2.30
96	SX15	方形	C-1類	3.50	1.60
97	SX15	方形	不明	4.40	1.40
98	SX15	方形	C-1類	4.40	1.10
99	SX15	方形	A-1類	2.00	2.30
100	SX17	方形	C-1類	2.70	2.20
101	SX17	方形	C-1類	3.20	1.80
102	SX17	方形	B-1類	3.40	2.00
103	SX17	方形	C-1類	3.30	1.30
104	SX17	方形	B-1類	3.00	2.10
105	SX17	方形	A-2類	2.10	1.70
106	SX18	方形	A-2類	3.80	1.50
107	SX18	方形	B-1類	4.10	1.50
108	SX18	方形	B-1類	3.80	1.50
109	SX18	方形	C-1類	2.90	0.90
110	SX18	方形	C-1類	4.10	2.00
111	SX18	方形	A-1類	4.10	1.80
112	SX19-1	方形	C-2類	4.60	1.50
113	SX19-2	方形	B-1類	6.40	1.60
114	SX19	方形	B-1類	7.50	1.20
115	SX19	方形	B-1類	7.40	1.40
116	SX 9	方形	A-1類	3.70	1.40
117	SX 9	方形	C-1類	3.30	0.90
118	SX 4	方形	A-1類	4.20	1.50
119	SX19	方形	C-1類	2.90	1.50
120	SX19	方形	A-1類	4.10	2.00
121	SX19	方形	A-2類	4.50	2.20

第5節 まとめ

1 墓石の分類

中山遺跡内墓地での使用墓石の変遷を検討する。その目的は

- 1：墓地内で使用された墓石の傾向
- 2：紀年銘のない墓石の年代の推定である。

これらの目的を果たすため遺跡出土の墓石の分類を試みるが、遺跡内の墓石数が29基と少数であるため個々の墓石を細分類しても墓地全体での墓石使用傾向をつかむのは無理である。今回は墓標の頭部形態から5類に大別し、併せて墓標の高さ、台石との組み合わせから等から大別5形式・細別11類に分類した。そのため台石のみ残存している20号、28号墓石は除外し、計25基を分類の対象とした。

また墓石の製作年代だが、詳細は不明である。墓石を建てる時期は、通常7回忌あるいは13回忌の前後と言われているが、全ての墓がこの時期内に建立できたとは断言できない。墓の建直しが行われている可能性もあり、詳細な墓石の製作年代を読み取るのは困難である。しかし墓標に刻まれた没年代は墓石の製作年代を推察するのに有効な手がかりでもある。そこで今回は墓石の製作年代を没年代の約10年前後と考え、大まかな年代を提示する程度に留めることとする。

中山遺跡内の墓地は、副葬品・墓標より17世紀～19世紀末の間使用されたと考えられ、前述のとおり墓標の頭部形態より5類に分け、さらに台石の水鉢の有無・厚み・石材より11種類に細分した。各形式の詳細については41～43頁に記載した。

1 駒形

女狐近世墓地編年A-4類（板牌形）と類似した形態である。その違いは墓標の下部に刻まれた蓮華文とその施文法である。A-4類の蓮華文は陰刻したもので、その文様に下弁があるのに対し、21, 22号は線彫りで、下弁がない。しかしこの施文法・文様の差異が、製作時期もしくは地域性に由来するものなのかは不明である。この墓石は刻字に施された朱書きより逆修墓と考えているので、製作年代は没年代より古くなる。どの程度古くなるのかは予測がつかないが女狐墓地のA-4類の製作年代が1720～30年代、22号の没年代が1736年であることから、1720年～1730年代に製作されたと考えられる。

2 不定形駒形

頭部の正面観が三角に近い形を成す。正面中央に向かって若干凹んでいる。砂岩製。裏面、地中に埋没している部分は整形されていない。刻字されていないため明確な没年代は不明であり、遺物よりその製作年代を推定している。

3 櫛形

頭部が弧状を呈するものを指す。18世紀前半から19世紀の全国的形式で、本遺跡では1730～1790年代、1880～1900年代の二期にわたって存在する。本遺跡では大別3形式、細別4類に分類した。また、1類～2類の正面は花燈形に彫りくぼめている。

吉田寛氏（吉田2002）によると、大分市周辺の櫛形（位牌形）は1740年代から1770年代の大半はその側面観が薄く、台形状を呈し、背面の成形度が弱い形態であったが、1780年代以降は基本的に側面観が厚い長方形となり、背面の成形度が強い形態となるそうである。同様の型式的変化が中山遺跡内櫛形墓石の3-1類から3-1A類の変遷でも確認できる。

1 駒形 (21号、22号) ※女狐近世墓地編年のA-4類に類似。

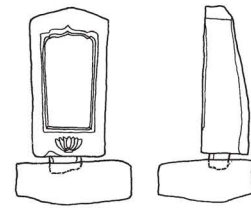
石 材：凝灰岩、台石1段

墓標の成形：柄穴結合で、正面の幅が狭くなり、断面の下方が厚くなる。
裏面加工なし。

正面の文様：花燈形。本体下部に蓮華文が線彫りされる。蓮華の下弁がない。
刻字正面のみ。

台石の成形：下面加工なし。台石水鉢なし。

年 代：1730～1750年代



22号

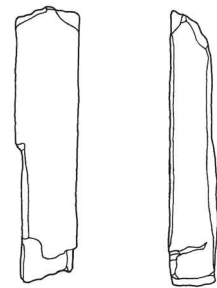
2 不定形駒形

石 材：砂岩

墓標の成形：正面中央に向かって凹んでいる。頭頂部は三角に近い形を成す。
一定した幅の厚さ。裏面、埋没部分加工なし。

正面の文様：なし

年 代：1630年代～1690年代か。



19号

3 櫛形

3-1類 (10号、26号、27号)

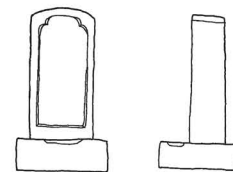
石 材：砂岩 台石1段(花崗岩)

墓標の成形：正面の幅が狭くなり、断面の下方が厚くなる。裏面加工なし。

正面の文様：花燈形。刻字正面のみ。

台石の成形：楕円形の台石水鉢あり。2段目高さ約10cm。

年 代：1730年代～1780年代



10号

3-1A類 (17号、18号、25号)

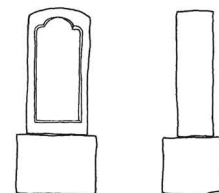
石 材：砂岩 台石1段(花崗岩)

墓標の成形：正面の幅が狭くなり、断面の下方が厚くなる。裏面加工なし。

正面の文様：花燈形。刻字正面、右側面。

台石の成形：下面・裏面加工なし。台石水鉢なし。2段目高さ約20～30cm。

年 代：1760年代～1790年代



18号

3-2類 (4号、11号)

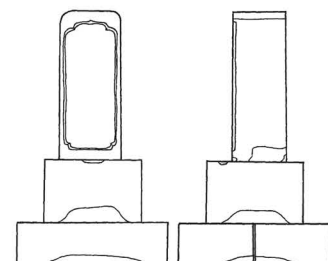
石 材：凝灰岩 台石2段

墓標の成形：全面加工あり。高さ約60～70cm

正面の文様：花燈形。刻字正面、右側面。

台石の成形：台石葵形の水鉢あり。

年 代：1880年代～1900年代



11号

3-3類 (13号)

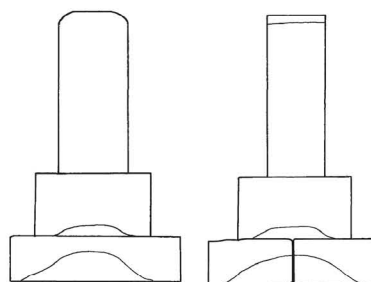
石 材：凝灰岩 台石2段

墓標の成形：全面加工あり。高さ約60cm。

正面の文様：花燈形なし。刻字正面と両側面にあり。

台石の成形：台石水鉢なし。

年 代：1880年代～1900年代



13号

4 角柱形

4-1類 (12号、15号)

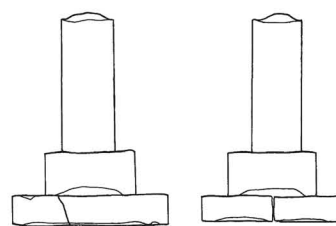
石 材：凝灰岩 台石1段ないし2段

墓標の成形：丘状頭角柱。全面加工あり。高さ約50cm。

正面の文様：刻字正面と両側面にあり。

台石の成形：台石水鉢なし。

年 代：1780年代～1830年代



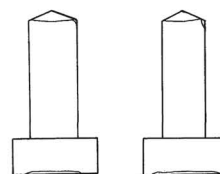
15号

4-1A類 (14号)

墓標の成形：尖頭角柱。

台石の成形：台石水鉢なし。

年 代：1800年代～1820年代



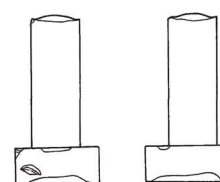
14号

4-1B類 (5号、24号)

墓標の成形：丘状頭角柱。

台石の成形：台石に菱形の水鉢あり。

年 代：1810年代～1850年代



24号

4-2類 (1号、2号、3号、7号)

石 材：凝灰岩 台石1段ないし2段

墓標の成形：丘状頭角柱。全面加工あり。高さ約60cm。

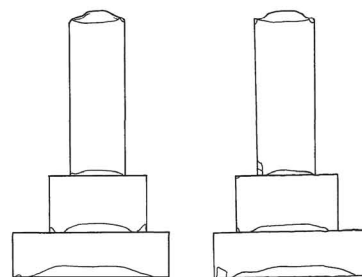
正面の文様：刻字正面と両側面にあり。

台石の成形：台石菱形の水鉢あり。

台石の文様：世話人名刻字。正面と右側面にあり (2号、7号)。

台石の文様：刻字正面と右側面にあり。

年 代：1820年代～1850年代



7号

5 像類 (丸彫)

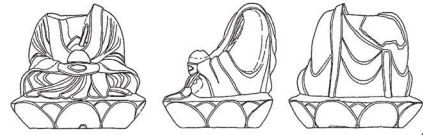
5-1 A類 (29号)

地藏像を丸彫し、台座(蓮華座)を有するもの

砂岩製

宝珠座像

年代：18世紀後半



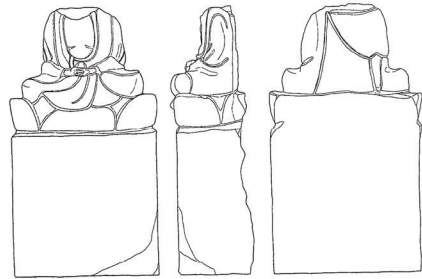
29号

5-1 B類 (30号)

蓮華座の下に台石がある。

裏面未彫。

年代：18世紀後半



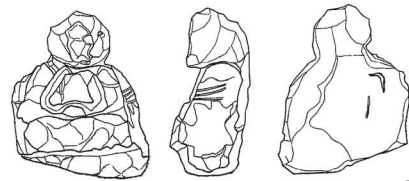
30号

5-2類 (31号)

おそらく宝珠座像

凝灰岩製

年代：18世紀後半



31号

墓番号	形式名	1650	1660	1670	1680	1690	1700	1710	1720	1730	1740	1750	1760	1770	1780	1790	1800	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
9	不定形駒形 2	←-----→				紀年銘なし																					
19	不定形駒形 2	←-----→				紀年銘なし																					
21	駒形 1					紀年銘なし			←-----→																		
22	駒形 1					1736			←-----→																		
27	櫛形 3-1					1743				←-----→																	
26	櫛形 3-1					1736				←-----→																	
10	櫛形 3-1							1769					←-----→														
25	櫛形 3-1A							1760				←-----→															
17	櫛形 3-1A							1780						←-----→													
18	櫛形 3-1A							1781						←-----→													
12	角柱形 4-1									1787					←-----→												
14	角柱形 4-1A									1808							←-----→										
15	角柱形 4-1									1817								←-----→									
5	角柱形 4-1B									1815								←-----→									
24	角柱形 4-1B									1834									←-----→								
7	角柱形 4-2									1825									←-----→								
2	角柱形 4-2									1833									←-----→								
1	角柱形 4-2									1838									←-----→								
3	角柱形 4-2									1838									←-----→								
11	櫛形 3-2									1880																←-----→	
4	櫛形 3-2									紀年銘なし																←-----→	
13	櫛形 3-3									1884																←-----→	

第12表 中山遺跡墓石推移表

4 角柱形

本体の水平断面が正方形に近くなり、頭部は屋根形の寄棟表現が痕跡化した形式である。当初から側面に文字を記すことを前提にした多観面の形式で、19世紀に全国的形式として成立するものである。本遺跡では1780～1850年代にかけて連綿と建立されている。

角柱形は頭頂部形から分類が可能であるが、本遺跡では尖頭角柱（14号）1点を除いて他8点は全て丘状頭角柱であるため4類は明記がなければ全て丘状頭角柱である。

5 像類（丸彫形）

幼児用の墓石として使われる全国的形式で、18世紀後半に集中的に使用されている。本遺跡では廃仏毀釈により5-1類は首を損失しており、5-2類は彫面が原形を留めていない状態で検出された。

25基中駒形不定形2基、駒形2基、楕形9基、角柱形9基、地蔵形3基を確認した。墓地内の使用墓石は、2類（不定形駒形）→1類（駒形）→3-1類（楕形）→5類（地蔵形）→4類（角柱形）→3-2類（楕形）と変遷していくが、ほぼ全国的な墓石の盛衰に合致していることが判明した。

2 早桶使用墓と方形棺使用墓との関係

今回の調査では23基の墓穴が確認された。近世墓地としては規模が小さいが当墓地の特徴をつかむため、これらの墓穴から埋葬施設の形態についての検討を行いたい。

当墓地は23基とも土葬墓と考えている。埋葬の際用いられたのはその大半は木製棺と思われるが、残存していないため釘の有無や墓穴の形態から「早桶使用（釘出土なし墓穴）」「方形棺使用（釘出土あり墓穴）」の2種に大別する。

この区分に従って、時代毎にその変遷を第13表で確認した。19世紀前半までは均等に2種類の埋葬形態が並存しているが、本遺跡は19世紀中葉の墓穴が存在しないため、19世紀後半の様相は不明である。1838年没の2基（SX1・3）が早桶使用墓と考えられるので（円形、釘無）、1838年以降～19世紀末の間には方形棺へと確実に移行していったと考えられる。次に墓石との対応関係から推測される埋葬者の性別によって差があるか考えてみる。第14表がその結果だが、本遺跡では性別は埋葬施設の選択にさほど影響していないことが判明した。また、成人・未成人で区分すると（第15表）その差は明瞭に現れた。この結果より中山遺跡内の墓地では埋葬施設を選択する際に、埋葬者の年齢が最も影響しているといえる。

第13表 埋葬施設の推移

	17世紀	18世紀	19世紀 初～中	19世紀末	時期不明	計
早 桶	1	4	5	0	1	11
方形棺	2	3	4	3	0	12
計	3	7	9	3	1	23

第14表 埋葬施設男女別一覧表

	女性	男性	不明	計
早 桶	3	4	4	11
方形棺	4	7	1	12
計	7	11	5	23

第15表 埋葬施設年齢別一覧表

	成人	未成年	不明	計
早 桶	4	3	4	11
方形棺	12	0	0	12
計	16	3	4	23

3 六道銭について

中山遺跡内の墓地23基中12基より出土、約52%の出土率である。その殆どが新寛永通宝で、古寛永通宝は17世紀後半と考えられるSX9、19の各7枚（第84図139-145、第85図161-167）、SX7の8枚中2枚（第83図133、134）、SX11の12枚中1枚（第84図148）から古寛永通宝が出土し、SX4で背「元」（第83図128）が1点出土している。

1基あたりの枚数は7枚組が4基と最も多い。次は6枚が3基、残りは5枚、1枚、4枚、8枚、11枚と統一されておらず、当墓地では必ずしも6枚組ではないことが確認できた。7枚組が多い点では鹿児島県内出土の六道銭と共通している。また六道銭の枚数は、大分県女狐墓地・中尾墓地の例より年齢・性別によって異なることが指摘されている。当遺跡の場合は性別による枚数の違いは明確に出てこない。年齢は、墓標より未成年と考えられる被葬者の墓穴からは銭貨が出土していない（SX5、12、14）ことはいえる。しかし墓標より成人と思われる墓から出土していない2基の墓穴（SX13(男)、18(女)）をどう考えるかだが、現時点でいえるのは、中山遺跡内の墓地の六道銭は未成年墓からは出土していない、ということのみである。

また、付着した六道銭は、SX1、SX4出土の6枚組の錯着した銭貨はそれぞれ表-背-表-背-表-背の方向で重ねられており、銭面を揃える意図があったのではないかと考えられる。この他にもSX7、11、15から各2組背面を合わせ錯着した銭貨が見られた。ただしSX11はこの他にも表-表-裏と銭面を揃えていない資料が出土している。SX19では表-表-表-背-背-背、SX9からは表-表-表と、方向を揃えた銭貨が出土している。SX9はこの3枚以外にも銭貨が3枚出土しており、SX9はSX19と同じ銭面組み合わせであった可能性があるが、検出時に確認できなかった。SX9とSX19は墓石が同形式であり、六道銭の銭面でも何らかの共通点が窺えるのは興味深い。

4 釘について

中山遺跡内墓地の墓穴で釘が出土した墓穴は23基中、13基と全体の56%であった。釘の有無で早桶墓か方形棺か埋葬施設を大別すると実に半分以上の被葬者が方形棺による埋葬となる。

断面形態が円形を呈する丸釘は、SX9、11、13より出土している。中尾近世墓の資料から吉田氏は角

釘から丸釘への変化は慶応元(1865)年から明治33(1900)年の間に起こっていると想定していた。本遺跡の出土例からはSX 9は副葬品から17世紀後半と推定されるため、角釘→丸釘の変化は幅が広がる。しかし、出土状況からSX11はSX 9を切って作られた墓穴なので、SX11の棺の釘が混入しても不思議ではない。よってSX 9出土の丸釘は、SX11の釘が混入したものと考えられる。

そのように考えると、当遺跡ではSX 2 (1833年)までの鉄釘がいずれも断面形態が方形を呈する角釘である。これから、1833年から1880年の間に丸釘が使用されるようになったと考えられる。ただ明治17(1884)年没のSX13からは丸釘以外にも角釘が出土しているので、角釘・丸釘の同時使用期間が何年か続いたものと思われる。当遺跡には1833年～1870年代の鉄釘を検出する墓穴の資料がないため、より年代を狭めるため文献を参考にすることにする。石井研堂「明治事物起源」によると、洋釘は明治10年(1877)頃に横浜に輸入されたのが始まりであり、その後徐々に普及していき同30年には国内で洋釘の生産が開始、同20年～30年の間には和釘の使用が殆ど途絶えたとされている。

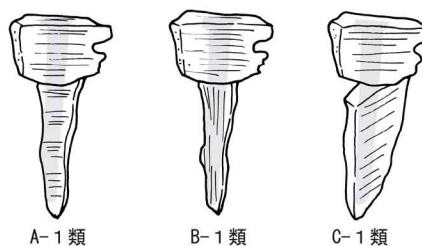
これらの文献資料から

- ・SX11出土の丸釘は輸入物の丸釘を使用したと考えられる
- ・少なくとも明治13年(1880)～同17年(1884)までは当遺跡は和釘・洋釘同時使用期であったことが判明した。

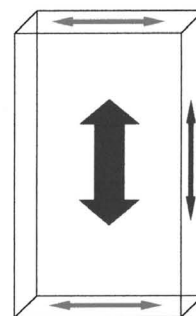
5 木質の方向から推察される木棺

中山遺跡内墓地より出土した釘の大半は木目が残存しており、『太宰府市の文化財 第42集大宰府条坊跡? 1999 太宰府市教育委員会』 「50ST320墳墓出土木棺の復元」190頁を参考に、A・B・Cの大別3形式細別6種類に分類した。

- A-1 釘の頭部付近の木目が横方向(1方向の木目)
- A-2 A-1の中でも釘の先が折れ曲がるもの
- B-1 釘の頭部付近の木目は横方向で、釘の中程から縦方向の木目(2方向の木目)
- B-2 B-1類の中でも先が折れ曲がるもの
- C-1 釘の頭部付近の木目と釘の中程からの木目同士が直交するもの(2方向の木目)
- C-2 C-1類の中でも先が折れ曲がるもの



さらに、～3cm：小釘、3cm～6cm：中釘、6cm以上：大釘と分類した。



第88図 木棺木目概念図

第16表より、木目C類の釘が平均して墓穴1基出土釘数の約70%を占めることがわかる。このことから想定される棺板材の木目方向の組み合わせは下図のようになると想定される。太線以外の箇所から釘を打ちつけた場合、C類になるはずである。太線の箇所はB類になり、木目B類となる釘打ち付け箇所…… 4辺
木目C類となる釘打ち付け箇所…… 8辺、となる。C類の釘数が多いことからC類になる場所に打たれる釘数が多かったと想定すると、第88図のような板材の方向の組み合わせの座葬用立方体箱式木棺を、残存した釘から推察することができる。人骨の出土状況から当墓地の埋葬姿勢は座葬が主であることが確認されており、これに合致する。

第16表 遺構別出土釘数

釘 木質の 方 向	小 釘					中 釘					大 釘				不明	総数 (本)			
	1方向 縦	2方向 横	3方向 縦	2本溶着 横	L字	1方向 縦	2方向 横	3方向 縦	2本溶着 横	L字	1方向 縦	2方向 縦	3方向 横	L字					
SX2															1		1		
SX4		2		5	4		2		10		9						0	32	
SX7		9	1	26	1		1	1	0	3		1						45	
SX8		1		3	1				3					1		4		13	
SX9		7		2					1						1		3	15	
SX10			1	49	2		1		3	9		2	1	1	1	1		71	
SX11		5		14			1	2			8			4		1	1	36	
SX13		2	1	36			1	2	1	4	1	4			5	2	3	63	
SX15		21		12			1			1	2							37	
SX17		24	2	47			1	7	1		3	2		1				91	
SX18		2		7				1		3	3							17	
SX19		1		2			1		1	1	3			1		3	1	2	16

平均 36.4

中山遺跡の調査は、墓地部分は墓地改葬前に調査を行うことが出来たため、墓石と墓穴の対応関係だけでなく、埋葬時に墓石建立時の目印として配置された敷石との対応関係も明確にすることができた。墓石と敷石の対応関係については調査例が少ないため今後の資料の増加に期待したい。

最後に今回の調査で明らかになった点を述べて結語とする。

- ① 中山遺跡内墓地の墓石の変遷は、大概全国的な傾向と同じである。
- ② 埋葬形態は19世紀末には早桶から全て方形棺へと推移するが、それ以前はどちらの埋葬形態も見られる。埋葬施設の選択基準ははっきりしないが、被葬者が未成人の埋葬施設は全て早桶使用と考えられる出土状況であることが確認された。
- ③ 六道銭は23基中13基より出土している。7枚組が5基と多く、必ずしも6枚でないことが確認できた。その銭面に規則性がみられる出土例も見られた。
- ④ 遺跡内墓地で使用された釘は、少なくとも明治13(1880)年～同17(1884)年までは当遺跡では和釘・洋釘同時使用期であった。
- ⑤ 釘に付着した木目から棺材の木目の組み合わせ、棺の形態を想定した結果、使用された棺の大半は座葬の際使用された立方体箱式木棺ではないかと考えられる。これは人骨の出土状況から推測される埋葬姿勢の大半が座葬である点にも合致する。

<参考文献>

- ・大分県教育委員会『机張原遺跡・女狐近世墓地・庄ノ原遺跡群—九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5)—』1996
- ・吉田寛「大分県下における近世墓地発掘調査の成果と課題—大分市域周辺の近世墓地調査事例を中心に—」『大分縣地方史』第184号 2002
- ・大分県教育委員会『中尾近世墓地—国道10号線旦の原交差点拡幅に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』1999
- ・白石太一郎・村木二郎編
「国立歴史民俗博物館研究報告第111集 大和における中・近世墓地の調査」2004
- ・谷川章雄「近世墓標の類型」『考古学ジャーナル』288号 1988
- ・白石太一郎・村木二郎編 「国立歴史民俗博物館研究報告第112集」2004
- ・江戸遺跡研究会〔編〕『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房 2001
- ・北九州市教育委員会 『京町遺跡』 1993
- ・港区芝公園一丁目遺跡調査団『芝公園一丁目増上寺子院群 光学院 貞松院跡 源興院跡』1988
- ・大分県教育委員会『小野家墓地発掘調査報告書』大分県文化財調査報告書第111輯 2000
- ・櫻木晋一「九州における近世墓調査と六道銭」『西日本近世墓の諸様相—第9回関西近世考古学研究会大会—』
関西近世考古学研究会 1997
- ・松下孝幸・松下玲子・中野江里子・松下真実・小田拓磨「宮崎県日向市中山遺跡出土の近世人骨」本報告書

第Ⅲ章 自然科学分析の結果

宮崎県日向市中山遺跡出土の近世人骨

松下孝幸*・松下玲子*・中野江里子*・松下真実*・小田拓磨*

【キーワード】：宮崎県、近世人骨、保存不良、男性骨、扁平脛骨

はじめに

宮崎県日向市大字塩見字上ノ坊に所在する中山遺跡の発掘調査が国道327号線改良工事に先立って2002年(平成14年)におこなわれた。発掘調査の結果、28基の近世墓が検出され、そのうちの13基から人骨が出土した。

宮崎県での近世人骨の出土例は、宮崎学園都市堂地東遺跡(松下・他、1982)、小林市水落遺跡(佐伯・他、1992)、高鍋町野首第1遺跡、延岡市吉野遺跡の調査・報告例の他に筆者が宮崎県史の原稿を執筆する際に鑑定した宮崎市納屋向遺跡の例(未発表)があるに過ぎない。

宮崎学園都市堂地東遺跡からは7体の近世人骨が出土した。保存状態が悪く、計測ができたものはわずかに男性骨が1体で、しかも上腕骨と大腿骨のみであったが、骨体の径はいずれも大きいものであった。水落遺跡からは17体の近世人骨が出土したが、やはり保存状態は悪く、四肢骨の計測ができたものは3体にすぎない。納屋向遺跡からは4体の近世人骨が出土したようで、頭型は男女とも中頭型であった。また、狭・高顔の可能性が予想され、男性大腿骨は骨体が太いものであった。野首第1遺跡から出土したのは下顎骨を含む男性と推定された頭蓋と肩甲骨の一部のみである。保存状態が悪く、頭型が長頭型に傾いていたことを知ることができたにすぎない。吉野遺跡から出土したのは男性と思われる頭蓋の一部と歯であるが、保存状態は著しく悪く、頭型や顔面の特徴などを明らかにすることはできなかった。

九州でもっとも多く近世人骨が出土しているのは福岡県で、北九州市の上清水遺跡(松下・他、1992a)、宗玄寺跡(松下、1995)、普濟院跡(松下、1996a)、京町遺跡(松下、1993)、下到津遺跡(松下、1998c)、京町遺跡第3地点(生往寺)(松下、2002)、福岡市天福寺(中橋、1987)、犀川町の古川平原遺跡(松下、1997b)などの例がある。熊本県の例としては、牛深市の桑島(立志、1970・脇、1970)、八代市の川田京坪遺跡(松下・他、1980a)、興善寺町の四郎丸遺跡(松下・他、1980b)、球磨郡五木村の頭地松本B遺跡(松下、1999b)、人吉市の蔵^{くらんじょう}城遺跡(松下、1999c)、相良村の野原遺跡、南関町の鷹の原城跡(松下、2003)などがある。

今回中山遺跡から出土した人骨は13体と宮崎県ではやや多い方であるが、保存状態は1例を除いてあまり良くなかった。残存量は多くはなかったが、その割には計測や観察ができるものがあり、また興味ある所見を得ることができたので、その結果を報告しておきたい。

*Takayuki MATSUSHITA・Reiko MATSUSHITA・Eriko NAKANO・Masami MATSUSHITA・

Takuma ODA

The Doigahama Site Anthropologica Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

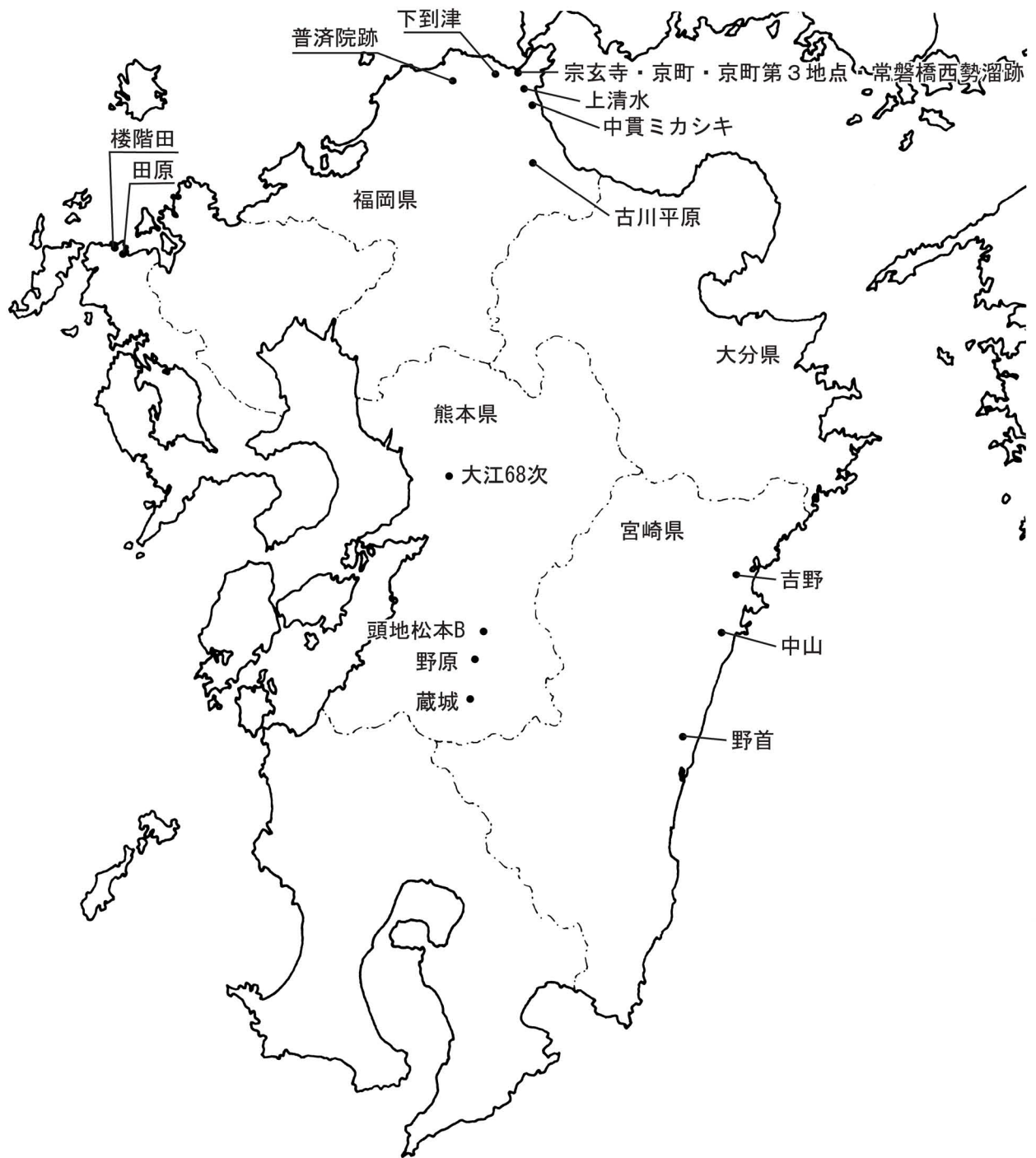


図1 遺跡の位置 (1/25,000) (Fig.1 Location of the Nakayama site, Hyuga City, Miyazaki Prefecture)

資 料

今回の発掘調査で13基の墓壇から13体分の人骨が出土した。副葬品としては人骨が残存していた墓壇では銅銭や玉類が認められた。13体の人骨のなかには幼小児骨は存在しない。SX5は墓碑銘からは未成人と推測されるが、人骨からは若年者の特徴が読みとれない。従って、一応13体すべて成人骨としておきたい。表1に示すように、13体のうち男性は7体、女性は3体で、性別を明らかにできなかったものが3体あった。

これらの人骨群は、副葬されていた遺物などの考古学的所見から近世に属すると推測されている。

なお、性判別については所見の項でそれぞれの個体ごとにその推定根拠を挙げた。各人骨の性別・年齢については表2のとおりである。また、年齢区分に関しては表3の基準のとおりである。

表1 資料数 (Table 1. Number of materials)

成人			幼小児	合計
男性	女性	不明		
7	3	3	0	13

表2 人骨一覧 (Table 2. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	姿勢(葬位)	頭位	顔の向き	死亡年	戒名	俗名	享年
SX2	不明	不明	不明	不明	不明	天保4年(1833年)	正大先達法印位		61
SX3	男性	熟年	不明	不明	不明	天保9年(1838年)	観空了義信士位		58
SX4	男性	不明	不明	不明	不明		釋信慧正定聚位		
SX5	女性	不明	不明	不明	不明	文化12年(1815年)	妙英童女	いさ	
SX7	男性	老年	坐葬	北	南	文政8年(1825年)			88
SX8	男性	不明	仰臥屈葬	北	南				
SX9	不明	不明	坐葬	不明	不明				
SX10	女性	不明	仰臥立膝	北西	南東	明和6年(1769年)	俳月妙観信女?		
SX11	女性	老年	坐葬	北西	南東	明治13年(1888年)	釋尼了誓正定位	マツ	72
SX13	男性	不明	不明	不明	不明	明治17年(1892年)	寶壽院南岳		79
SX15	不明	不明	不明	不明	不明	文化14年(1817年)	心蓮妙榮信女		
SX17	男性	不明	坐葬	南	北	安永9年(1780年)	阿闍梨法印快真		
SX19	男性	壮年	坐葬	南	北				

表3 年齢区分 (Table 3. Division of age)

年齢区分		年	齢
未成人	乳児	1歳未満	
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)	
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)	
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)	
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)	
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)	
	老年	60歳以上	

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所 見

1. 出土状態(埋葬の姿勢)

人骨の残っていた13基の墓壙では人骨から埋葬された時の姿勢を推測することができたものがある。SX4では大部分の人骨が既に取り上げられており、死床に残っていたのは大腿骨のみであったので、姿勢を正確には明らかにすることができなかった。SX9では墓壙中央部に頭蓋片が残存していたに過ぎないので、これも埋葬の姿勢を明らかにできなかったが、頭蓋が墓壙の中央部に位置していたことから、SX9の姿勢は坐位(坐葬)であったと思われる。SX11では下肢骨が立った状態で検出されており、頭蓋も墓壙の中央部から出土しているため、坐位(坐葬)であったと思われる。SX10は、下肢骨は立った状態で出土したが、頭蓋がかなり離れて検出されており、頭蓋の位置は棺の端に相当する。従って、SX10では立膝の仰臥状態だったと考えられる。SX7では人骨の残存量が比較的多く、埋葬姿勢を判別することができた。人骨が狭い範囲にまとまって検出されており、四肢骨や頭蓋の位置から、埋葬姿勢は坐位(坐葬)である。SX8では、墓壙が長方形で下肢骨は膝関節を強く曲げた状態で立っておらず、大腿骨が下で、その上に脛骨がのっており、下半身は仰臥状態である。また、頭蓋は下肢骨からかなり離れた位置から検出されており、人骨の出土状態からSX8は他の墓壙とは異なり、仰臥の屈葬状態である。SX15では人骨の保存状態がかなり悪く、埋葬姿勢を推測することができなかった。SX17とSX19ではある程度人骨が残存しており、人骨の位置関係から両被葬者とも埋葬の姿勢は坐位(坐葬)であった。

すなわち、人骨がある程度残存しており、頭蓋と四肢骨の位置から埋葬の姿勢を推測することができたのはSX7、SX8、SX10、SX11、SX17、SX19の6体、頭蓋の位置から推測できたのはSX9の1体で、埋葬姿勢を明らかにできなかったのは、SX2、SX3、SX4、SX5、SX13、SX15の6体である。埋葬の姿勢を明らかにできた7体のうち5体は坐位であるが、残りの2体(SX8、SX11)は仰臥である。SX8の場合は墓壙が長方形であることと人骨の出土状態から寝棺と思われるが、SX10では寝棺ではなく、墓壙の形態から坐棺だった可能性が強い。被葬者が女性であることから推測すれば、本来は被葬者を座らせて納棺したが、体が小さかったために、死床が相対的に広くなり、立てていた上半身が滑って寝てしまっ、結果的に上半身が仰臥状態になった可能性もある。

2. 人骨所見

SX2(性別・年齢不明)

残存していたのは左右不明の大腿骨片1片のみである。性別・年齢は不明である。

SX3(男性・熟年)

1. 頭蓋

残存していたのは頭蓋片、右側尺骨、左側大腿骨、左側脛骨である。

頭蓋は右側の乳様突起基部周辺部分である。乳突上稜はよく発達している。ラムダ縫合の一部が観察できたが、内板は癒合閉鎖している。

2. 四肢骨

(1) 尺骨

右側骨体が残存していた。計測はできないが、径は大きい。

(2) 大腿骨

左側骨体が残っていた。計測はできないが、径はあまり大きくはない。

(3) 脛骨

右側骨体が残存していた。前縁部分を大破しているため、計測はできない。

3. 性別・年齢

性別は、乳突上稜がよく発達していることと尺骨体の径が大きいことから、男性と推定した。年齢は観察できたラムダ縫合の一部では内板が癒合していることから、熟年の可能性が高い。

S X 4 (男性、年齢不明)

残存していたのは、右側大腿骨と右側脛骨および左側腓骨である。

右側大腿骨は骨体片2片で、前面と後面のみなので、計測はできないが、骨体の径は大きい。脛骨は右側の近位部で、これも計測ができない。腓骨は骨体のごく一部で、計測はできないが、骨体の径は細い。

性別は、大腿骨の径が大きいことから、男性と推定した。年齢は不明である。

S X 5 (女性、年齢不明)

残っていたのは左側乳様突起基部周辺部である。乳様突起は大きくはなく、また乳突上稜もみられない。以上のことから、性別は女性の可能性が高い。年齢は人骨からは推測できない。墓碑銘からは童女が埋葬されていたことになっているが、頭蓋壁は厚く、未成人を思わせる特徴はみられない。少なくとも幼小児の頭蓋ではない。もし未成人としても20歳前の成年としか考えられない。

S X 7 (男性・老年)

頭蓋、四肢骨および肋骨片が残存していた。

1. 頭蓋

頭蓋は左側側頭部から後頭部にかけて残っていた。乳様突起は大きいですが、外後頭隆起は観察できない。ラムダ縫合左側と左側の鱗状縫合が観察できたが、両縫合とも大部分が内外両板とも癒合している。

2. 四肢骨

(1) 上肢骨

右側上腕骨頭と右側橈骨および肩甲骨片(左側外側縁)が残存した。上腕骨頭は潰れており計測できないが、径はやや大きい。橈骨は右側骨体の一部にすぎないが、橈骨粗面は大きく、骨体もかなり大きい。

(2) 下肢骨

① 大腿骨

両側の骨体が残存していたが、計測ができたのは右側のみである。骨体の径はやや大きく、粗線の発

達も良好である。

計測値は、骨体中央矢状径が30mm(右)、横径は28mm(右)で、骨体中央断面示数は107.14(右)となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。骨体中央周は92mm(右)で、骨体は太い。

② 脛骨

右側骨体の近位部が残存していた。計測はできないが、径はかなり大きい。

③ 腓骨

右側の骨体近位部が残存していたにすぎないが、径は大きいようである。

3. 性別・年齢

性別は四肢骨の径がかなり大きいことから、男性と推定した。年齢はラムダ縫合と鱗状縫合が内外両板とも癒合閉鎖していることから、老年と思われる。

S X 8 (男性・年齢不明)

残存量は少ない。頭蓋と下肢骨が残存していた。頭蓋は右側側頭骨と右側下顎枝のそれぞれ一部である。

大腿骨は左側骨体の後面が残っていた。計測はできないが、骨体の矢状径はやや大きく、粗線の幅は狭いが、後方へよく発達している。

脛骨は両側の骨体遠位部が残っていた。骨体の径は大きい。

性別は、脛骨体の径が大きいことから、男性と推定した。年齢は不明である。

また、人骨の他に鳥骨が1点検出された。

S X 9 (性別・年齢不明)

頭蓋片などが残っていたにすぎない。頭蓋は左側側頭骨と鱗状縫合で接する左側頭頂骨の一部のみである。乳様突起の様態は不明である。また、乳突上稜は発達していない。頭蓋の他に右側橈骨の遠位端の一部が残存していた。性別、年齢は不明である。

S X 10 (女性、年齢不明)

下顎骨の一部、遊離歯および下肢骨が残存していた。下顎骨は右側の筋突起のみである。遊離歯を歯式で示した。

／／／／／／／ 2 1	／／／ 4 5 ／／／
／／／／ 4 ／／／	／／／／／ 6 ／／

〔●：歯槽閉鎖 ○：歯槽開存 ▼：先天的欠損 ■：未萌出 ／：不明、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小白歯、5：第二小白歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度はBrocaの1度(咬耗がエナメル質のみ)である。

大腿骨は両側の骨体が残っていた。両側とも計測はできないが、径は細く、粗線の発達も良好である。脛骨は左側骨体が残っていた。長さは長そうであるが、骨体は細い。腓骨は左側骨体が残っていた。径は細い。

性別は四肢骨が小さいことから女性と推定した。年齢は不明である。